

トハ、其地ノ何レニ在ルヲ問ハズ、土耳其帝國ニ歸シテ奪フ可カラサルノ權利アル者ナリト、ソリマンハ前回ノ戰捷ニ際シテ、ブーダノ宮殿ニ寢テタリ、而シテ當時此ノ宮殿ヲ焚滅セサリシ所以ノ者ハ、其再ヒ此ニ回歸スルコトアルヲ思ヒタレハナリト、此ノ如キ理由アルヲ以テ匈牙利全國ハ宜ク土耳其ニ屬スベシト云ヘリ、フェルヂナンドハ尙ホ和議ニ意アリ、而シテ其最後ノ手段トシテ、更ニ使ヲ發シテ書ヲソリマント其宰相イブラヒムト贈リテ、最モ謙讓ノ辭ヲ用ヒ、且使節ニ訓令ヲ合マシメ、毎歲大額ノ贈金ヲ爲サンコト言ヒ送レリ、但年金ノ名義ヲ用ヒタルハ、貢金ノ卑辭ニ涉ルヲ避ケタルナリ、此ノ如キ點マテハ、フェルヂナンドモ卑下スルコト甘シタリシト雖モ、嗚呼時既ニ後レタリ、八月下旬使節ノカルパ河上ノモットリングニ達スルニ先ツテ、ソリマンノ大軍既ニ進ミテ、夫ノ盛戰血ヲ流シタルモハツ、ノ平原ニ屯セリ、此平原ハ匈牙利國ノ精兵屠殺セラレタル所ナルニ、ジョンハ匈牙利ノ貴族多數ヲ卒ヒテソリマンニ此地ニ會見シ、臣節ヲ尽スヘキノ誓ヲ爲セリ、ジョンハ盛大ノ儀式ヲ以テ待遇セラレ、土耳其帝ノ掌ヲ嘗ムルヲ許可セラレタリト雖モ、匈牙利世傳ノ寶器ナ

ザボリア再
ビ即位ノ式
ヲ行フ

ソリマン維
納子國ム

ル聖、ステフニンノ冠ハ、ソリマンノ有トナリタリ、此冠ハ王位ヲ爭フタル兩主ノ頭ヲ飾リタル者ナリキ抑モハツ、ノ一戰後、土耳其ノ疆土大ニ拓ケ、ボスニア、クロウシア、ダルメシア、スラヴオニア、皆其有トナリ、又ボスニアニ於テ匈牙利ノ最後ノ砦壁トモ云フベキジエイクザハ、千五百二十八年ニ陥リ、該州及ビ近傍ノ州ノ諸小地相繼テ陥レリ、此ノ如クニシテ最早土耳其兵ノ進行ヲ欄阻スヘキ所一モアルコトナシ、何ントナレハ南匈牙利ハ皆ジョンノ黨ノ有スル所タルヲ以テナリ、千五百二十九年九月三日、ソリマン再ビブーダノ城壁外ニ迫リ、攻圍五日ニシテ之ヲ拔ケリ、其未タ降ラサルニ當リ、ソリマン戍兵ニ約スラク若シ降ラハ助命セント其降ルニ及ビ、シニニスサリ、捷ニ乘シ之ヲ虐殺シテ、ソリマンハ之ヲ救フコト能ハサリキ、而シテザボリア即チジョン王ハ、再クヒ此地ニ即位ノ式ヲ行ヒ、土耳其ノ一將加冠ノ職ヲ勤メタリ、

ソリマン親カラ軍ヲ率ヒ維納府ニ迫リテ之ヲ圍メリ、而シテフェルヂナンドハリ
ヅニ屯シテ日耳曼諸公侯ノ約シタル援兵ノ來リ集マルヲ待テリ、此時ニ當リ反對敵

黨ト雖也(日耳曼新教黨ハ是年ノ春スピールノ會議ニ於テ有名ナル反對説ヲ立タル
 ニヨリ今ハ反對教黨ノ名ヲ得タリ)荷ホフニルヂナンドニ援兵ヲ出スヲ拒マス、サ
 キソニー撰擧侯ジヨンモ亦其子ヲシテ二千人ニ將トシテ赴援セシメタリ、土耳其ノ
 兵勢三十万人ニシテ大砲三百門アリ、又強大ナル船隊ヲダニユーブ河ニ泛ヘリ、日
 耳曼ノ兵之レニ對シテ維納ヲ扞禦セルヲ、十六世紀ニ在リテ、日耳曼史上戰爭紀事
 ノ最も顯赫ニシテ觀ルベキ者トス、九月二十一日土耳其騎兵ノ前隊維納ニ達シ、數
 日ニシテ其四面ヲ合圍シタリ、少數ノ匈牙利兵土軍ニ從屬シタリシト雖也、夫ノ將
 オナク勇氣モナキジヨン王ハ、三千ノ土耳其兵ト共ニブーダニ駐屯シタリ、聖ステ
 フェン^{セント}ノ城上ヨリ遠望スルニ、土軍ノ帳幕山谷平野ヲ蔽フテ數里ニ互リ、船隊ノ白
 帆ハ遠クダニユーブ河邊ニ照映セリ、ソリマンハ現ニ火藥庫ヲ設クルノ地トナレル
 シムメリング村ニ扎營シ又近頃陸軍大將ニ任シタルイブラヒムハ攻圍ノ軍ヲ指揮
 セリ、抑々維納ノ城壁ハ、原來堅牢ナラサルノミナラス、久ク其修理ヲ怠タリ、又大砲
 ナ備フヘキ砲臺ヲ缺キタリ、之ヲ守ルノ兵ハ日耳曼諸部ヨリ徵集セル者、及ヒ少數

ノ西班牙人ヨリ成ル者ニシテ、二万ノ歩兵二千ノ騎兵アリ、之ヲ都督スルノ將ハヴ
 アジエリア公フ非リツアナリ、其有スル所ノ大砲僅カニ七十二門ニ過キスト雖也、之
 ヲ配置スルヲ極メテ巧ミナリキ、維納ノ府民皆勇ヲ奮フテ兵士ト競争扞守シ、埃國
 貴族ノ長「シユワルゼンベルグ」家「スノーレムベルグ」家「オーニルスベルグ」家「リッ
 チニンスティン」家等ノ如キ皆出戰者ノ中ニ在リ、サルムノ老練ナルニコラス最モ
 此間ニ功名ヲ著ハセリト云フ、戰ニ先クテソリマン使テシテ城中ニ言ハシメテ曰
 ク、城兵速カニ降ラバ、予ハ府内ニ入ラサルヘク、唯フェルヂナンドヲ搜索スルニ止
 マルヘシ、若シ降ラズシテ抗戰ヲ爲サン耶、三日内ニ之ヲ攻破シテ維納府中ニ大發
 テ食セントス、此期ニ及ビテハ、府中ノ民一人モ其生ヲ得ス、胎中ノ兒子ト雖也免ル
 、能ハザルベキナリト、府兵答ヘス、益々扞守ノ意ヲ決シテ、之レカ準備ニ着手シタ
 リ、然リト雖也其必勝ノ望アルニアラザルナリ、又土耳其軍ニ於テモ攻陷ノ手段一
 致整頓シタリト云フニアラズ、傳聞スル所ニヨルニ、土軍ハ別レテ十七團ノ別隊ト
 ナリ、其各隊特殊ノ場所ト特殊ノ目的トヲ有シテ各自ノ働ヲ爲セリト、此等ノ諸隊

ソリマンノ
退軍

屢々侵攻レテ城壁ヲ毀壞シタリト雖也、常ニ守兵ノ爲メニ却ケラレタリ、遂ニ同年十月十四日最後ノ攻撃ヲ爲シ、同夜ヲ以テ退軍ヲ初メタリ、此退軍ニ至レル所以ノ者種々ノ理由アリ、此ノ如キ大軍長ク合圍スルニハ糧食乏シキヲ告クルヲ必然ニシテ、二万二千ノ駱駝ヲ用井テ麵粉ヲ運送シタリト雖也、遂ニ給足スル能ハサリキ、又ミケールマスニ於テハ「ジエニスサリー」兵既ニ寒氣ニ苦ムヲ訴フルアリ、之レニ加フルニ敵方ハ日耳曼及ビホヘミアノ援兵日ニ到着スルニ至リタリ、且土耳其兵ノ此ニ侵入スルニ當リテヤ、其常習ニ從ヒ焚燬破壞ヲ事トシテリンツノ城門ニ至ルマテ全土荒涼ノ狀ヲ現ハサ、ルハナシ、サレハ其退軍ノ時ニ及ヒ、忽チ其應報トシテ多ク不幸ヲ蒙リタリ、乃チ敵ノ兵乃ヨリ害ヲ蒙リタルノミナラズ、田野ニ取ルハキノ食ナクシテ飢困ニ苦ミ加之風雨ニ遭ヒタルヲ以テ十一月十日ニ及ヒテ纔ニベルグレードニ達スルヲ得、而シテソリマンハ十二月十六日ヲ以テコンスタンチノーブルニ歸リタリ、

バルセロナノ和約及ヒカムブレノ和約成リタルニヨリ、日耳曼帝其ノ兵ヲ意太利

フエルダナ
ンドザボリ
アト休戦チ
約ス

ニ用井ルコト既ニ已ミ、之ヲ日耳曼ノ國事ニ移用スルヲ得ルニ至レリ、是ニ於テカ土耳其帝ソリマンハジョン、ザボリアヲ厚待シテ、之ヲシテ其外屏トナスノ利タルヲ思惟シ、其維納ノ圍ヲ解テ退軍歸國スルノ途次、ブーダニ過リ、ジョンヲ見テ、先キニ獲タル聖「ステフニン」ノ冠及ヒ他ノ王位ニ附屬スル器具ヲ以テ之レニ還附シタリ、又匈牙利ノ貴族ニ告クルニ新王ニ臣從スヘキヲ以テシ、ジョン王ニ任スルニ匈牙利防禦ノ事ヲ以テシ、且機ニ臨ミテ應援スヘキ旨ヲ約シタリ、フエルダナンドハ土耳其兵ノ退キシ後尙ホプロスボルグヲ保守シ、ザボリアト戰テ捷利ヲ得タリシガ、軍費乏シキヲ告ゲテ其功ヲ全フスル能ハザリキ、又日耳曼帝チヤールスハ熱心ニ宗教改革ニ反對シタリシガ故ニ、宗教ノ爭論變シテ内乱ノ小争鬪トナリタリ、千五百三十二年ノ終リニ及ビ、フエルダナンドノ將ローゲンドルスザボリアチブーダニ圍ミテ克タス、而シテフエルダナンド今撰舉セラレテ羅馬人民ノ王トナリシヲ以テ、心ヲ帝國ノ事ニ專バラニセント欲シ、漸ク平和ヲ望ムニ意アリ、千五百三十一年一月三十一日ニ於テ三ヶ月間ノ休戦ヲ約シ、繼テ延期シテ一年ニ至ルヘキノ約ヲ成セリ、又土

耳其帝ソリマンハ維納ヨリ歸ルノ後、千五百三十二年ニ至ルマアハ、再ヒ匈牙利ニ入ラザリキ、而シテ匈牙利王國ノ史ハ暫ク記スヘキノ事ナシ、今將サニ筆ヲ轉シテチャールン五世及ビ日耳曼帝國ノ記事ニ入ラントス、

保田久成 校閱

第十三篇終

近泰西通鑑

ダイアー 著

嶋田三郎 譯

第十四篇

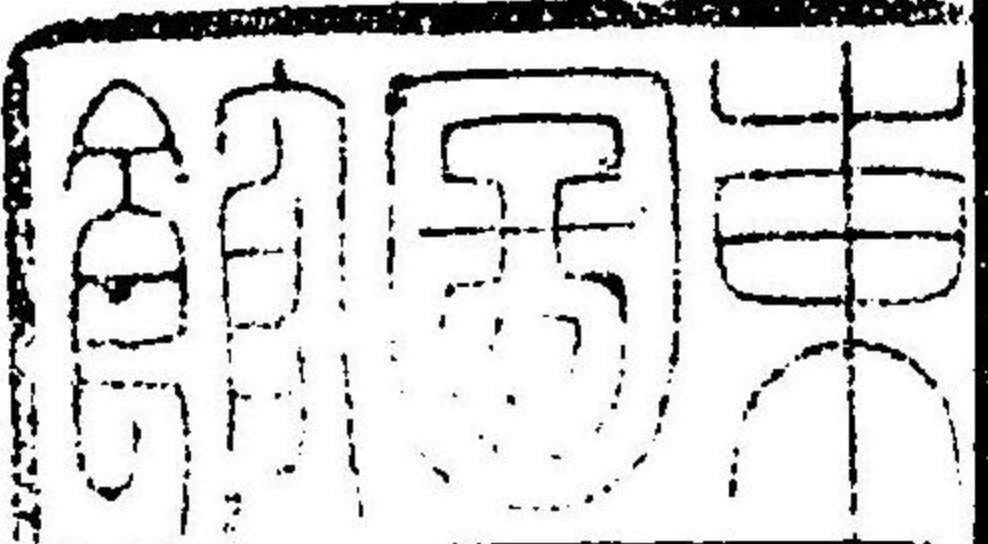
○千五百三十六年チャールン五世佛國ヲ襲フニ至ルマアテ歐洲ノ景況

チャールン五世意大利ニ赴ク

チャールンノ行爲

カムブレリーニ於テ商議未ダ決セサルニ際シ、皇帝チャールン五世ハ西班牙ヲ發シテ意大利ニ向ヘリ、是レ意大利ニ於テバルセロナ條約中ニ定メタル基礎ニ從ヒ一般ノ平和ヲ計リ、餘子テ法皇ノ手ヨリ皇帝ノ冠ヲ受ケント欲シテナリ、帝八千ノ西班牙兵ヲ從ヘ、西班牙ノ衆貴族ヲ率ヒテ、千五百二十九年八月十二日ゼノアニ上陸シタリ、ゼノア共和國ハ現ニ皇帝ノ保護ヲ受クル者ニ係レリ

此ノ如ク海路ニ由リテ意大利ニ赴キタル時ヨリシテ、チャールン五世皇帝ノ生涯ニ新クナル期限ヲ起シタリ、蓋シ是ヨリ以前七八年間、チャールン五世ハ安全ニ西班牙ニ住居シ、百般ノ事擧テ之ヲ其相將ニ委任シタリケレバ、皇帝ノ兵威四疆ニ輝キ、屢々大捷



ヲ獲タリシト雖也、其實皇帝ノ親カラ國事ニ與カルコハ甚ク希ナリシナリ、故チ以テ人皆皇帝ヲ以テ暗弱ナリトナシ、臣下ノ制御ヲ受クル者ナリトナセシニ、是ニ至リ全ク前日ニ異ナルノ面目ヲ現ハシテ以テ衆人ニ一驚ヲ吃セシメタリ、乃チ是マテ韜晦シタル天資ヲ顯ハシテ、外國ニ對スル商議ヲ辦理シ、其兵隊ヲ指導シ、歐洲ノ諸部ニ親臨ヲ要スル所アレハ一モ到ラサル所ナキニ至レリ、蓋シ皇帝常ニ進取ノ二字ヲ以テ身ヲ處スルノ規程トナシタリト雖也、亦終始沈着慎重ヲ缺クコナカリキ、其議論思想最モ周密委曲ヲ盡シ、人ニ對シテ答ヲ爲スニ當リテハ、初メ大抵曖昧不明ノ狀アリ、是レ其再思ヲ盡スノ餘地ヲ留メンカ爲メナリ、而シテ其決定ハ必ス焦思苦慮ノ後ニアラサルコトナク、命ヲ傳フルノ有司ヲ召スノ後、尙ホ考思ヲ費スカ爲メニ往々其レヲシテ待ツコト數日ニ至ラシムルアリト云フ、然レモ一タヒ意ヲ決スルハ確守シテ變セス、屢々頑固ノ態ニ陥ルコトアルハ、チヤーレンスモ亦自認スル所ナリ、其謀議ノ臣ハ獨リガツチチーラアリ、千五百二十年ニガツチチーラ死スルノ後、ベレノット、ド、グレンツ井ル繼テ謀臣タリ、帝ノ軀質ニ至リテモ亦容々其心狀ニ類ス

ル者アリ、帝甲冑ヲ裝フニ當リテハ四肢顛動シテ己マズ、其一タヒ之ヲ着ケタル後ハ、勇氣一身ニ溢レ、謂ヘラク皇帝タル者ハ弓矢ニ中タリタル例ヲ聞カスト、其容貌ニ於テモ亦變更ヲ現ハセリ、蓋シ捲髮ノ髮々タルハチヤーレンス一家ノ風ナルニ、海路ノ安全ヲ祈ルニ托シテ之ヲ剪斷シタリ、然レモ其實ハ頭痛ノ患アルカ爲メナリチヤーレンスノゼノアニ在ルニ當リ、フロレンスノ國民使節ヲ送リテフロレンスヲゼノアト同等ノ位置トナシ、チヤーレンスノ保護ノ下ニ立テ一共和國トナランコトヲ請ヘリ、蓋シフロレンス人ハ皇帝法皇相約シテ其國ノ自由ヲ奪ハントスルヲ未ダ知ラザレハナリ、チヤーレンス此使節ニ對シ峻厲ノ言語ヲ以テ其佛國ト通スルコトヲ非難シ、已レニ對スルノ無情ナルコトヲ非難シ、而シテ法皇クレメントニ約シタル旨ニ違ヒ、メヂシ「家ヲ興復スヘキ」ヲ以テシタリ、然ルニフロレンス人チヤーレンスノ命ニ應ゼザルヲ以テ、チヤーレンス乃チオレンジ公ニ命シテフロレンスヲ圍マシム、是ニ於テ十月十四日公遂ニ此府ヲ圍メリ、

フロレンス

フロレンスハ其往古顯赫ノ名譽ニ背カサル防守ヲ爲シテ而後ニ陷レリ、其此ノ如キ

征服セラル

防守ヲ爲セシ所以ノ者ハ、主トシテ自由愛國ノ感情迫切ナルニヨラスンハアラス、
 其人民及ヒ僧侶特ニ「サンマルコ」〔按寺庵ノ名〕僧侶最モ勇敢ノ氣象ヲ現ハセリ、國民其
 府城ヲ防守スルニ便センガ爲メニ城外周圍一英里ノ間ニ在ル所ノ華麗ナル園地郊
 地別莊皆之ヲ破壊シテ野ヲ淨メタリ、其狀恰モサヴオナロラ〔按「フロレンス」有名ノ
 僧ニシテ禁慾清淨ノ義
 主張ノ共和國ヲ再興シタルカ如ク、耶蘇ノ王國ヲ出現シタルカ如シ、而シテ城堡
 守禦ノ總督ハ之ヲ有名ナル雕工ニシテ且需工ナルミケエル、アンジエイロニ委任シ
 タリ、此人其工技ノ外他ノ点ニ於テハ勇士ノ性能ヲ現ゼズシテ、敵ノ進入スルニ及
 ヒテハ他ノ人民ト共ニ逃避シタリシト雖トモ、其守禦ノ工夫ニハ非常ノ巧妙ヲ示シ
 テ百五十年ノ後ニ及ビ「ヴァウバン」〔按佛國有ノ注意ヲ喚起シタリキ、フロレンスノ
 名ノ工師〕兵ヲ指揮セシ者ハ、有名ナル「コンドツチエル」〔注〕第一卷百二十葉及ビ同百
 三十四葉ノ註ニ見ヘタリマラテス
 タ、バグリオニ及ビ「フランシス、フェルラクシナリ、フランシスコ、フニルラクシハ軍
 人ニ生長シタルニアラザレドモ、エムポリノ防禦ニ軍事ノ大才ヲ顯ハシタル人ナリ、
 余ハ今將サニ「フロレンス」ノ國運終リヲ告ケタル艱難ノ事情ヲ記セントス、フェルラ

クシ、バグリオニノ兩將ハ府内ニ於テ防禦シタルノミナラス、更ニ進ミテオレンシ公
 ト野外ニ鏖戦シタリシガ、遂ニ千五百三十年八月三日ガヴ井ナ、ノ一戦ニ於テ大ニ
 敗績シ、フェルラクシハ虜獲殺害セラレタリ、然レトモ敵ノ大將オレンシ公モ亦此
 交戦ニ斃レタルヲ以テ、マンチユア公ノ同胞フェルチナンド、ゴンザガ代テ其軍ニ將
 タリ、此敗軍ノ後バグリオニ一人軍ニ將タリシガ（此人ハ前ニベルギア公タリシ者ナ
 リ）終ニ法皇ト秘密ノ商議ヲ爲スニ至レリ、是レ其意タル其前キニ領シタルベルギ
 アヲ恢復スルノミナラズ、併セテ其近地ヲ収メントスルニ在リ、大將ノ志既ニ變シ、
 又防禦ニカマル能ハズ、遂ニ八月十二日ヲ以テ約ヲ定メテ投降セリ、是ニ於テ皇帝
 ノ軍「フロレンス」ニ黄金八万「クラウン」ノ償ヲ徵シ、質子ヲ出サシメ、戍兵ヲ府中ニ屯
 駐シ、又法皇ト皇帝ト合議シテ定メタル國憲ヲ採用スヘキ旨ヲ令シタリ、フロレン
 ス國民ハ原來「ギエルフ」〔按「ギエルフ」ハ意大利諸國ノ黨派ノ名ニシテ、ギベリンニ
 反對スル者ナリ其詳ナルコトハ第一卷百二十一葉ニ見ニ
 ニ〕嘗テ皇帝ノ干渉ヲ受ケサリシカ、是年十月廿八日皇帝ノ勅命ニヨリテ國憲ヲ公
 布セラル、ニ至リタリ、其制タル共和國ノ外相ハ固ヨリ保存セラレタリト雖ヒ、政

府ノ長ハ「メジシ」家ノアレンスサンドロヲ以テ之レニ充テ、公ノ稱号ヲ附シ、且其男統ニ位ヲ相續セシムルコトトナレリ、其他ノ点ニ就テハ、フロレンス人民古代襲受ノ權利ヲ保存セリ、之ヲ保存スト云フモ擅制政府ノ下ニ在テハ其真ニ然ルヤ否ヤヲ保スル能ハス故ニ若シ斯ル保存ニ其實アリトセハ「アレンスサンドロハ少年淫蕩ノ人ナリ後ニ皇帝チヤールスノ女マーガレットトテ娶レリ此女ハ則チフランダースノ一婦人マーガレット、ゾアン、ギーストトチヤールストノ間ニ擧ケタル者ナリ是ニ至リテ盛大ナルフロレンスノ共和國亡ビタリ、此共和國ハ純然タル民政ニモ非ス又擅制公國ニモ非サリシ者ナリキ佛王フランシスハフロレンスノ皇帝ニ抗スル初ニ當リ之ヲ援助スルヲ約シタリト雖モ約ニ背キテ此ノ舊來親厚ノ同盟ヲ委棄シテ毫モ之ヲ助ケザリキ而シテ法皇モ亦其降ルニ臨ミテ約シタル條款ヲ破レリ故ニフロレンスノ大族市民或ハ法架ニ死シ、或ハ己ムヲ得ス奔竄スル者アリ、フオイアノート稱スル僧ハ其說教ニ因リ市民ヲ激シテ戰ニ力メシメタル者ナルガ、法皇クレメント之ヲ聖アンジエイロノ牢獄ニ投シテ餓死セシメタリ、ミケールアンジエイロモ亦攻具ヲ

チヤールス
及ビ法皇ホ
ロニヤニ駐
マル

修メタルノ故ヲ以テ刑ヲ受クベカリシニ、其技能卓絶ノ故ヲ以テ特赦ヲ蒙リ、ニキスタイン寺ノ壁ヲ畫クノ功ヲ竣ヘシメタリ、チヤールスハゼノアヨリ進ミテ容易ニポロニヤニ赴キ千五百二十九年十一月五日盛儀ヲ整ヘテ此府ニ入レリ、法皇クレメント此ニ來リテ皇帝ノ到ルヲ待チ、其初メテ相會スルニ際シ、チヤールス古禮ニ因リ跪テ法皇ノ手足ヲ嘗ム、法皇モ亦此禮ヲ受ルカ爲ニ推辭ヲ爲シ、ニタビ帝ト接吻シテ且其好意ヲ謝シタリ、皇帝法皇互ニ出入來往スヘギ一戸ヲ有セル運室ノ家ニ居リ、而シテ各々戸ヲ啓クヘキ鍵ヲ有セリ、此地ニ任スルニ數月ニシテ意大利ヲ鎮撫スルノ諸事ヲ經營セシカフロレンスハ獨其經畫ニ與カラザリキ、是年ノ夏土耳其帝ソリマンノ維納ニ進入スルニ當リテヤ、北部意大利ノ人チシテ土耳其人ニ頼リテ壤地利家ニ抗スルノ勢力ヲ保持スルノ意ヲ發セシメタリ、ヴェニス、ミランノ二國合從ノ約ヲ固クシ、又ロンバードニ於テモ兵端ヲ啓キタリ、然ルニソリマン急ニ圍ミテ解キ兵ヲ引テ還ラタルヲ以テ、此等ノ諸國反旗ヲ樹ルハ假令成

効アルモ小利ヲ得ルニ過キズシテ、敗ル、キハ不測ノ危険アルヲ思ヒ、敵對ノ謀ヲ中止スルニ至レリ、既ニシテヴエニース人其地疆ヲ拓クノ時期ハ去リタルヲ覺リ、此時ヨリ西班牙ト聯絡シテヴエニースノ史上ニ新奇ノ狀ヲ現スルニ至レリ、即チバルセロナノ條約ニヨリテヴエニースニ示セル簡條ニ遵ヒラヴエナセルヴ井アチ法皇ニ交還シ、アプリアニ在ル所ノ諸港ヲチヤールニスニ納レ、且巨額ノ銀金ヲ拂フコト是ナリ、チヤールニスニ納レタルアプリアノ地ハ、曩キニラウトレツクガテールブルスチ襲ヒテ取リタル者ナリ、又帝ハフランセスコ、マリア、スフナルザチボロニヤニ召喚シ、十二月二十三日彼レト條約ヲ締ヘリ、是ニ由リテフランセスコ、マリア、スフオルザハ巨額ノ金ヲ納レ、之ニ代ヘテミランチ保有セリ、但此金ヲ完納スルニ至ルマデハ、ミラン及ヒコモノ塞壁ヲ以テ其抵當ト爲シ兵ヲ置テ之ヲ守レリ帝又スフオルザノ臣服ヲ固センカ爲メニ其姪クリスチナチ以テ彼ニ嫁セリ、クリスチナハ噫國ノ王クリスチアン二世ノ女ナリ、又バヅ井アチ立テ一公國トナシ、アントニオ、デ、レイヴァチ以テ終身之ヲ領セシメ、又フェルラ、公ハ其先ニ侵攻シテ収メタル某々

ノ都邑ヲ還付シテ平和ノ約ヲ許サル、コトヲ得タリ、サヴオイ公モントフ、エルラト公モ亦皇帝ニ陪從セル諸公侯ノ列ニ加ハリ、帝ノ儀ノ盛ヲ張ランカ爲メニポロニヤニ會シタリ、而シテ帝モ亦サヴオイ公ノ同盟ヲ長ク保タンカ爲メニ佛國ヨリ得タルアスチノ公領ヲ公ニ與ヘタリ、以上記載セル諸公侯及ビフニルヂナンドト皇帝トノ間ニ盟約ヲ締ビタル者ヲ稱シテ永久ノ和約ト曰ヒ、千五百三十年一月一日其書ヲ頒行シタリ、

此時ニ際シテチヤールニスカ意大利ニ振ヒタル威權ハ極メテ強盛ニシテ、數百年間ノ皇帝中此ノ如キ例アルヲ見ザルナリ、意大利ノ諸國ハ唯皇帝ノ許可ニ因テ存シ、與亡ニ帝意ニ在ルガ如シ、是ヲ以テ其實權完全ニシテ、欲ク所ノ者ハ唯外觀ノ標号ノミナリキ(按)外觀ノ標号トハ即位戴冠ノ式ヲ云フ而シテ其標号モ幾時ナラスシテ之ヲ添加シタリ、蓋シチヤールニスノ意大利ニ入ルヤ、第一ニ羅馬ニ於テ即位戴冠ノ式ヲ舉行シ、尋テチールブルスニ赴カント欲シタリシカ、其弟フェルヂナンド直チニ日耳曼ニ行クノ必要ナルコトヲ陳シテ固ク之ヲ請フタルニヨリ、當初ノ意思ヲ變シタリ、抑々チヤール

チヤールニス
戴冠式ヲ行
フ

スガ行ヘル皇帝ノ即位戴冠式ハ、羅馬帝タル式ニ似スシテ、寧ロ西班牙王ノ即位戴冠式ノ如クナリキ、其儀ニ臨ミタル者ハ、日耳曼ヨリハ唯バヴニアノフ井リツプ一人ニシテ、是レモ亦維納ノ防守ノ功ニヨリテ此公稱ヲ得タル者ニシテ、實ニ其官職ヲ有セザリキ、而シテポロニヤニ於テ舉行セシ即位戴冠式ハ、數百年間繼續シタル羅馬教會ト羅馬帝國トノ聯絡ヲ截斷シタル一徵證ト謂フベキ者トス、日耳曼撰擧侯ハ一人モポロニヤニ請待セラル、トナクシテ、其掌ルベキ事務ハ悉ク意大利ノ諸公之ヲ行ヒタリ、即ナ笏ハモントフェラット公之ヲ執リ、劔ハウルビノ公之ヲ執リ、冠ハサヴオイ公之ヲ執レリ、儀衛ハ西班牙貴族ノ少年其首ニ居リ、西班牙ノ大貴族之レニ繼ギ、各々盛飾ノ衣服ヲ着ケテ觀美ヲ競ヘリ、之レニ繼ギテ騎使隊アリ、是レモ亦日耳曼人ニアラズシテ、悉ク西班牙領ノ諸部ヨリ來リシ者ニ係レリ、二月二十四日即チチャールスノ生日ニ當リテ法皇手ツカテ皇帝ノ冠ヲ帝ノ頭ニ加フ、帝又羅馬皇帝カ用ヒタル舊儀ヲ摸シテ、寶玉ヲ以テ飾レル鞋ト外套トヲ着ケタリ、是ヨリ先キ二日意大利國王ノ鐵冠ヲ受ク、蓋シ先例ニ依ルニ「ロンバルド」ノ王冠（按意大利國王ノ

日耳曼ノ形勢

鐵冠ト同ハミランノ聖^{セント}アムブロース^{セント}寺ニ於テ之ヲ受ケ、羅馬ノ帝冠ハ法皇ノ宮廷ニ於テ之ヲ受クヘキ者ナルニ、チャールス、法皇ニ懇請シテ兩種ノ冠ヲポロニヤニ受ケタルナリ、是レ實ニ意大利ニ於テ法皇ガ帝冠ヲ加ヘタル最終ノ者ニシテ、又是レヨリ以前八十年間絶ヘテ無キ所ナリ、チャールスノポロニヤニ在ル間、テールス王タルノ資格ニ因リ、マルタ、ゴツツノ二嶋ヲシエルサレムノ聖^{セント}「ジョン」ノ武士ニ與ヘタリ、是ノ武士ハ土耳其ノ爲メニロード嶋ヲ驅逐セラレタル後、據ルヘキノ定居ナクシテ、法皇ノ支給ヲ受ケ居タリシガ、是ニ至リテ二島ヲ受クルヲ得タリ、チャールスハ此ノ如ク皇帝ノ威權ニ服セタル意大利全國ノ處分ヲ畢リ、千五百二十一年四月ノ始日耳曼ニ發向セリ、是レアウグスブルグニ開クヘキ國會ニ臨ムヲ要セラレタルニヨレリ、千五百二十六年スピールニ國會ヲ開ケル後、千五百二十九年同地ニ再ヒ之ヲ開クニ至ルマテ、新政黨ノ勢力大ニ加ハレリ、然ルニ是ニ至リ皇帝ト法皇ト和約ヲ締フカ爲メニハ、新政黨之レカ犧牲ニ供セラル、ニ至レリ、何トナレハルーザノ教旨ヲ奉スル異教者ヲ驅責スルコトハ、千五百二十七年十一月ノ條約ノ一

條ニ居レハナリ、チャーレンスガ子^一ゼラランドノ新教黨ヲ遇スルノ苛虐ナルハ、既ニ日耳曼ノ新教黨ニ對スルノ惡徵ヲ豫示シタリ、千五百二十八年八月一日皇帝ノ勅命ヲ以テ明年スピールニ國會ヲ開ク旨ヲ告ク、其文中峻嚴ノ言語ヲ以テ擅制暴厲ノ事項ヲ包涵セリ、皇帝ハ日耳曼邦内宗教ノ爭論アルカ爲メニ、土耳其ニ對シ十分ナル抗抵ヲ爲ス能ハサルヲ慨ク^一ヲ言ヒ、又其耶穌教邦第一等ノ君主タル資格ニ於テ、皇帝ノ勅命ニ違背スルヲ許サ、ル^一ヲ言ヒ、夫ノウオルムスノ帝勅ヲ執行セサル可カラサル^一ヲ説キ、又宗教上一切ノ改革ヲ禁シ、而シテ此點ニ關シテ千五百二十六年スピールノ國會ノ決議ヲ廢棄スル旨ヲ告ケタリ、此ノ如キ擅斷ノ廢棄ハ、西班牙政府ノ所爲ニ適當レタル者ナリト雖トモ、日耳曼改革黨ハ之レカ爲メニ最大ノ驚駭ト不平トヲ起シタリ、抑々此ノ勅命タルヤ、宗教ノ一事件ヲシテ最モ劇烈ナル地位ニ進マシムル者ナリト謂フベシ、即チ怯懦ナル改革徒ハ之レカ爲メニ逡巡狐疑シ、勇敢ナル改革徒ハ更ニ果決ノ所爲ニ出ントスレハナリ、サキソニ^一撰擧侯シヨン及ヒヘッス公^一フ井リツプハ其說教僧徒ト赴々タル武士ノ一隊トヲ從ヘテスピールニ會

チャーレンス
千五百二十
六年ノスピー
ル國會ノ
決議ヲ廢ス

スピールニ
國會ヲ開ク

セリ、而シテ其到着後ノ日曜日ニ二公其旅館ニ於テ新教ノ教儀ヲ執行シタルトキ、之レニ臨メル者八千餘人ノ多キニ至リシト云フ、
千五百二十九年三月十五日、埃地利大公フニルヂナンド、カウントパラチーン^一フレデリツキ、バヅエリア公ウヰリアム^一フランスウツキ公エリツクトレントノ僧正ベ
ルンハ^一ド皇帝ノ代理トシテ國會ヲ開キタリ、又ミラントラ公ピコ^一法皇ノ代理トナ
レリ、而シテ宗教事件ハ之ヲ委員ノ審查ニ付スルニ決シタリシカ、此委員ノ多數ハ
舊教黨ナリキ、其決議ノ箇條ニ曰ク、宗門總會ハ宗教事件ノ爭議ヲ決スル爲メニ日
耳曼中或ル都邑ニ一年一回之ヲ開クヘシ、如何ナル事情アリトモ一年半ヲ過キテ開
カサル^一勿カルベシ、若シ此期ヲ過クルニ及ヒテハ日耳曼全國諸公侯ノ總會ヲ開キ
テ之ヲ決スベシ、曰クスピール國會ノ決議ハ國々ニ於テ其意義ヲ誤解シタル者アル
ガ爲メニ許多ノ弊害ヲ生ジタリ、故ニ是レニ關シテ左ノ如キ決定ヲ爲セリ、即チウ
オルムスノ帝勅ヲ遵奉スル邦國ニ於テハ益々之ヲ遵奉シテ敢テ違背スルアル勿レ、
スピールノ決議ニヨリ夫ノ帝勅ヲ無効ナリトシテ之ヲ拒ミタル者ニシテ、今一時ニ

*Original copy of the...
taken by...*

ルーザー黨
ノ反對及ビ
其反對政黨
ノ名ヲ得タ
ル

新教ヲ全廢スルハ、國亂生ゼントスル恐レアル者ニ於テハ暫ク舊様ヲ存スルモ、今
後一切ノ宗教改革ハ之ヲ停止シ、宗門總會ノ開クヲ俟ツベシ、曰ク神体現存説（按祭
祀
ニ供スル麵包ハ耶蘇ノ肉ナリ葡萄酒ハ其血ナリトシ、此物質中ニ違背スルノ教義ハ
ニ其体現存スルト云フノ説ニシテ、即チ舊教徒ノ説ク所ニ係ル
羅馬帝國（按日耳曼帝國ノ事ニシテ、其義
第一卷五十四葉ニ見ヘタリ内ノ何レノ國ニモ採用スルコト勿レ、又公然
之レテ説クコト勿レ、曰ク「マス」祭ノ辭ハ寺院ニ於テ之レテ廢スルコト勿レ、曰ク新教ノ
行ハル、地ニ於テモ亦一人モ「マス」祭ノ辭ヲ聽キ、及ビ之テ説クコトテ妨害セラル、
コト勿レト、此他諸條アリト雖モ右ニ述フルカ如キハ其主要ナル者ナリ、
然ルニルーザーノ教義ヲ信ズル諸公侯及ビ邦國ハ之レニ反對シテ曰ク、此ノ如キ事
項ハ、尋常ノ多數説ヲ以テ之ヲ決レ之ヲ行フヘキニ非サルナリ、曰ク宗門總會ノ遲
延セルコト斯ク甚ダシキカ故ニ、其種々ノ異説アルハ異説者ノ過チニアラサルナリ、曰
ク國亂ヲ起サスシテ新教ヲ廢スルヲ得ヘキ所ニ於テハ之ヲ廢シ、其否ラサル所ニハ
之ヲ存スルヲ許ストノ決議ハ正サニ其決議ノ拒否セラルベキヲ自認セルナリ、又新
教ヲ廢スルモ國亂起ラサルヘシト豫定セラレタル地ニ於テノミ之ヲ廢スベシトノ

義ヲ自認セルナリ、曰ク眞成ノ教義ヲ擴充スルコトヲ停止シ、神旨ニ悖ル者ナリト證
明セラレタル「マス」ハ改正ノ禮拜式ト並ヒ行ハレシニ、改正ノ禮拜式ニ至テハ「マス」
ト並ヒ行ハル、ヲ許サレザルハ、合意ノコトニ非サルナリ、曰ク既ニ廢黜シタル僧侶
既ニ沒収シタル財産ヲ舊ニ復スルハ大ナル紛雜ヲ生セントスルナリ、曰ク經典ハ僧
侶ノ解釋ニ從ヒテ説カサル可カラストノ言ハ曖昧不明ナリ、何トナレハ何人カ正當
ニ解釋シタルヤハ未タ定マラザルガ故ナリ、曰ク此等ノ決議ヲ採用スルハ全ク彼ノ
党ノ爲メニ不利トナルヘキナリト、
國會ハ此等ノ反對説ヲ大ニ輕蔑シ、而シテルーザー黨ニ命スルニ多數説ニ一致スヘ
キ旨ヲ以テシ、ルーザー黨ガ尙ホ党與中ニ協議スヘシトテ退席シタル間、壤地利大公
フエルヂナンドヲ初メ他ノ皇帝ノ代理ハ卒カニ去リテ、復タ之レヲシテ參席セシム
ルニ由ナカリキ、四月十九日ルーザー黨ハ有名ナル反對ノ文案ヲ草シタリ、其文中
ニハ以上叙述シタル箇條ヲ合有セリ、此黨ガ反對政黨ノ名稱ヲ得タルハ、實ニ此反
對ノ檄文ニ基ケリ、而シテ改革黨ノ全部ニ此名稱ヲ與ヘタルハ、是ヨリ後法皇ノ「ノ

ンシオ、コンタリニ（按）教勅ニ創マリ、改革黨ハ名譽ノ稱ナリトシテ自カラ之ヲ用ルニ至レリ、此反對ノ文案ニ署名シタル者ハ、サキソニ一撰舉侯シヨンプランデンブルグ公アンスパツク公リエーテブルグノ二公エルテスト、及びフランシス、ヘツス公、アンハルト公及ヒ皇帝直轄ノ十四都府ナリキ、此等ノ署名者ハ此文案ヲ國會ノ決議中ニ挿入センコトヲ要シ、寫書一通ヲ作りテ之ヲフェルヂナンドニ送リシニ、フェルヂナンドハ之ヲ拒絕シタリ、四月二十二日シヨージ、トルツチエツス再ビルーザ一黨ニ對シテ多數說ニ服従スベキコトヲ要求シ、而シテ之ヲ拒ムニ於テハ其名ヲ國會議事記ノ文中ヨリ削去ル旨ヲ以テ脅迫シタリ、既ニシテ又其反對ノ文案ヲ世ニ公行セザランコトヲ要求セリ、是ヲ公行スルキハ之レカ爲メニ騷擾ノ起ランコトヲ恐ルンバナリ、然レドモ之ヲ國會ノ記録ニ登記シ、且ツ之ヲ皇帝ニ奏上スヘキコトヲ許可シタリ、此ノ如ク舊教黨ハ漸ク歩ヲ譲リタルニ、新教黨ハ益々進ミテ遂ニ反對ノ草案ヲ公行シテ皇帝及ヒ後日開會スヘキ宗門總會ニ嚴然之レヲ仰訴シタリ、

チャールスハ其西班牙ニ在ル間、新教黨ノ反對說ヲ聞キテ之レニ同意スル能ハサル

（按）上ニ掲
ケタル宗
教ノ事件
ハ帝未ダ
即位式ヲ
行ハザル
以前ニ係
レリ叙事
錯綜スル

旨ヲ公言シタリ、是ニ於テ新教黨ハ帝ノ意太利ニ到レルニ際シ、代理員ヲ彼ノ地ニ出シテ其反對說ヲ辨護セシメントシタリ、而シテ皇帝ノホロニヤニ赴クノ途上、代理員ピアセンザニ於テ帝ニ謁見セリ、帝又前日ノ如ク不同意ヲ明言シ、代理員ノ持參セシ反對文ヲ受理スルヲ拒ミタリシカ、代理員其書ヲ捧ケテ帝ノ書記官ノ机上ニ置キタルキ、帝ハ特ニ不快ノ色ヲ現ハシタリ、既ニシテ代理員ノ一人ナルミケール、ケイデンガヘツス公ノ委託セル夫ノルーザー派ノ論文ヲ耶穌教國ノ俗長ニシテ舊教ヲ固信スル帝ニ呈シタルキ、帝及ヒ近臣等大ニ怒リテ代理員ヲ獄ニ投シタリシガ既ニシテ漸ク逃レ去ルコトヲ得タリ、

是ノ後帝即位ノ禮ヲ行フニ當リ、躬ヲ法皇ノ權力ヲ維持シ羅馬教會ヲ防衛スヘキ旨ノ誓ヲ立テタリ、然レドモ之レト同時ニスピール國會ノ決議ニ從ヒ宗門總會ヲ開クノ必要ナルコトヲ法皇ニ德恩セシニ、法皇クレメント直接ノ否辭ヲ以テ之ニ應ゼズ、暗ニ疑難ノ諸点ヲ示スヲ以テ足レリトセリ、其言ニ曰ク、反對教黨ノ提出セシ疑点ハ、既ニ從來ノ宗門總會ニ因テ決定セラレタル者ナリ、其他ノ決セラレザル者ハ、執拗

ナ以テ、讀
者須ラク
其統緒ヲ
尋テテ前
後ヲ辨知
スベシ
チヤール
會議ヲ開カ
ンコト法皇
ニ懇思ス

非理ノ疑点ニシテ固ヨリ之ヲ剖決スル能ハザル者ナリ、法皇ノ地位ハ實ニ教典ニ因
テ其威權ヲ定立シ、世々ノ宗門議會ニ由テ其威權ヲ保固増大セラレタル者ナルガ故
ニ、議會ヲ開クガ爲メニ毫モ恐ルベキコアルナシ、然リト雖モ皇帝ハ之ガ爲メニ其
權力威嚴ヲ毀損セラル、ノ恐ナキヤ否テ考察セサル可カラズ、而シテ此等ノ疑点ヲ
決スル爲メニ宗門總會ノ外別ニ便法ナキヤ否ヤテ考察スヘキナリト、皇帝チヤ
ールス乃チ之レニ答ヘテ曰ク、重大ナル疑問ハ之レヲ剖析決定スル能ハサルハ勿論ナ
リ、然リト雖ドモ各自論說ノ得失強弱ハ討議ニヨリテ之ヲ發見スルヲ得ヘシ、而シ
テ考察ヲ盡シクル宗教ノ訓條ヲ作り、之レニ因テ終ニ爭議ヲ止ムルコトヲ得ント、然
ルニ法皇ハ更ニ此疑問ヲ宗門議會ニ付シ之レカ爲メニ物議ノ沸騰センコトヲ恐レ、言
ヲ左右ニ托シテ、宗門議會ヲ開クベキ皇帝ノ請求ヲ避ケタリ、是ニ於テ皇帝モ他ニ
爲スヘキノ術ナキヲ以テ、更ニ國會ヲアウグスブルグニ開カント決セリ、抑々法皇
クレメントハ宗教議會ヲ開カザルニ、其然ル所以ノ主意ヲ提出セザリシハ如何アヤ、
既ニシテ此等ノ事ノ世間ニ傳播スルヤ、羅馬教會ニ於テ鬻買スヘキ一切ノ官職ハ大

ニ其價格ヲ減シ、而カモ之ヲ買ハントスル者甚タ稀レナルニ至レリ、此時ニ當リスビ
ールノ國會後新教黨中將來ノ方向ニ關シテ諸說紛々タリ、ヘッス公フ井リツプ及ビ
其他熱心ナル改革家ハ、兵力ヲ用井テ新教ヲ保持セント欲シ、而シテフ井リツプハ
ズウ井ングリノ説ヲ景慕スル人ニシテ、兵力ニ依ルノ策ヲ持スルガ故ニ、瑞西ノ新
教都邑及ビスウピアノ新教都邑ヲ連テサキソニ撰舉侯ト自身トノ間ニ同盟ヲ
起サント企テタリ、スウピア及ビ南日耳曼ノ都邑ウルム、ストラスブルグ等ノ如キ
ハ、反對書ニ連署スルニ當リテハルーザー派ニ一致シタリシト雖モ、其ノ宗教ノ説
ニ至リテハ、ルーザーニ與ミスルヨリハズウ井ングリニ傾向スル所多レトス、而シ
テストラスブルグノ僧ニブツセル、及ビカピトノ二人アリ、ヘッス公フ井リツプハ
此二人ノ力ニ頼リテ偏ニ日耳曼瑞西兩國ノ改革黨ヲ團結セント欲セリ、然ルニルー
ザーハズウ井ングリ派ヲ疾ムコト甚シキヲ以テ此ノ目的ヲ達スルハ頗ル難シトス、ル
ーザー及ビズウ井ングリハ一身上ノ交情相善カラスシテ、互ニ文書ヲ以テ激烈ナル
攻撃ヲ爲シタリ、然リト雖モフ井リツプハ兩派ヲ和睦シテ一團トナシ、以テ改革黨

ルーザー、ツ
ウ井ングリ
マルブルグ
ニ會ス

ノ勢力ヲ強大ニセント欲スルニ銳意ナルヲ以テ、ズウ井ングリニ向テハルーザー派ノ僧侶ヲ遣リ、ルーザーニ向テハズウ井ングリ派ノ僧侶ヲ遣リテマルブルグニ會盟セシメテ勸説セシメタリ、ルーザーハ此調和説ヲ聽キ、初メハ猶豫シタリシガ、遂ニ一身安全ノ証ヲ得タルノ後、按此會盟ニヨリ、ズウ井ングリ派ノ毀害ヲ加ヘン始テ「ヲ慮リ、一身安全ノ証書ヲ取リタルナルベシ」之ヲ承諾シ、遂ニ千五百二十九年十月一日ヨリ二日ニ至ルマデ二日間ノ會ヲ開キタリ、此會盟ニ於テズウ井ングリノ爲セシ所ハ、之ナルルーザーニ比スルニ、更ニ寛大ナル精神ヲ有シ、且大ニ政治上ノ目的ニ慚ヘル所アリ、其兩派ノ教義相異ナルノ点十五箇條中十四箇條マデハ、心中ルーザー派ニ讓ルヘキヲ期シ、其第十五條即チ聖餐式ニ關スルノ説ハ一步ヲ退クルヲ肯ゼザリシト雖モ、尙ホ是レヲ以テ政治的ノ同盟ヲ爲スニハ毫モ妨ゲナキヲ注意セリ、然リト雖モルーザーハズウ井ングリ派ノ宗徒ヲ呼ビテ「サクラメンタリー」ト云ヒ、按聖餐式ニ供フル葡萄酒及ヒ麵包ヲ以テ耶穌ノ血肉ト認メザル宗派、即チ「ツウ井ングリ派」之ヲ賤惡睥睨シ毫モ讓與スルヲ爲サズ、是ニ於テ調停遂ニ行ハレス、不快ノ解散ヲ爲セリ、而シテ一般ノ宗教會盟ノ如ク一層憎惡ノ念ヲ長シテ別レタリ

キ、抑々ルーザーノ宗教改革ニ大功アルハ言フヲ待タズト雖モ、其教典ヲ解釋スルニ稍々褊狹固執ノ癖アルヲハ蔽フ可カラザルノ短所ナリトス、其解説ハ専ラ文字ニ拘泥スルガ故ニ、其極意義不通ニシテ奇怪ヲ免カレサルノ弊ニ陷ルニ至ル、夫ノ聖餐式ノ説ノ如キ即チ其一ナリ、按耶穌ノ血肉葡萄酒麵包又サキソニー公ジョンハ沈着固滯ノ性ナルガ、往々少量ノ酒ヲ飲ミテ氣ヲ奮フノ資トセリ、公ハ一切其信ズル所ノ僧侶ノ説ニ心醉シ、ウ井ンテンベルグ派ノ説ヲ奉スルノ人ニアラザレバ絲毫モ協同セント欲スルノ意ナシ、此等ノ執迷拘泥ハ皆新教黨ヲ廣ク糾合セシムルノ妨トナリテ其勢力ノ弱ヲタリキ、
既ニシテ皇帝ガアウグスブルグニ開カントスル國會ノ期限漸ク近ヅケリ、而シテ皇帝ホロニヤニ在ルノ時其召集狀ヲ發シタリシガ、其言辞極メテ穩和寛容ノ事ノミニシテ、スピール國會ノ議決ヲ廢スル事ノ如キハ全ク千五百二十八年ノ帝命ト相反セリ、其然ル所以ノ者ハ、夫ノ帝命出テタルノ後、土耳其軍ノ維納ニ進寇スルニ至リシニ由テナリ、蓋シ當時ソリマン帝ト「ゼニスサリ」兵ト歐洲ニ侵寇スルノ事無ラシ

メハ、新教黨ハ其萌芽初メテ發スルノ際乍チ滅セラレタルヘキニ、土其耳進寇ノ思アリシヲ以テ、皇帝チャールレスモ其意ヲ此ニ擅ニスル能ハス、是ニ由テ之ヲ見ルニ土耳其ノ進寇ハ耶穌教ノ汚穢ヲ一洗スルニ補アリシコトハ疑フ可カラザルナリ、此ニ於テ皇帝ハ調和ヲ以テ得策トナシ、調和ノ目的ヲ達スルニ妨ケアル脅嚇手段ハ一切之ヲ廢棄シタリ、是レ蓋シ帝ノ歸依僧タルオスマ、シゲンツアノ大僧長ガルシア、ド、ロアイサノ獻議ナリト云フ、(此大僧長ハ帝ニ陪從シテ意大利ニ到リタル人ニシテ、其說最モ帝ニ信セラレタリ)然リト雖モ此ノ如ク温和ノ手段ヲ用井ルモ、調和ノ目的ヲ達スル能ハザルニ於テハ、機ニ應ジテ強壓手段ヲ用井ントハ、久ク決心シタル所ナリ、又新教黨ノ爲メニ一大不幸ト謂フヘキハ、皇帝ノ顧問官ガツチナラ皇帝ニ從フテアウグスブルグニ赴クノ途上インスブラツクニ於テ死シタルノ一事是ナリ、此人ハ元來法皇ノ政畧ニ反對ノ意見ヲ懷キシテ以テ皇帝ノ新教黨ニ對スル意見ヲ寬裕ニセシムルノ力アリシヲ推テ知ルヘキナリ、

チャールレス

既ニシテ皇帝チャールレスハチロルス、アルプスヲ踰ヘテ日耳曼ニ入レリ、其狀皇帝

アウグスブルグノ國會ニ赴ク

ノ其領地ニ入ルニ似スシテ、殆ント外人ノ異郷ニ入ルカ如ク、又冠軍ノ襲入セルカ如シ、上文既ニ記スルガ如ク、帝ノ意大利ニ即位式ヲ行フヤ、日耳曼ノ撰擧侯等ヲ召集セズ、又意大利諸國ヲ處分シ條約ヲ締フニモ、日耳曼公侯ノ評議ヲ取ラザリシ故ヲ以テ、後日ニ及び日耳曼ノ公侯ハ抗言ヲ爲シテ、夫ノ條約ノ爲メニ自今以後羅馬帝國ニ不利ヲ生ズルコトアリトモ、吾儕ハ之ヲ遵奉スルコト肯セザルヘシト云フニ至レリ、此等ノ事アリシノミナラス、新教黨ノ公侯ヲシテ最モ憤怒ノ情ヲ激生セシメタルハ、チャールレスカ彼公侯等ノ使節ヲヒアセンザニ接遇シタルノ無狀ナルニ在リトス、抑々皇帝ハ其召集狀等ニ穩和ヲ示シタリト雖モ、其權勢ヲ有スル以上ハ、西班牙意太利ニ於テ行ヒシ如キ擅制ヲ日耳曼ニ行ハントスルハ諸公侯ノ豫期シタル所ナリ、今回ノ國會ハ其開期五月一日ト定マリ、召集セラレタル公侯僧侶ハ四月下旬ニアウグスブルグニ赴ケリ、ヘッス公フ井リツプハ一百二十ノ騎兵ヲ從ヘ、ルーザ一派ノ僧侶ハメラントクンヲ以テ總代トシテ會ニ赴カシム、而シテルーザーハ尙ホ帝國ノ譴責狀ヲ受ルノ身ナルヲ以テ、禍殃危難アラントチ慮リ、之ヲ避クルガ爲メ

ルーザー
コ
ホルグニ留
マル

ニハ臨會セサルヲ得策ナリトシテ留マリテコホルグニ在リ、是レサキソニ一撰擧侯
領ノ邊境ニシテ、萬一ルーザーノ意見ヲ聽カント要スル事アラバ、直チニ會地ニ到
ルベキノ便アルヲ以テナリ、ルーザーハ此地ノ城塞ノ第一樓ニ住シ、十二人ノ騎兵
常ニ之ヲ護衛セリ、又皇帝ハロンバーヂー、チロル、バツエリア等ニ滯留躊躇シ、六月
十五日マデハアウグスブルグニ入ラザリキ、皇帝ハ西班牙ノ衣裳ヲ着ケ、其裝飾華
麗ニ、狀貌温和ニシテ端肅ナリ、皇帝ノ左右ニ埃地利大公フエルヂナンド及ビ法皇
ノ代理僧カムベギオ騎從セリ、既ニシテ皇帝五十歩ノ間ニ進マレタリシキ、此ニ集
會セシ撰擧侯等馬ヲ下レリ然レモ法皇ノ代理僧及ビ他ノ諸公侯等ハ尙ホ騾馬ノ上
ニ在リ、而シテ當時ノ一異狀ト謂フヘキハ、法皇ノ代理僧祈願ノ辞ヲ唱ヘタルキ、皇
帝スラ跪テ之ヲ拜セシニ、新教黨ノ公侯ハ皆直立シ居タリシニアリ、
國會ノ開クルニ先ダチテ、皇帝ハサキソニ一撰擧侯、ブランデンブルグ公ジョーシ、
リユーチブルグ公フランシス、ヘッス公フ井リツプヲ私室ニ招キ、フエルヂナンド
ヲシテ其附屬ノ僧侶ノ説教ヲ停止スヘキ旨ヲ傳ヘシメタリ、諸公侯此ノ命ヲ聽キテ

其非理ノ要求ヲ憤リタリト雖モ、老成ノ人々ハ忍ビテ之ヲ拒マサリシガ、少壯ナル
ヘッス公フ井リツプハ血氣熾盛ナリシガ故ニ、敢テ此命ニ抗シ、説教者ヲ庇護シテ
曰ク、彼等ハ聖アウゴスチーンノ見解ニヨリテ純粹ナル神語ヲ教ユルニ過ギザレハ、
之ヲ停止スルノ理ナシト、皇帝此答語ヲ聽キ、輒然トシテ怒リ色ニ見ハレ、強ヒテ復
タ前命ヲ傳ヘシム、然ルニ日耳曼諸公侯ノ強項ナル、先キニ意太利諸公侯ノ柔順ナ
ルガ如クナラス、ブランデンブルグ公ジョーシ進ミ出テ大聲呼テ曰ク、陛下ヨ子ハ
神語ニ違背スルニ忍ビス、之ニ違背センニリハ、寧ロ膝ヲ屈シ頸ヲ伸ベテ刃ヲ受ケン
ノミト、皇帝チヤールスハ思ヒ設ケタル穩和ノ政畧ヲ此際暫時忘却シタリシガ今
ジョーシノ數語ヲ聞テ忽チ想起スル所アリ未熟ナル日耳曼語ヲ用ヒテ左ノ答辭ヲ
言出セリ曰ク我カ親愛スル公ヨ、我レ汝ノ頭ヲ喪フコトナシ、汝ノ頭ヲ喪フコトナ
シト、然レモ新教黨ノ公侯ハ遂ニ皇帝ノ命ニ從ヒタリ、但舊教黨ノ公侯モ同様ノ制
限ヲ受クルニ至リテ新教黨始テ之レニ從ヒシナリ、
（按舊教黨ノ公侯モ其附屬ノ僧
侶ニ説教ヲ停止スヘシトノ命
ヲ受ケタ
ルナリ）
此後皇帝左ノ事ヲ以テサキソニ一撰擧侯ヲ脅カシ以テ其心ヲ動カサント

企テタリ、曰ク汝若シウオルムスノ勅命ニ違背シテ舊教ヲ委棄スルニ於テハ、汝ノ兄ヨリ相續シタル撰舉侯領ヲ承繼スルヲ拒ミ、又汝ノ子ガクレーヴスノサイベラト婚スルヲ認許セザル可シト、然ルニ撰舉侯シヨンハ毅然トシテ之レニ答ヘテ曰ク、相續セル地ヲ領スルニ皇帝之ヲ拒ム能ハサルコトハ、帝國ノ憲法ニ於テ然リトス、又假令之ヲ拒マント欲スルモ、之ニ先クテ我信スル所ハ真正ノ耶蘇教ナル乎否ヤヲ檢定スルニアラサレハ不可ナリト、

國會開ク

六月二十日ニ至リ嚴肅ナル舊教ノ行列式ト謝恩祭トヲ執行シテ國會ヲ開キタリ、皇帝ハ日光赫々トシテ炎威熾クカ如キ氣候ニモ拘ハラズ、紫色ノ重キ外套ヲ被ヒ帽ヲ若ケスシテ頭ヲ露ハシ、手ニ蠟燭ヲ持シ、夫ノメンツノ大僧正カ捧グル所ノ聖餐ノ後ニ恭シク隨行セタリ、而シテ此式ニ出會セシハ、新教党ノ公侯中ニ於テ獨リサキノニ撰舉侯ノミニシテ、侯ハ帝國ノ將官トシテ皇帝ノ前ニ帝國ノ劍ヲ持チ行クノ職務アレハナリ、而シテ侯ハ舊教式ニ列スルニアラズシテ、唯此職務ノ爲メニ出會セシテ示スコトニ注意シタリト云フ、抑此會議ハ土耳其ノ侵寇ニ關スル事項ヲ初メニ議

アウグスブルグノ教義文

シタリト雖モ、主トスル所ハルーザーノ唱ヘタル新教ニ關スル事項ニ在リトス、而シテ新教党ハ其宗教ノ真義ヲ知ラシメンカ爲メニ、其教義文ヲ草定シ、廣布文ノ跡裁ニ從ヒ之テ國會ニ出スヲ以テ得策ナルベシト思惟シタリ、是レ即チ有名ナルアウグスブルグノ教義文ト稱スル者ニシテ、ルーザー教ノ信條ナリ、而シテ之ヲ草スルノ任ハ之ヲメランクトンニ委托シタリ、是レ其技能ルーザーニ優リテ、文ノ流暢典雅ナルカ爲メノミナラズ、其性質温厚ニシテ調和シ得ヘキノ人タルヲ以テナリ、而シテ此文ハ成ルヘキタケ舊教ニ近似スルノ目的ヲ以テ草シタルヲ疑フ可カラズシテ全ク自家防衛ノ趣旨ニ出テタルヲ以テ、ルーザーノ教義ヲ是認シタリト雖モ、亦舊教ヲ攻撃セザリキ、又ツウ井ングリ派ニ對スルニ至テハ判然殊別アルノ界線ヲ劃シタルヲ猶ホ羅馬教ニ對スルモノ、如シ、而シテ當時ツウ井ングリ派ノ信徒遽カニ日耳曼ニ増加シ、ルーザー派ノ爲メニ疾視セラレタリ、蓋シアウグスブルグノ人民ハ大抵ツウ井ングリ派ニ屬シタリト云フ、
メランクトンノ起草セル教義文ハ、衆多ノ神學者之ヲ精覈ニ審査シルルーザー之ヲ贊

成シタリ、是ニ於テサキソニー撰舉族、ブランデンブルグ公、リユーチブルグ公、エル
 テスト、ヘツス公、フ井リツプ、アンハルト公、ウオルガング、ニユーレムベルグ、リユー
 トリンゲンノ代理員等皆之レニ署名シタリ、千五百三十年六月二十五日(土曜日)ノ
 午後皇帝ノ寄住セシアウグスブルグノ僧正ノ寺院ニ於テ之ヲ朗讀セリ、皇帝ハ之ヲ
 朗讀スルニ當リ唯拉丁語ニテ記セル文ヲ誦センコトヲ請ヒタルニ、諸公侯ハ之レニ對
 シテ日耳曼國ニ於テハ日耳曼語ヲ誦スルコトヲ制止ス可カラザルノ義ヲ主張シタリ、
 然レモ此院ニハ諸公侯若クハ都邑ノ代理員ノ外之レニ列席スルコトヲ許サザリキ、ニ
 レクトラル、チャンセロル(按)僧官ノ名、ブラツク、ベイヤルノ二人堂ノ中央ニ立テ、一人
 ハ日耳曼ノ文ヲ手ニシ一人ハ拉丁ノ文ヲ手ニシ、而シテ日耳曼文ノ朗讀ニ殆ド二時
 間ヲ經過セシカ、列坐ノ人皆耳ヲ傾ケテ審聽シタリ、又遠ク堂下ニ徹スルホドノ大
 聲ヲ發シテ之ヲ朗讀シタリ、而シテ讀ミ畢リテ其書ヲ皇帝ノ書記官ニ呈シタリシニ、
 皇帝親カラ兩手ヲ伸ヘテ、之ヲ受ケ拉丁文ノ者ハ自身ニ之ヲ持チ、日耳曼文ノ者ハ之
 ナ其顧問官ニ托シタリ、而シテ這回ノ國會散ズルニ先チテ、此教義文ヲ意大利、佛蘭

四都邑ノ教
 義文

西、西班牙、葡萄牙ノ國語ニ翻譯セリ、是レ諸國ノ君主カ新教ノ眞主義如何ヲ知ラン
 ト欲スルノ意切ナルヲ以テナリ、又ストラスブルグ、メムミンゲン、コンスタンス、リ
 ンダウノ四都邑モ亦一通ノ教義文ヲ出セリ、之ヲ四都邑ノ教義文ト稱ス、是ノ教義
 文ハアウグスブルグノ教義文ニ同クシテ、唯聖餐ノ事項ニ就キ稍異ナルアルノミ、
 ルーザ一派ノ教義文朗讀ヲ畢リタル後、皇帝此等ノ新教黨ニ左ノ問ヲ爲シタリ、曰
 ク新教黨ハ此他尙ホ進言主張スベキ事アリ乎、ト、此問ニ對シテ然リ又ハ否ト言フ
 如キ純一ノ答辭ヲ呈スルハ危険ナル者ナルカ故ニ、新教黨ハ左ノ如キ答ヲ爲シタリ、
 曰ク我輩ハ夫ノ教義文ニ違背スル事ハ一切之レニ與ミセザルヘシ、今朝讀セシ文ハ
 我輩ノ主義ヲ悉ク包含セル者ナリ、瑣末ノ点ヲ歷舉シテ以テ夫ノ教義文ヲ檢討シ、
 其大義ヲ句解字釋スルノ困難ヲ好マサルナリ、ト、是ニ於テカ舊教黨ハエウ、コクラ
 ウスヲ初メ其他熱心ナルルーザ一ノ反對者ヲシテ夫ノ教義文ヲ辨駁スルノ文ヲ草
 セシメタリシニ、其文成ルニ及ヒ言辭厯雜過激ニシ、又不完全ナリケレバ國會ハ遂ニ
 之ヲ棄却セリ、因テ更ニ一書ヲ作り長ク且劇シキ討論ヲ經テ之ヲ修整潤色シタル後、

チャレーヌ
ノ地位ニ不
利アルヲ

ニ缺損セシメ、而シテ皇帝ヲシテ其平和ノ性質ヲ失フテ脅嚇ノ手段ヲ用井ント欲セシムルニ至レリ、調和ノ手段既ニ盡キタリ、然レモ皇帝ハ尙ホ兵力ニ訴フルノ地位ヲ有セサリキ、當時皇帝ニ隨從セシ兵ハ日耳曼西班牙ノ歩兵ヲ合セテ約チ千四百人ニ過キズ、加之若シ兵力ニ訴フルニ及デハ、舊教黨諸公侯ノ兵ニモ安ンシテ依頼スル能ハサリキ、何ントテレハ輿地利家既ニ大權ヲ有スルニ至リシヲ以テ諸公侯之ヲ疾視スルノ念アリ、特ニウニルテムベルグノ公國ヲ奪ヒタルニ因テ此念ヲ加ヘ、又皇帝チャレーヌガ日耳曼ノ憲法及ビ國會ノ自由ヲ攻撃スルニヨリテ諸公侯皇帝ニ左袒セザルヘキガ故ナリ、而シテ就中バヴエリアノ二公（按「バヴエリア」分テ上下ノ二公國タリ、シテハ第一見ユハボヘミアノ王トナラント欲セシモ撰擧セラレザルヨリ輿地利ニ對シテ忿恨ヲ懷キ特ニ近年ノ戰爭ニ於テ法皇ト佛王ト同謀シテ皇帝ニ反對シ、帝冠ヲバヴエリア公ウ井リアムニ授ケントセシモ、半途ニシテ其謀敗レタルニヨリテ此ノ念益々増加セリ、特ニ是レノミナラズ、バヴエリア家ガ羅馬教會ニ左袒スルノ熱心ハ、其輿地利家ト相容レザルガ爲メニ頗ル冷却セリ、其故ハバヴエリア家ハ、輿地利大公フエ

ルチナンドトシヨン、ザボリアト匈牙利ノ王位ヲ爭フニ當リテ、シヨン、ザボリアト相結ビタルヲ以テ、今ニ及ビテモ此關係ノ爲メニ新教黨ニ左袒スルノ心全ク除去セサルガ故ナリ、以上ノ如キ事情アリテ舊教黨ノ聯合甚ダ固カラズト雖モ、皇帝ハ未ダ此等ノ事情ヲ詳悉セサリケリ、冷淡ナルサキノニ撰擧侯シヨンハ調停平和ニ盡力シタリシト雖モ、遂ニ其忍耐ヲ破ルニ至リ、九月二十日ニ及テ皇帝ニ歸國ヲ請ヒタリ、而シテルーザー派ノ要求ニ關スル皇帝ノ處斷ヲ聞ンガ爲メニ尙ホ數日間滯留セヨト説諭シテシヨンヲ留ムルヲスラ頗ル困難ノ事ナリキ、サキノニ侯ガ歸國ヲ稟請セシコハ、恰モ人ヲシテ開戦ノ報ヲ傳ヘタルガ如ク思ハシメタリ、而シテ舊教ヲ固執狂信セルブランデンブルクノ撰擧侯ミアキムガ爲シタル苛酷褊狹ナル處置ニヨリテ愈々凶徴ヲ顯ハセリ、又明年四月十五日マデテ期トシ、新教黨ノ人々ニ其説ヲ改メテ舊教ニ回歸スルヲ許シ、此時期ノ間教式等ニ更ニ改正ヲ加フルヲ新教黨ニ禁ジ、新タニ宗教ノ文書ヲ刊行スルヲ禁ジ、他ノ領内ノ人民ヲ誘導シ保護スルヲ禁ジ、而シテ其自領内ノ舊

教徒ヲシテ自由ニ禮拜式ヲ用ルヲ許シ、又「サクラメンタリー」(按「ツウヰング」
「アナバプチスト」)接「ムンゼル」等ノ唱ヘタ「抑壓セシメントセリ、而シテ皇帝ハ速カニ教
門聯邦會若クハ教門國會ヲ招集スベキ旨ヲ法皇ニ勸說セント約シタルニ、ヨアキム
ハ更ニ持論ノ脅嚇ヲ加ヘントセリ、然レモ他ノ舊教ノ公侯等之ヲ非トシテ爲メニ許
サレザリキ

國會ノ議決

國會ハ此等ノ紛議及ビ其他ノ爭論ノ間ニ尙ホ其會議ヲ連續シタリ、而シテ舊教黨ノ
多數ハウオルムスノ勅命ヲ基礎トシテ新令ヲ發スヘキ旨ヲチャールスニ懇懇セリ、
若シサキソニ一撰擧侯ヲ初メ其同黨ノ人々ニシテ此令ニ違背セバ、帝ノ面前ニ之ヲ
召喚シ適當ナル罪科ヲ課シテ之ヲ處刑スヘシト云ヘリ、是ニ於テ國會ノ決議ヲ以テ
此旨趣ニヨリ文ヲ草シ、十一月二十二日ニ至リテ皇帝ノ勅命ヲ公發シタリ、此勅命
ハウオルムスノ勅命ヲ實施スルコトヲ明揭シ、又ルーザー派ヅウヰングリ派「アナハ
プチスム」派ニ拘ラズ、其ウオルムスノ勅命ニ違背セル箇條ヲ繼擧シテ之ヲ非斥シ、
舊樣ノ儀式及ビ教義ヲ保持スルコトヲ命令シ、僧正ノ管轄權限ヲ明示シ、皇帝附屬ノ

狀師ハ法律ニヨリテ違反者ヲ求刑スベキ旨ヲ命ゼラレタリ、而シテ帝國裁判所ノ結
構ヲ改正シ、法律評議官ノ數十八員ヲ増加シテ二十四員トナシ、國會ノ決議ニ隨テ職
務ヲ決行スベキコトヲナシタリ、然ルニ新教黨ノ代理員等(按「代理員トハ、即チ都邑ノ
シ人々」ハ明言シテ曰ク、我輩ガ代理スル都邑ノ人々ハ、此決議ニ承服セサルベク、又
土耳其侵畧ノ急ニ應ズルノ費用、及ビ改正セラレタル帝國裁判所ノ保持ニ供スルノ
資金ヲ支出セザルベシト

以上ノ事項ハ、有名ナルアウグスブルグ國會ノ決定ナリ、而シテ其行爲タルルーザ
ー派教會ノ組織ニ對スル結局ノ手段ニメ、日耳曼ノ一半ヲシテ他ノ一半ト反對ノ位
置ニ立タシメタル者ナリ、然リト雖モチャールスノ目的ハ一モ之ヲ達スル能ハザリ
キ、此國會ノ多數ハ土耳其ノ侵畧ヲ扨グ爲メニ、遽カニ四万ノ歩兵八千ノ騎兵ヲ出
スコトヲ決議セリ、是ノ通例ノ數ニ倍スル者ニシテ、而シテ此兵ハ唯一年間使用スベ
キ者タルノミナラス、若シ之ヲ要スルアラハ翌年モ亦之ヲ使用スルコトヲナシ、其兵
役ノ期ハ、要用ノ場合ニ於テ六箇月ヨリ八箇月ニ至ルコトナセリ

アウグスブルグノ教義文タル新教党ノ爲メニ二様ノ利益ヲ與ヘタリ、即チ其教義ノ公正ナルヲ弘布スルノ助ケトナリタルノミナラス、其党派ヲ結合スルノ標識及ビ繫帶トナリタリ、而シテ皇帝ガ決行セントスル處置ノ爲メニ、速カニ緊密ナル結合ヲ爲サル可カラザルノ機ニ迫レリ、新教党ハ竊ニ疑テ謂ヘラク皇帝ハ將サニ攝政議會ヲ廢シ、帝國裁判所ヲ變革シ、法律ニヨリテ己等ヲ罰スベキ準備ヲ爲スナラント、又墮地利家ニ於テハ、夫ノ攝政議會ノ威權微ナルヲ以テ、新タナル政務管理者ヲ撰ム乎、又ハ帝國ノ代理者ニ依頼スル乎、(サキソニ一撰舉侯ハ代理者タルベキノ一人ナリ) (按)日耳曼諸公侯ノ中、皇帝ノ代理タルノ權ヲ有スル者若干アリテ、サキソニ一撰舉侯ハ其一人ナリ 此二者ノ一ニ出デザル可カラスト觀察シタルヤ久シ、而シテ皇帝ハ之ヲ爲スヲ避ケンガ爲メニ、其弟フエルヂナンドヲ羅馬人民ノ王トナスヲニ決心セシナリ、是事ヤ實ニチャールスステテポロニヤニ於テ帝冠ヲ受ケント欲セシメシ理由ノ一タリ何トナレハ其帝冠ヲ受ルトキハ夫ノマキシミアンガ同様ノ位置ニ於テ遭遇シタル妨碍ヲ避クルヲ得レハナリ、其妨碍トハ則チマキシミアンガ躬自カラ皇帝ノ位ニ即キ帝冠ヲ戴カザ

ルカ故ニ、羅馬人民ノ王位ハ未タ空缺ナラザリシヲ是ナリ、
 新教黨ノ諸公侯ハ千五百三十年十二月ノ末ニ於テスマルカルドニ集會シ、其互相ノ防禦ヲ鞏固ニシ、其宗教ノ自由ヲ保持センガ爲ニ同盟ヲ結ハント欲セリ、而シテサキソニ一撰舉侯シヨンハエルプ河上ノ小地トスリンヤアノ小領地トテ以テ夫ノ佛國ヲ征シテ之ニ克チ、意太利ヲ鎮撫シ、尙ホ且日耳曼諸公侯ノ多數ヲ率ユル所ノ皇帝ニ對シテ、之ニ抵抗スルノ利害如何ハ撰舉侯ノ爲メニ最モ痛心スベキ問題トナリタリ、此ノ如ク大小懸隔セル者互ニ相抗スルハ、其思想殆ド愚ナルガ如ク見ユルノミナラズ、向ホ且皇帝ニ抗スルノ權利アルヤ否ヤノ疑惑ヲ懷キタリ、少壯ニシテ活潑ナルヘツス公ハ、既ニ此ノ二個ノ疑問 (按)二箇ノ疑問トハ、一ハ大小ノ異アリト雖モ權利アルヤ否ト、二点ニシテ、サキソニ一撰舉侯ハ其一人ナリ 勢力相敵スルヤ否ト、一ハ皇帝ニ抗スルノリトナシ、其ノアウグスブルグヨリ歸ルノ後、直チニズーリツク、ベイル、ストラスブルグト特殊ノ盟約ヲ締ビタリ、ルーザーハコーブルグノ城ニ在リテ事務紛雜ノ局外ニ立ツチ以テ、政治上ノ觀察ハ之ヲサキソニ一撰舉侯シヨンニ比スレバ、更ニ沈着

ニシテ廣潤ナル意見ヲ持スルヲ得タリ、而シテジョンノ如キ憂戚ノ情ハ毫モ之ヲ有セザリキ、其意謂ヘラク佛王ハバツ井アノ敗績ヲ記憶シテ怨ヲ日耳曼帝ニ忘ル、能ハザルベク、羅馬法皇ハフロレンス人タルノ故ノミナラズ、羅馬ノ嘗テ日耳曼兵ノ爲メニ蹂躪セラレタルヲ想起シテ不快ノ念ヲ胸中ニ絶タザルベシ、ヴェニス人ハ故日耳曼帝マキシミアンノ加ヘタル患害ヲ尙ホ記憶スルナラン、是ニ由テ之ヲ觀ルニ、日耳曼帝ト此等ノ諸國ト聯合スルコトハ決メ能ハザル所ナリト、ルーザーガ諸國ノ形勢ヲ察スル此ノ如ク、又教典ノ旨ニヨリテ臣下タル公侯ガ日耳曼帝ニ抗スルコトハ之ヲ是認スルヲ得ルヤ否ヤノ説ニ關シテモ、亦スマルカルドノ盟約ニヨリテ其ノ面目ヲ變シタリ、法學家皇帝ト公侯トノ關係ヲ説明シテ曰ク、日耳曼ノ國體タル其ノ實相ハ寡人政ナリ、皇帝ハ撰舉セラレテ位ヲ有スル者ナルニ、其ノ撰舉者タル公侯ハ却テ世襲者ナリ、公侯ノ諸國ハ皇帝ト並ビ立テ統治スル者ナルガ故ニ、皇帝ハ眞ノ君主ニラザルナリト、此等ノ考察ニヨリテルーザーノ胸中ニ蟠マリタル疑惑、即チ公侯ハ皇帝ニ抗スルノ權アルヤ否ヤノ疑惑ハ殆ンド消散シ、假令ルーザー

スマルカルドノ同盟

自カラ之ヲ主張セザルモ、法學家ガ至當ナリト論ズル所ニ反對セザルダケノ度ニマデハ其疑心冰解シタリ

スマルカルドノ同盟ハ十二月三十一日ヲ以テ載書ニ署名シタリ、其ノ署名者ハサキソニー撰舉侯、ヘッス公、アンハルト公ウオルガング、フランスウ井ツキ、リュチーブルグノフ井リツプ、エルチスト、フランスス諸公、マンスフェルドノ諸公及ビマグデブルグ、ブレメンノ都邑是ナリ、千五百三十一年ノ春夏ニ於テ二回ノ會議ヲ開キタリシニ、他ノ諸國モ之ニ加盟シ、殊ニ「テトラポリット」(按新教ノ一派ノ名)ノ教義ヲ執ル諸都邑(接「ストラスブルグ」、「メムミンゲン」、「コンスタンス」、「リンダウ」及ビルベック、ノ四者ヲ云フ上文四都邑ノ教義文ノ所ヲ參觀スベシ)、フランスウ井ツキ、ゴツチンゲン、ウルム等ノ如キ南北部ノ日耳曼諸國皆之レニ聯結ス、故ニ其ノ同盟ハ九公侯二十四都邑トナレリ、而シテ其ノ同盟ハ六年間ヲ期トシ、互相ノ救援防護ヲ以テ旨趣トナシ、サキソニー撰舉侯ジモン、ヘッス公フ井リツプ遂ニ撰マレテ同盟ノ長トナレリ、

サキソニー撰舉侯ハ、壤地利公フェルデナンドヲ立テ、羅馬人民ノ王トスルコトニ對

フニルヂナ
ンド撰舉セ
ラレテ羅馬
人民ノ王ト
ナル

シテ不同意ノ文ヲ草シ、其ノ子ジョン、フレデリックキテ之ヲ皇帝ニコロインニ呈
セシム(皇帝既ニアウグスブルグノ國會ヲ散シタル後、此ノ地ニ往キダリ)然レモ此
ノ事毫モ其ノ効ナカリキ、初メ舊政黨中異教者ノ權利ヲ剝奪スベシト云ヘル法皇レ
オ十世ノ教勅ニヨリ、サキソニ撰舉侯ノ投票權ヲ剝奪スル、議アリシカドモ、他ノ
撰舉侯ハ之レニ一致セサリキ、是レ乃チ此事ノ一タビ行ハル、ヤ次ニ各自ノ身ニ及
バンコチ恐レテナリ、之レニ反シテ舊政黨ノ領地ナルレイン河上ノ「バラチン」領ブ
ランテンブルグ、メンツ、トレーヴズ、コロインノ五國ハ種々ノ賄賂ト約束トヲ得テ
フニルヂナンドヲ撰舉スルコチ容易ニ承諾シタリ又、フニルヂナンドハ身ホヘミア
王タルノ資格ヲ以テ羅馬人民ノ王ヲ撰舉スルノ權利ヲ有セリ、蓋シ日耳曼國會ノ常
議ニ關シテホヘミア王之レニ與カテズト雖モ、羅馬人民ノ王ヲ撰舉スルニ就テハ投
票權ヲ有セルナリ、千五百三十一年一月五日フニルヂナンド撰フレテ羅馬人民ノ王
トナリ、二日ヲ超テニイクス、ラ、シヤペールニ戴冠式ヲ行ヘリ、而シテ其ノ誓言ニ於
テアウグスブルグ國會ノ決議ヲ遵守スベシト云ヘリ、此ノ時ヨリ以後皇帝チャール

匈牙利寡后
マリイ子
ゼルランド
ヲ領ス

スハ日耳曼ノ政務ヲ舉テ其ノ弟フニルヂナンドニ委任シ、但重要ノ事項ノミ指令ヲ
請フベシト定メタリ、ハヴエリアノ二公ハ身皇帝ニ撰舉セラルベキ位置アリト思惟
スルガ故ニ、フニルヂナンドノ撰ラレテ羅馬人民ノ王トナルヲ見テ之ヲ忌嫉シ、千
五百三十一年十月二十四日サールフニルドニ於テスマルカルドノ同盟ニ加レリ、是
レ新政黨ノ旨趣ヲ可トシテ之ニ加盟シタルニアラズシテ、唯フニルヂナンドノ撰舉
ニ反對スルノ一事ニ就テ之レニ與ミシタルナリ、既ニシテフニルヂナンドハ羅馬人
民ノ王トナリシト雖モ、其ノ爵位ノ爲メニ別ニ勢力ヲ増加セズシテ依然トシテ舊ノ
如クナルコチ覺ヘリ
此ノ時ニ當リ皇帝チャールレスハ子ゼルランドニ新主ヲ立テザル可カラザルコチ
思惟セリ、是レヨリ先キチャールレスノ叔母マーガレット久シク是ノ國ヲ治メテ政績
大ニ舉リシニ、千五百二十年十二月一日ニ歿シテ其ノ主ナキニヨレリ、チャールス
乃チ曩キニ匈牙利王ニ嫁シ王歿シテ寡居スル所ノ妹マリイテシテマーガレットニ
繼テ國政ヲ領セシメ、マリイノ權力ヲ固定センガ爲メニ、ブラバンド、及ビフランダ

フランシス
トツウ井
グロトノ通
信

イスニ留リテ數月ヲ涉リタリキ、
佛王フランシス一世ハ佛國內ノルーザー一派ノ信徒ヲ焚殺シ、英王ヘンリー八世ハル
ーザート爭論シ、ルーザーハ劇烈ナル詆罵ヲ以テヘンリーヲ攻撃シタリ、彼此ノ問
此ノ如ク主義方向ヲ異ニシタリト雖モ、スマルカルドノ同盟ハ二王ニ聯合ヲ請ヒテ
皇帝ニ抗セントシ、告グルニ其ノ意ヲ以テシタリシニ、二王モ亦其ノ辰モ反對ノ黨
ニシテ私怨ナキニアラザル日耳曼ノ諸公侯ニ聯合スルヲ以テ政事上ノ利益ナリト
思考シテ速カニ諸公侯ノ請ニ應ジタリ、就中佛王フランシスニ至テハ日耳曼帝チヤ
ーレンスヲ困メテ其ノ勢力ヲ挫折スルノ手段トナルベキコトハ、回教ノ土耳其、新教ノ
日耳曼諸國ト雖モ之ヲ利用シテ顧ルニ足ラズトナセリ、此ノ目的ヲ達センガ爲メニ
フランシスハ自ラゼテゾア人ニ結び又ツウ井ングリ(ツウ井ングリハ佛王ニ同盟ス
ルノ意ナキニ非サルヲ以テ)ニ相扶クベキ旨ヲ言ヒ送レリ、千五百三十年ノ末ニ當
リア、ツウ井ングリハ同盟ノ約條草案ト其ノ著セル「耶蘇教ノ簡明解説」ト題スル書
ヲフランシスニ贈リタリ、此ノ書中ニハ最も自由ニシテ且文明ノ意見ヲ有シタル宗

教改革者ハ、ソクラテス、アリスチーデス、ケートー等ノ如キ神官ニ適ヒタル人ノダ
トヒ異教者ナリト必ス天堂ニ生ズルコトヲ疑ハザリシトノ意ヲ述ベタリ、(按)最も自由ニシテ文
明ナル意見ヲ有スル宗教改革者トハ、ツウ井ングリヲ云フ「ソクラテス」然ルニフ
等ハ希臘羅馬古代ノ哲學者ニシテ耶蘇以前ノ人ナリ、故ニ異教者ト云フ、然ルニフ
ンシスハ端西國舊教諸州ノ怨恨ヲ招カンコトヲ恐レテ、ツウ井ングリノ言ニ與ミセザ
リキ、而シテツウ井ングリモ亦此ノ往復ノ後久シカラズシテ千五百三十一年十月十
一日ガツベルノ役ニ戰没シタリ、是レヨリ先キ、ツウ井ングリハツーリック州ノ人
民ヲ勸誘シテシユウ井ツ、ウリー、ウンテルワルデン、ルーセルンノ舊森林四州(按)第一
卷八十葉八十一葉 及び四州ノ舊來ノ同盟ナルツীগヲ伐シメントシ、而シテ之ヲ寬
ヲ參看スベシ、フオレスツツカント
容セヨトノ新教諸州ノ助言ヲ一切ニ拒斥シタリ、是レ五州ノ固ク舊教ヲ奉ジテ深ク
羅馬教會ニ歸依スルヲ以テナリ、ツウ井ングリハ其ノ同盟軍ノ到着スルヲ待タズ、二
千ニ滿タザル兵ヲ提ゲ進ミテ八千ノ舊教黨ヲ伐チ、ツーリックヲ距ルコト三英里ナル
アルピス山ノガツベルニ於テ敵軍ニ會シ塵戰シタルニ、ツーリック軍大ニ敗レ、死ス
ル者甚ダ多シ、ツウ井ングリハ飛石ノ爲メニ撃タレテ地ニ倒レ、乱走スル味方ノ爲

ツウ井ング
リノ死

メニ蹂躪セラレ、戦終ルノ後樹下ニ横ハリタルニ、敵兵二人此ニ來リテ之ヲ見出セリ、此ノ兵ノ一人ツウ井ングリニ勸メテ聖母、聖徒ヲ拜迎セシメントシタルニ、(按) 蓋教ニ於テ耶穌ノ母ト弟子トヲ拜迎スルコト、上文ノ注ニ見ヘタリ 此ノ時ツウ井ングリ死ニ垂ントシテ吸呼殆ド絶ヘ聲ヲ出ス能ハザルガ故ニ、形容ヲ以テ之ヲ肯セザルノ意ヲ示シタリシニ、敵兵直チニ鎗ヲ擧テ其ノ喉ヲ刺セリ其翌日ツウ井ングリノ体ヲ支解シテ之ヲ焚キ其灰ヲ空中ニ四散セシメタリ、

フランシス
バヴェリア
ノ二公等ト
同盟ス

フランシスハ日耳曼ノ新教黨及ビ其ノ他ノ不平徒ト同盟ヲ爲スニハ毫モ支障ナキヲ以テ之レト同盟セント欲シ、又英王ヘンリー八世ト聯合スルノ機ニ達セリ、蓋シ舊教ニ於テ離婚ヲ許ササルニヘンリーハ其ノ后ヲ去ント欲スルガ故ニ、離婚ノ疑問ニ關シテ日耳曼帝ト英王トノ間ニ日ニ乖離ノ狀ヲ現ハシタリ、是ニ於テ平フランシスハ使テ日耳曼ノ諸公侯ニ遣ハシ、千五百三十二年五月二十六日ヲ以テムーニツクノ近傍ナルクロスター、セイヴニルンニ於テ、サキソニー、ヘッス、バヴェリアト佛國トノ間ニ、フェルヂナンドヲ羅馬人民ノ王ト認許スルコトニ反對スルノ盟約ヲ締ベリ、

而シテフランシスハバヴェリアノ二公ト共ニ金十萬「クラウン」ヲ蓄積スルコトヲ約シタリ、又之ト同時ニフランシスハザボリアト同盟ノ約ヲ再訂シタリ、此ノ如ク日耳曼帝ニ對スルノ計畫ヲ爲シタルニ、土耳其ノ侵畧ニ脅カサレテチャールスガ新教黨ト和ヲ講スルニ至リシガ爲メニ、此ノ計畫ハ終ニ畫餅ニ歸シタリ、蓋シチャールス帝在位間ノ政畧タル、其ノ主トスル所ハ土耳其ノ侵畧ヲ沮止スルコト、及ビ日耳曼ノ新教黨ヲ壓服スルコトニ在リ、而シテ其ノ他ノ畧政ハ皆其ノ次ナリ、又此ノ二件ノ中ニ於テ土耳其ノ事最モ切迫ナルヲ以テ、其ノ侵攻ヨリ生ズル危害ヲ避ケンガ爲メニハ、新教黨ヲ嫉視スルノ念ヲ減シテ之ヲ寛容セザルヲ得ザルニ至ルコト往々之レアリ、チャールスガ新教黨ト和ヲ講ズルニ至リシハ、即チ此ノ原因ヨリ來ル者ニシテ、此ノ講和ハニユーレムベルグノ宗教和約ニ至リテ局ヲ結ベリ、

皇帝チャールス及ビ其ノ弟フニルヂナンドハチャールスノ侍僧オスマ、シギエエンザノ大僧長ノ言ヲ容レテ、初メニハ土耳其ト和約ヲ締バント欲セリ、是レ土耳其ノ患ヲ除キテ專パラカテスマルカルドノ同盟ヲ壓スルニ用井ンガ爲メナリ、乃チ千五

ザボリアチ
刺サントシ
ア成ラス

百三十年ノ秋ニ於テチャーレンス及ビフェルヂナンドヨリ和約ヲ議スルノ使節ヲ土
京コンスタンチノーブルニ派遣シ、土耳其帝ソリマリニ言ハシメテ曰ハク、若シ和議
ヲ承諾シ、ベルグレードヲ除キ其ノ餘ノ匈牙利全部ヲフェルヂナンドニ復歸セバ、
年金十萬「ヂユカット」ヲ土廷ニ納ルベシト、此ニ年金ト云フハ則チ貢金ニシテ、但貢
金ト云フハ屈從ノ嫌アルヲ以テ其ノ名ヲ避ケタルノミ、蓋シフェルヂナンドハシ
ヨンザボリアト匈牙利ヲ爭ヒ兵禍結ビテ解ケズ、此ノ年ノ終リニ當リブーダヲ圍ミ
テ之ヲ攻ムルト雖モ克ツ能ハズ、到底兵力ヲ以テザボリアヲ屈シテ匈牙利ヲ取ルノ
望ナキヲ以テ、刺客ヲ遣リテザボリアヲ暗殺セントセシガ、是レモ亦フェルヂナン
ドノ志ヲ遂グルノ資トナラズシテ、却テ壞地利家ノ爲メニ醜汚ノ嫌疑ヲ増加セリ、是
レヨリ先キハーバルダナツ、ナル者アリフェルヂナンドノ使令ヲ奉シテ土廷ニ赴
クノ途次ブーダニ過ギリテザボリアヲ殺サントセシニ、其ノ袖中ニ藏セル匕首ノ爲
メニ刺撃ノ謀發覺シ、土耳其ノ法律ニヨリテ露ニ盛リ其ノ口ヲ封シテダニユーブ河
ニ沈ムルノ刑ニ處セラレタリキ、フェルヂナンド黨ノ軍ブーダヲ攻圍スルコト六週間

土廷フェル
ヂナンドノ
商議ヲ拒絶
ス

ニシテ克クズ、遂ニ千五百三十一年一月三十一日ザボリアト三ヶ月ノ休戦ヲ約シ、尋
テ之ヲ延イテ一年間トナシタリ、此ノ如クニシテ匈牙利ノ兩黨ハ漸ク戦ニ疲レ乱テ
厭ヒテ、別ニ兩黨ノ異議ナキ王ヲ撰立セントノ調和説ヲ唱フル者アルニ至レリ、(按)
兩黨トハ「フェルヂナンド」ト「ザボリア」トノ黨ヲ云フ、兩黨互ニ他ノ奉ズル所ノ王ヲ
認メズシテ、戦争已マザルガ故ニ、何レノ黨ニモ關係ナキ君主ヲ撰立シテ、此ノ戦乱
ヲ止メントスルノ説ヲ爲ス、土耳其ノ首相イブラヒム、フェルヂナンドノ使節ヲ延見
シ、其ノ言フ所ヲ聞テ之ヲ冷遇シテ曰ク、匈牙利ハ固ヨリフェルヂナンドニ屬セズ、
又ジエニユシ、クラールニモ屬セズ、(ジエニユシ、クラールトハジエ、ザボリアチ
云フ)而シテ土耳其帝ノ有スル所ロナリ、唯匈牙利ノミナラス、維納及ビフェルヂナ
ンドノ日耳曼ニ於テ有スル領地ハ悉皆土耳其帝ノ版圖ナリト、而シテフェルヂナン
ドガ匈牙利ヲ取ラントセシ要求ハ聽カレサルノミナラズ、却テフェルヂナンドノ有
スル匈牙利ノ諸寨ヨリ兵ヲ引キ去リテ其ノ諸寨ヲ致スベシト云フ反對ノ要求ニ遇
ヘリ、イブラヒム又使節ニ語リテ曰ク、土廷再ビ遠征ノ軍ヲ出スベシ、而シテ土耳其
皇帝躬カラ西班牙王ニ會見スベシト、蓋シ土廷ガチャーレンスヲ呼ブヤ日耳曼皇帝ノ

稱ヲ用非ズシテ、纔カニ西班牙王ト云フニ過キズ、而シテ皇帝ノ尊号ハ土耳其君主
ソリマン之ヲ專有シテ羅馬帝國ノ首長ヲ以テ自カラ居リ、コンスタンチノーブルヲ
以テ世界ノ首都ト爲サントスルノ望ヲ養ヘリ、

千五百三十一年ノ春ニ於テ、フェルヂナンドハチヤールニスニ迫リテ匈牙利ヲ扞守ス
ルノ緊要ヲ説キ、フェルヂナンドノ言ハ常ニ大ニチヤールニスニ信用セラレタリキ
日耳曼及ビ意大利ノ安全ヲ保スルガ爲メニハ匈牙利ヲ扞守セザル可カラズト主張
シ、又新教黨ト講和スルノ極メテ得策タルヲ言ヘリ、是ニ於テ皇帝チヤールニス其
ノ言ニ從ヒ、メンツノ撰擧候及ビ「バラチーン」撰擧候ニ頼リテスマルカルド同盟黨
ト講和ノ商議ヲ開キ、遂ニ千五百三十二年七月ニユーレンベルグニ於テ第一回ノ和
約、世ニ所謂ニユーレンベルグノ宗教和約ナル者ヲ豫訂シ、繼テ八月二日ヲチスポ
ンニ開ケル國會ニ於テ之ヲ確定シタリ、其ノ重モナル箇條ハ左ノ如シ、曰ククルーザ
ー派ノ人々ハ其ノ教義ノ爲メニ困厄セラル、コト無カルベシ、曰ククルーザー派ノ人々
ハアウグスブルグノ教義文、其ノ附録及ビ辯解書ニ記セル教旨ヲ公説シ及ビ公布ス

ニユーレン
ベルグノ宗
教和約

ルコヲ得ベシ、曰ク其ノ寺院ニ屬スル財産ハ之ヲ保有スルコヲ得ヘシ、曰ク宗教事件
ニ於ル帝國法院ノ裁判權ハ之ヲ停止スベシ、曰ク帝國裁判所ニ新教黨ノ裁判官若干
ヲ加フベシト、之レニ對シタルルーザー派ノ人々ハ左ノ事ヲ約シタリ、曰クツウ井ン
グリ及派「アナバプテスム」派ノ人々ヲ保護セザルベシ、曰ク固ク皇帝ニ服從スベシ、
曰ク貨幣及ビ鑄謀ヲ獻シテ皇帝ヲ助ケ、又土耳其ニ對スルノ援助ヲ爲スベシト、以
上條約ノ箇條ハ宗門總會ヲ開テ之ヲ改正スルニ至ルマテ有効ノ者タルベシ、若シ又
宗門總會ヲ開カザルトキハ、日耳曼諸國ノ國會ヲ開キテ之ヲ議スルニ至ルマテ有効
ノ者タルベシ、而シテ之ヲ干犯スルニ於テハ公安ヲ破リタルト同一ノ刑罰ヲ加フベ
シト、此ノ條約ニヨリルーザー派ハ一時寛治ノ下ニ生息スルコヲ得タリ、然ルニ新
教黨ハ敢テ自カラ其教義ヲ確説セズシテ却テ議會ノ決定ニ付シタルヲ以テ終ニ疑
問ノ全体ヲ再議スベシトノ口實ヲ皇帝ニ與ヘテ其威權ヲ張ラシムルニ至レリ、然リ
ト雖モ土耳其ノ侵畧倍々切迫セリ、若シ土耳其ヲ捷利チ此ノ際ニ得セシメバ、
新教黨ハ必ズ拜神ノ自由ヲ得ルニ至リシナラン、又ブランドンブルグノヨアキム及

兩黨此ノ宗
教和約ニ服
セザル者ア
リ

ヒ他ノ熱心ナル舊教黨ハ、此ノ平和ヲ嫌忌嫉視シ、新教黨中ニ於テモヘツス公ハ此
ノ約成リシガ爲メニ新教更張ノ機會ヲ未來ニ失ヒタリトナシテ之ヲ悦バザリキ、乃
チヘツス公ノ派遣セル使節ハ、初メ此ノ和約ニ署名スルヲ拒ミタリ、然レモ他ノ
諸公侯皆之ヲ肯諾シタルガ故ニ、遂ニヘツス公ハ之レニ同意スル乎、然ラズンハ孤
立スル乎、勢ニ迫リタリ、既ニノ皇帝ラチスボンニ集ルル國會ニ命ジテ、先キニア
ウグスブルグニ於テ議決セシ兵數ヲ増加シテ六萬トナサントセシニ、國會ハ此ノ請
求ヲ拒ミタリ、但公侯及ビ都邑ノ代理員等其ノ既ニ可決シタル兵ヲ徵集スルニ就テ
ハ非常ノ氣勢ヲ現ハセリ、就中サキソニー撰擧侯ノ子シヨン、フレデリックキハ、其ノ
父疾篤クシテ殆ト死セントスルニ際シ、父ニ代リ和約ヲ成スニ力メタルガ、精兵ヲ皇
帝ニ供セントシテ大ニ心力ヲ尽シ、且自カラ之ヲ率ヒテ戰ニ赴カンヲ請ヒタリシ
ガ、此ノ請求ハ容ラレザリキ、幾バクナラズシテ父侯卒ス、乃チ繼テ撰擧侯トナレ
リ(千五百三十二年八月十六日)

「カロリン」
法

此ノラチスボンノ國會ニ於テ有名ナル法制ヲ議定セリ、之ヲ「カロリン」法ト稱ス

ルハ、皇帝チヤーレンス五世ノ名ニ取リタルナリ、按「チヤーレンス」ノ日耳曼音ハ「カル
ハ」ノ法ト云フ、此ノ法ハ少シク魯莽ノ所アリ矛盾ノ所アリテ完備ト謂フ可カラザル
モ、日耳曼刑法ノ一成典ナリトス、蓋シ是レヨリ以前邦内各方ノ小君小國、皆死刑ヲ
斷ズルノ特權ヲ有シ、且往々最モ慘酷ナル拷訊ヲ用井タリシニ、此ノ法成リテヨリ
刑法ノ酷毒大ニ減シ、全帝國ヲ通シテ刑罰其平ヲ得ルニ至レリ、
チヤーレンスハ土耳其ヲ防グガ爲メニ兵隊ト軍費トヲ徵スルヲテ日耳曼ノ新教黨ニ
要求スルノミナラズ、他ノ歐洲諸國ニモ之ヲ要求シ、特ニ佛王ニ對シテ之ヲ爲セリ、
是レカムブレノ和約ノ條款ニ於テ佛王ハ日耳曼帝ヲ助クルノ義務アルヲ載セ
タレバナリ、而シテ千五百三十一年ノ初日耳曼帝、佛王ニ向テ軍需ヲ出サンヲ求
メリ、此ノ如キノ要求ハ、勢ヒ他ノ波瀾ヲ起スヲ免ル、能ハズシテ、特ニ其ノ金ト
兵トヲ出ス事ヨリハ、之ヲ出サセムルノ方法ニ關シテ佛王ヲ激厭セシメタリキ、即チ
佛國ニ募リタル兵ハ皇帝之ヲ指揮スベク、且ツ兵ヲ出サズシテ之レニ代ユルニ金ヲ
以テスルハ、更ニ帝意ニ適スル旨ヲ告タリ、フランシスハ佛國ノ使節トシテ羅馬ノ

法廷ニ駐在スル所ノアウゼルノ僧正フランソウア、ド、ゲンテツ井ルニ與ヘタル書
 中ニ其ノ憤懣ノ情ヲ明言シテ曰ク、自國ノ軍兵ヲ率ヒテ躬カラ戰ニ赴クハ、予ガ祖先
 以來ノ定例ニシテ世ノ知ル所ナルニ、兵隊ヲ徵セズシテ其ノ代金ヲ求メテレタルハ
 予ノ最モ驚駭スル所ナリ、然レトモ法皇ニシテ兵ヲ要スルコトアラシキ事ハ直チニ五
 萬ノ歩兵三千ノ騎兵及ビ要用ノ砲兵ヲ以テ意大利ニ赴カントスト、是言ヤ夫ノ佛王
 ガ意大利ヲ有スルノ權利アリト云フ口實ヲ未ダ全ク棄テザリシ分明ナル恐嚇ナリ、
 フランシス又曰ク、予ハ他人ノ私利ニ關スル怨隙ノ爲メニ土耳其ト戰爭ヲ開クコトヲ
 好マザルナリ、殊ニチャーレス帝及ビフェルヂナンドハシヨン王(ザボリア)ト和約
 ナ締マ、土耳其侵略ノ危険ヲ避クルヲ得ベキナリ、而シテ予ハ此ノ如キ和約ヲ贊
 成協力スルニ意アル者ナリト、且フランシスハ實ニ是レヨリ先キザボリアト久シク
 同盟ノ約ヲ締ビタルコト前段ニ記スル所ノ如クニシテ、今ニ至テ更ニ盟約ヲ鞏固ニセ
 リ而シテ皇帝上ニ記セシ軍需ヲ佛廷ニ督促スルニ際シ、シヨン王ノ使節ハイロニマ
 ス、ラスジ佛廷ニ來レリ、フランシスハ此ノ使節ニ因リ、ナヴァール王ノ同胞イサ

フランシス
 及ビザボリ
 ア同盟

ポーチジョン王ニ嫁シ、且ツ金若干ヲ贈ルコトヲ約シタリ、但シ此ノ金ハ佛國ノ同盟
 ニ敵對スルノ費用ニ供ス可カラズ、如何ナル場合ニ於テモザボリアガ土耳其ノ勢援
 ニ藉リテ私利ヲ營求ス可カラズトノ約ヲ爲シテ以テフランシスハ道德ヲ尙フガ如
 キ僞君子ノ風ヲ裝ヘリ、其ノ後幾バクナラズシテフランシス一書ヲ大僧長ノ會衆ニ
 贈リ(二月二日)之レニ告ゲテ曰ク、予ハ自カラ兵ヲ用井ルノ急アリ、何ントナレバ土
 耳其ノ海盜ハイラツヂン、バルバロッツサ將サニ佛國ノ海岸ヲ侵サントスルヲ以テナ
 リト、其後千五百三十二年フランシスハ土耳其ノ匈牙利ニ侵入スルヲ扞禦スルニ力
 メタリト雖モ其意皇帝或ハフェルヂナンドヲ援助スルニ在ラザリキ蓋シフランシ
 スハ法皇日耳曼帝或ハフェルヂナンド王ガ土耳其ニ脅カサル、ノ虞アルハ、其ノ實
 彼等ヲシテ新教党ト調和セシムルノ勢ヲ助ケ、因テ以テ彼等ノ權威勢力ヲ増加スル
 コトヲ信シタリ、是ニ於テ千五百二十一年ノ末ニリンコンナル者ヲ土廷ニ使シ、以テ
 土軍侵入ノ不可ナル所以ヲソリマンニ説カシメントセリ然ルニ使節リンコン疾ニ
 罹リテ期ニ後レ、其ノソリマン帝ニ謁見スルキハソリマン既ニベルグレードマデ進

佛王東方ノ
耶蘇教民ヲ
保護ス

發セリ、而シテソリマン謂ヘタク今ニシテ兵ヲ旋サバ人將サニ言ハントス土軍西班牙ノチヤールニスヲ懼レテ去レリト、遂ニ使節ノ言ヲ聽カズシテ軍ヲ進メリ、是等ノ往復ト事情トハ以テ佛土兩廷ノ間ノ關係如何ヲ見ルニ足ルベシ、蓋シ佛王先キニ日耳曼軍ニ敗ラレテ囚虜トナリテヨリ以來、ソリマント友情最モ厚シトス、千五百二十八年土耳其帝ハ佛國及ビカタロニアノ商人ニ對シ、埃及ニ於ケル貿易ノ諸特權ヲ與ヘ、同年又フランシスハゼルザレムノ耶蘇教徒ヲ自カラ保護セントスルノ意アリシガ如シ、是レ土耳其領ニ住スル耶蘇教民ヲ佛國ニ於テ保護スベシト夙ニ主張セシ其ノ一事ニ居ル者ナリ、ソリマン又ゼルザレムノ寺院ノ最大ナル者ヲ除キ、此ノ大寺ハ既ニ回教ノ寺院トナセリ、其ノ他ハ耶蘇教ノ寺院ニ用井ルヲ許可シタリ、而シテフランシスハ自カラコンスタンチノープルニ赴キ其ノ囚虜トナリシ間援助ヲ與フルヲ約セラレタルヲ謝シ、且ツゼルザレムニ至リテ聖壁ヲ拜セントノ意思ヲ懷キタルガ如シ、

チヤールニスガ法皇及ビヴェニス人ニ向テ請ヒタル土耳其ニ對スルノ援助ハ、亦フ

ソリマン匈
牙利ヲ侵ス

ランシスニ向テ請ヒタル援助ノ如ク徒ニ膏餅ニ屬シタリ、是ノ如ク諸國援助ノ途盡キタルヲ以テ其ノ自力ニ依頼セサルヲ得ザルニ至レリ、而シテ皇帝ノ軍神速ニ且多ク集マラザリキ、リンツ、維納ノ間タルノ平原ニ於テチヤールニス自カラ兵ヲ閱ミセシニ、約チ八万ヲ得タリ、其ノ多數ハ日耳曼人ニシテ、意太利西班牙チーゼルランド人ノ混合ヨリ成レリ、而シテ其ノ中二萬四千人ハルザー派ノ諸國ノ出ス所ニ係レリ、

千五百三十二年四月二十六日、ソリマン東方ノ通習ナル盛裝壯觀ヲ盡シテコンスタントノープルヲ進發セリ、百二十門ノ大砲隊第一ニ進ミ、八千ノ精選セル「ジョニスサリー」兵之レニ次キ、又許多ノ駱駝、輜重ヲ荷ヒテ之レニ隨ヘリ、其ノ次ニ皇帝ノ親衛騎兵二千アリ、軍旗ト眞珠及ビ寶石ヲ以テ華麗ニ飾レル豫言者ノ鷲標トナシ此ノ隊ニ掲ゲリ、此ノ行列ニ次テ耶蘇教國ヨリ貢進シ土廷ノ宮内ニ於テ教育セラレタル兒子隊アリ、皆金色ノ衣ヲ着ケ、婦人ノ如キ長鬚ヲ垂レ、白羽ヲ挿メル紅帽ヲ戴キ、ダマスキユス様ニ從テ巧ミニ製作セル一様ノ鎗ヲ持セリ、次ニ皇帝ノ冠ヲ恭シク捧グル者

アリ、此冠ハ十一万五千「ヂユカット」ヲ以テヴェニスニ於テ製造シタル者ナリ、次ニ宮内ノ臣容貌最モ雄偉ノ者一千人弓矢ヲ持セリ、或ハ牝牡ノ獵犬ヲ牽キ或ハ鷹ヲ手ニセル者アリ、此ノ総軍ノ中央ニソリマン金ヲ以テ飾リタル深紅ノ衣ヲ穿テ、寶玉ヲ以テ裝ヘル雪白ノ頭帕ヲ戴キ、粟毛ノ馬ニ騎リ、盛飾セル大小ノ二刀ヲ持シタリ、而シテ此ノ行列ノ最後ニ和臣四人（此ノ中最モ著キ者チイブラヒムトナス）及ビ土廷ノ貴顯其ノ臣僕ト共ニ之ニ隨ヘリ、ソリマンハ此ノ如キ行列ヲ整ヘテ其進軍ヲ始メ、而シテ其ノ途次兵卒ノ四方ヨリ來リ會スル者多ク、其ノ匈牙利ニ入リシ時ハ総軍三十五万ヲ以テ數フト云フ、

フエルヂナ
ンド使ヲ遣
ハシ和ヲ議
シテ成ラズ

フエルヂナンド更ニ使節ヲ發シテ和ヲ講ズルコトヲ試ミ、而シテベルグレードニ於テソリマンニ謁見セリ、且ツ佛國ノ使者リンコンモ亦既ニ此ニ在リ、埃地利使節ノ一行ハ一万二千ノ「ジエニスサリ」兵兩側ニ立テテ列ヲ爲セル間ヲ經行シ、導カレテソリマンノ帳帷ニ入リシニ、ソリマン黄金ノ牀ニ踞シテ之ヲ見ル、其ノ牀ノ柱前ニ華麗ナル二個ノ刀劍アリ、眞珠ヲ以テ其室ヲ飾レリ、又弓及ビ箠アリ、皆盛飾ノ者ニア

ラザルナシ、使節ノ計算セシ所ニヨルニ、蓋シ百二十万「ヂユカット」ノ價格ニ當レリト云フ、使節講和ノ目的ハ之ヲ達スルコト能ハザリキ、是レ當然ノ事ニシテ怪ムニ足ラザルナリ、ソリマンハ日耳曼國會ノ開場タルヲチスボンノ此ヲ距ルコト幾許里ナルヤヲ知ラント欲シテ之ヲ問ヒシニ、馬行ニテ一月ヲ要スト聞キ、乃チ進軍ヲ決シタル旨ヲ明言セリ、使節ハ土軍ノ陣中ニ抑留セラル、二月ニシテ遂ニ軍行ニ從ハザルヲ得ザルニ至レリ、七月二十日土軍舟橋十二ヲ作リテユツエツクノツレーウ河ヲ渡過セリ、ソリマンノ匈牙利ヲ經行スルヤ、其ノ狀恰モ自國ノ領内ヲ行クガ如ク、諸所ノ城寨ハ其ノ軍ノ近ヅクニ及ビテ皆城門ノ鑰鍵ヲ贈リ、而シテソリマンハ匈牙利ノ貴族ニシテザボリアニ叛キ去リタル者ヲ糾彈シテ之ヲ刑セリ、又其ノ水軍ハダニユーブ河ヲ遡リテプレスブルグニ至ル、而シテ此ノ地ヨリ維納ニ進向セズシテ、路ヲ南方ニ轉シニユーサイエドル湖ヲ右顧シテスチリアニ向ヘリ、八月一日ソリマンングユンスノ小市府ノ前ニ達ス、此ノ眇乎トシテ塹壘完カラザル一城地、ソリマンヲシテ最モ羞ツベキ退軍ヲ爲シムルニ至リタリ、蓋シ東方擅制ノ君主ヲシテ其驕

傲ノ氣ヲ挫折セシメタルコトハ、古昔セルクゼスガアツチカチ侵攻セル有名ノ役ヨリ
 以來此ノ舉ヲ以テ然リトナス。(按「セルクゼス」ハ波斯古代ノ帝ナリ、大軍ヲ率ヒテ
 希臘ヲ侵セリ、アツチカハ希臘ノ古國ノ名、セル
 クゼス」ノ軍大ニ「アルモヒレイ」ニ敗績スル事ハ紀元前
 四百八十年八月七日ヨリ九日ニ至ルノ間ニ在アリ
 東方軍裝ノ盛ナル、土軍ノ
 衆多ナル、土耳其帝自カラ之レニ將トシテ進攻セシニ、約チ七百ノ戍兵(此ノ中正兵
 ハ三十人ニ過ギザリキ)及ビ之レニ副フ所ノ僅少ナル騎兵ノ爲メニ三週日餘ヲ支ヘ
 ラレタリ、此ノ守兵ニ將タリシ者ハニコラス、ジュリツシチニシテ、嘗テ壤地利ノ爲
 メニ土廷ニ至リタル使節ノ一人ナリ、此ノ勇猛ナル少數ノ守兵、土軍ノ進兵ヲ邀撃シ
 テ之ヲ卻グルコト十一回ニ及ヒ、ソリマン遂ニ之レニ克ツ能ハズ、纔カニ城兵ニ有禮ノ
 投降ヲ爲サシムルヲ以テ満足シタリ、唯土軍ノ旗ヲ樹ツルガ爲メニ十人ノ「ジュエニ
 スサリ」兵ヲ一時尙城中ニ留ムルコト許サレタルノミ、土軍ノ此ノ地ニ淹留セル
 コト、別軍ノ騎兵一万五千人ソムメリング狹道ニヨリテ壤地利ニ入ラントセシ者、
 セバスチアン、シャルトリンノ爲メニ撃破セラレタルトニヨリテ、壤國土軍ノ侵入ヲ
 免ル、チ得タリ、佛國及ビヴニニスノ使節ソリマンニ從ヒテ其ノ陣中ニ在ル者、此

チヤーレンス
軍ヲ旋ス

ノ如ク疲弊シ且ツ沮喪セル軍ヲ以テ、チヤーレンスノ新來整頓セル軍兵ト大戰スルノ
 不利ナルコトヲ説キテ以テソリマンヲ諫メタリ、而シテアンドローア、ドリアガ水軍ヲ
 率ヒテモレアナチ攻メテ敵ヲシテ内顧セシメタルコトモ、亦佛人及ビヴニニス人ノ此
 ノ諫言ニ力ヲ加ヘタリ、ドリアハコーロン、パトラス及ビレバント灣(モレアノダルダ
 チールストモ云フベキ要害ノ灣。(按「ダルダチールス」ハ亞細亞歐羅巴チ分界スル海
 峽ニシテ、マルモラ海ト希臘多嶋海ノ間ニ在ル
 ナリ)ヲ防守スル所ノ二要害ヲ陷レタル後、其ノ兵ヲ上陸シ以テ希臘人民ヲ煽動シテ
 叛起セシメタリ、ソリマングラツ、チ合圍シテ力攻スト雖モ、戍兵能ク防グヲ以テ克
 ツコト能ハズ、遂ニソリマンガ大ニ準備シテ必ス成功ヲ期シタル遠征軍ヲシテ己ムヲ
 得ズ綏退スルニ至ラシメタリチヤーレンスハ土耳其ノ退軍ヲ追躡セント欲スト雖モ、
 時既ニ寒冷ニ迫リ、糧食亦乏ク、加之其ノ兵隊中ニ疾病流行シタルト、諸公侯歸國ヲ
 望ムノ念切ナル等ノ事情ニヨリテ、其ノ欲スル所ヲ遂グル能ハザリキ、然リト雖モ此
 ノ役ノ全跡ヲ概スルニチヤーレンス親カラ其ノ軍ニ將トシテ初メテ戰陣ニ臨ミ、勅敵
 ナシテ意ヲ得ズシテ退軍セシメタルハ、其ノ光榮成功亦大ナリト謂フベシ、此ノ役

フエルヂナ
ンド及ビ土
廷ノ締約

纒カニ畢ルヤ、皇帝ノ軍皆散歸シタルヲハ大ニフエルヂナンド王ヲ失望セシメタリ、其ノ故ハ勝ニ乗シ兵ヲ進メベルグレドヲモ合セテ匈牙利全國ヲ恢復セント冀望シタルバナリ、然レモ日耳曼ノ諸將ハフエルヂナンドノ希望スル所ヲ聽許セズ、其ノ教令ニハ此等ノ事ナク、又其ノ多數ハ之レニ從フヲ快バザル者ナリ、然リト雖モソリマンハ斯ノ如キ事アランヲ畏レテジョン、ザボリアノ要求ニ應ジエスセツクニ六万ノ兵ヲ遣シテ之レニ備ヘタリ、明年(千五百二十三年六月二十二日)ニ至リコソスタンチノープルニ於テフエルヂナンドノ使節及ビ土廷ノ問ニ和約ヲ締ベリ、此ノ條約ニ於テフエルヂナンドハ其ノ匈牙利内ノ所領ヲ悉ク保有シ、其ノ好ム所ニ隨テザボリアト締約スベシトナセリ、土軍ノ退去スルヤ、日耳曼皇帝ハ西班牙ニ歸シノ途次、再ビ意大利ニ過キリ、千五百三十二年十二月ボロニヤニ於テ法皇ト會見シ、是ノ時ヲ以テ千五百二十九年ノ條約ヲ固定擴張シ、ミラン公フエルラ、公及ビゼノア、サイエナノ二共和國ト同盟セリ、是レ其ノ旨趣ハ意大利ノ現狀ヲ維持保存センガ爲メナリ、然ルニ法皇クレメント今

フランシス
一世及ビヘ
ンリー八世
ノ締約

ハ竊カニ意ヲ佛王ニ屬シテ私約ヲ通ズルノ故ヲ以テ、皇帝ノ意見ニ協同スルヲ悦バズ、就中「エスト」家ハ羅馬法皇ノ隸屬トシテフエルラ、ヲ保有スベク、日耳曼帝國ノ隸屬トシテモデナ、レツギオヲ保有スベシト斷決セルノ一事ニ至リテハ特ニチャールスノ意ニ逆ヘル者トス、而シテチャールスハ前日ヨリ屢々促ガシタリシ宗教會議ノ事ヲ法皇ニ迫リシヲ以テ、法皇之ヲ悦バスト雖モ勢已ムヲ得ズシテ新ニ開會ノ命令狀ヲ發スルニ至レリ、是レヨリ先キ皇帝日耳曼ニ在リテ土耳其ノ軍ニ對スルニ當リ、英王ヘンリー八世佛王フランシス一世ブーロンニ會見セリ、二王謂ヘラク斯ク外寇ノ侵入シテ帝國危急ノ秋ニ乗ジ公然皇帝ニ反對セバ、恐ラシハ天下之ヲ賤惡スルナラント、而シテ千五百三十二年十月二十八日二王ノ間ニ締ベル條約中ニハ、八万ノ兵ヲ以テ土耳其ノ憎ムヘキ強暴ヲ抗拒スベキ旨ヲ載セタリ、抑々此ノ時期ニ際シテヘンリーガ佛王ニ協同シテ其ノ歡心ヲ迎ヘタル所以ノ者ハ、其離婚ノ事ニ關シテ法皇ト爭抗シ、又此ノ事ニ關シテ法皇ト同意見ナル皇帝ニ反對セント欲スルニ由レリ、ヘンリーハ僧正ト

ヘンリー
離
婚ノ事案

一マス、クランマーノ建議ニ從ヒテ離婚ノ可否ヲ歐洲ノ諸大學校ニ問フニ決シタリシキ、佛王ガ皇帝ニ五十万「クラウン」ヲ拂フベシト約シタル者ヲ破毀シタリ、是レ皇帝ガマリ―ヲ娶ルノ約ヲ破リタルノ過料トシテ之ヲ拂ハザルヲ可トセシナリ、而シテ佛王ガ負フ所ノ他ノ債金四十万「クラウン」ハ五年賦トシテ消還シテ可ナリト云ヘリ、是ノ如ク英王ハ佛王ノ利トナルベキ説ヲ立タルヲ以テ、佛王ハ其ノ報トシテ其ノ勢力ノ及ブ限リハ諸大學校ヲシテ英王ノ利トナルベキ離婚ノ判決ヲ得セシムルコトニ勉メタリ、乃チ此ノ目的ヲ遂ンガ爲メニ、時トシテハ賄賂ヲ用ヒ、時トシテハ脅嚇ヲ行ヒタルコトアリ、邑里ノ大學ニ於ケルガ如キハ乃チ其ノ一例ナリ、二王ノ會見スルニ當リ、離婚問題ニ關シテ大ニ論議シタリ、而シテヘンリーハ今ベムブロークノ女公ナルアン、ボレインヲ携ヘテカレイニ赴キ、先キニブローロンニ於テ款待セラレタルコトヲ佛王ニ謝センガ爲メニ饗禮ヲ盛ニシテ厚ク之レニ酬ヘリ、而シテ佛王ハ此ノ狂迷セル異教者ト共ニ舞踏シテ歡ヲ盡セリ、（按）狂迷セル異教者トハ英王「ヘンリー」ヲ云フ、蓋シ「ヘンリー」ガ羅馬教會ニ反對セルハ、其ノ后「カザリオン」ト離婚シテ「アンボレイン」ヲ娶ラント欲スト雖モ羅馬法皇之ヲ許サルヲ以テナリ、故ニ狂迷セル異教者ト云フナラン

ヘンリーハ教典ヲ引キ宗教史ニ據リテ、其ノカザリオントノ婚姻ハ無効ナルコトヲ證セントセリ、（按）カザリオンハ「ヘンリー」ノ兄「アルブル」ノ寡婦ニシテ兄ノ死後「ヘンリー」ト婚セリ故ニ此ノ婚姻ハ無効ナリトノ説ヲ主張セシナリ
 又近時其ノ胸中ニ充溢スル所ノ法皇ニ對スル厭惡ノ情ヲフランシスノ胸中ニ浸入シ彼レヲシテ已ト感テ同フセシメント勉メタリ、フランシスハ英王ノ此ノ狀ヲ見テ其ノ奇異ニ驚キ、且ツ心中ニ笑ヲ含ミタリ、何トナレバヘンリーガ此ノ如ク教會ノ權勢ニ畏服シテ頻リニ是非ヲ教典宗教史ニ質シナガラ、之レト同時ニ再婚ノ情慾ヲ遂ントスルニ熱心ナルハ殆ント柄鑿相容レザルノ舉動ナレバナリ、而ソフランシスハヘンリーニ勸ムルニ別ニ儀式ヲ舉行スルヲ須非ズシテ直チニアント婚スベキ旨ヲ以テセリ、抑々フランシスノ位置身事ハヘンリーニ異ナリテ、竊カニ法皇クレメントト商議ヲ開キ盟約ヲ爲スト雖モ、其胸裡ニハ法皇ノ羈絆ヲ脱セントスルノ意ナキニアラズ、蓋シ其ノ最モ心ヲ痛マシムル所ハ自家ノ窮乏ニアリテ、佛國教會ノ富資ヲ有スルヲ妬忌セリ、フランシス又瑞典國ノ二王ガ其ノ國中ニ平和ナル宗教改革ヲ遂ゲテ大勢力ヲ得タルヲ見テ之ニ倣ハントスルノ意アリ、然リト雖モフラン

ヘンリー、ア
ンボレイ
ント婚ス

シスハ尙ホ意大利ヲ經營スルノ念、未ダ其ノ胸中ニ絶ヘザルヲ以テ、此ノ圖謀ニ關
シテハ最モ法皇ノ援助ヲ要スル者アリ、然ルニヘンリーハ毫モ斯ノ如キ計畫ヲ有セ
ズ其ノ再婚ノ望ヲ達セズシテ空ク多年ヲ經過シ、意中頗ル快々タリシヲ以テ、フ
ンシスノ言ヲ聞クニ及ビ、直チニ之ニ從フニ決心シ、千五百二十三年一月廿五日私
ニアン、ボレイント結婚ノ式ヲ行ヘリ、其ノ後幾バクナラズシテ當時カンテルベリ
ノ大僧正トナリタルクランマーハカザリオンニ對シテ離婚ノ決定ヲ申告シタルヲ
以テ、千五百二十三年六月一日公然アンヲ冊立シテ王后ノ位ニ即カシメタリ、而シ
テ法皇ハ日耳曼帝ノ德恩ニ從ヒテ、千五百二十二年十二月二十三日此ノ結婚ヲ禁止
スルノ法勅ヲ發シタリシガ、之ヲ公行シタルハ實ニ翌年二月ノ事ナリキ、
同年ノ間フランシスガ法皇ニ對スルノ關係ハ一層ノ親密ヲ加ヘタリ、千五百二十一
年六月以後佛王ノ第二子オルレアン公ヘンリートメヂシ家ノカザリオン（其ノ生
誕ハ前篇ニ記シタリ）ト結婚ノ商議ヲ開ケリ、然レドモ其ノ事ハ皇帝ノ再ビボロニ
ヤニ駐蹕スル時マデ決セザリキ、帝ノボロニヤニ在ルマ、法皇ハ帝ノ己レヲ遇スル

オルレアン
公「メヂシ」
家ノカザリ
オント婚ス

薄キヲ憤リ、特ニ強テ宗教議會ヲ開カンヲ要求シタルヲ怒リ、遂ニ明年ノ秋マル
セイニニ於テ佛王ニ會見シ、而シテ此ニ在テ婚儀ノ執行ヲ助ケント約シタリ、フ
ンシスハ法皇ニ要求シテ曰ク、意大利國中ピサ、レグホルン、レツジオ、ルビエラ、モ
ナ、バルマ、ピアセンザ、ウルピノ、ミラン、ゼノアノ諸地ヲ團結シテ其子ノ爲ニ一公國
ヲ創立セラレンコト、及ビ佛國ガ此等ノ諸地ヲ再ビ克服スルニ臨ミ法皇ノ援助セラレ
ンコトヲ請フト、而シテ法皇ハ機會ノ到ルアラバ此ノ請求ニ應セント欲シタリ、但ミ
ランゼノアノ事ニ就テハ一言ヲ發セサリキ、此等ノ計畫ハ固トヨリ深ク秘シテ人ニ
知ラシメザランコトヲ勉メリ、千五百二十三年十月ノ末マルセイユニ於テ法皇ト佛王
ト會見シテ三週日ヲ涉レリ、十月二十七日法皇自ラ婚儀ヲ執行シ、少年ノ夫妻ニ祝
辭ヲ與ヘタリ、オルレアン公（其ノ後、公ノ兄卒シテ公乃チ佛國ノ太子トナリ尋テ佛
王トナレリ）此時齡纔カニ十五歳「メヂシ」家ノカザリオンハ稍公ヨリ長ゼリ、其ノ身
体短小ニ肉瘦セテ美ナラズ、又其ノ一家ノ特相ナルカ如ク眼目大ナリシト云フ、佛
王フランシスハ是マデ意大利ニ於テ之ヲ領スルノ權利アリト主張セル者ヲ移シテ

悉皆其ノ子ニ讓與シタリ、是ヨリ先キチャーレンス帝ハ佛王ノ子ト「メヂシ」家ノ女ト
婚セントスルノ説ヲ聞キタリシト雖モ、此ノ結婚ハ佛王ノ血統ヲ卑族ノ「メヂシ」家
「メヂシ」家ハ近年マデフロレンスノ平民ナリキノ爲ニ汚ストナシテフランシスノ
必ズ肯ゼザランコトヲ信シテ、曾テ之ヲ阻遏スルノ計畫ヲ爲サザリシナリ、

ヘンリー八世ノアン、ボレイント婚儀ヲ行ヒタルノ新報ハ法皇佛王ノ會見ニ先チテ
（五月十二日）羅馬ニ達シタリ、蓋シ今チ「ゼルランド」ノ女太守タル故トノ匈牙利王
ノ寡后マリイガ至急此ノ事ヲ皇帝党ノ大僧長ニ報告シタルヲ以テナリ、蓋シ數年前
ニ法皇クレメントハヘンリーニ此ノ舉テ決行スルモ可ナリト答ヘタリ然レモ此ノ
時ニ於テハ法皇未タ皇帝ノ勢力ニ支配セラル、コトナカリキ、其後法皇ハヘンリーニ
短文ノ禁止令ヲ贈リテ之ヲ止メタルコトアリ、然ルニ今此ノ結婚ノ事アルヲ以テ、法
皇ハ直チニヘンリーヲ羅馬ニ召喚シ、自カラ到ル能ハザレバ代理ヲ出スベシトノ命
ヲ下セリ、若シ克蘭マーガ離婚ノ許可ヲ與ヘタルノ報羅馬ニ達センニハ、教會最
後ノ極メテ嚴酷ナル譴責ヘンリーノ頭上ニ轟鳴スルナラントハ一般ニ豫想セル所ナ
ラ

ヘンリー
馬ニ召喚セ
ラル

ルヲ以テ、ヘンリーハ之ヲ豫告シテ以テ法皇ノ勢焰ヲ挫カント欲シ、六月二十九日
ニ於テヨークノ大僧正ニ控告スルニ法皇ガ次回ノ宗教議會ニ於テ宣告セント欲ス
ル譴責狀ノ事ヲ以テシタリ、
既ニシテ離婚ノ報羅馬ニ達スルヤ、法皇ト羅馬ニ派遣セラレタル英國使節トノ間ニ
劇烈ナル争鬭ヲ生ジタリ、使節ノ一人ボンチー（後チ倫敦ノ有名ナル僧正トナリシ
人ナリ）其ノ用語ニ慎マズシテ過激ノ言辭ヲ發シタリシヲ以テ、法皇ハ之ヲ烹殺ノ
刑ニ處セント脅セリ、然レモヘンリーハ使節ニ令シテ其ノ説ヲ固守シ且ツ論点ヲ逐
一ニ争辨セシメタリシニ、議論漸ク進ムニ隨ヒ法皇ハ遂カニ刑罰ニ依頼スルノ得策
ニアラサルコトヲ思惟セリ、七月十二日法皇法勅ヲ發シテ克蘭マーガ離婚ノ許可ハ
無効ナリト宣告セリ、而シテ法皇ハ命ニ違背セシ罪ヲ聲シテ英王ヲ教外放逐ノ刑ニ
處シタリト雖モ、之ヲ實行スルコトハ九月マデ猶豫シタリキ、是レ其ノ悔悟追改スル
ノ機會ヲ彼レニ與ヘント欲シテナリ、此ノ時ニ當リ英王ヘンリーハサキソニ「撰擧
侯及ビ日耳曼ノ新教党ト交誼ヲ厚クセンコトニ力メ、此ノ目的ヲ達センガ爲メニ「ザ
ヘンリー」日

耳曼新教党ニ歡ヲ結バントス

ウガンチ使節トシテウエーマルニ遣ハシ撰擧侯ジョン、フレデリッキニ見ヘシム、然ルニフレデリッキ之レテ冷遇シタルヲ以テ速カニ歸リ去レリ、當時日耳曼ノ新教党ハ一時皇帝ト和睦シ、新タニ爭議ヲ開キテ皇帝ノ憤怒ヲ招クノ意アラザリシナリ、英王又ノルフオーク公ヲ使節トシテ佛王フランシスニ謁シ、之レニ説テ其ノマルセイユニ於テ法皇ト會見セントスルヲ止メントセリ若シ之ヲ止ムル能ハサレハマルセイユニ往カズシテ直チニ歸國スベキヲ命セリ是レ英王ノ敵ナル法皇ノ爲メニ使節ノ迫ラレテ會合ニ列セザルヲ得ザルニ至ランコトヲ恐レテ之ヲ避ケシメタルナリ、然レモ先キニ英王ノ爲メニ羅馬ニ使セシボンナーハ、羅馬ヨリ法皇ニ隨行シ、ヘンリー仰訴ノ旨ヲ含ミテ十一月七日マルセイユニ到着シタリ、ボンナー同月十三日英王ニ贈リタル書狀中ニ法皇此ノ訴告ヲ受テ激怒セル模様ヲ詳記シタリト云フ、又佛王ノ法皇ニ會見スルヤ、英王ノ爲メニ大ニ辨護ノ勞ヲ取レリ、是ニ於テ平會ヲ終ルニ先ダテ法皇ハ其ノ論歩ヲ左ノ点マデニ譲リテ曰ク英王若シ外部ノ禮式ニ於テ法皇ノ法權ヲ承諾スルニ於テハ、予ハ英王ノ主張スル所理アルヲ信スルカ故ニ、其ノ

英國法皇ノ法權ヲ廢ス

主張ヲ可トスルノ宣告ヲ與フヘシ、又英王ヲ羅馬ニ召喚スルノ命ヲ更メテカムブレニ於テ審判ヲ開クベキナリト、然ルニ英王ハ法皇ノ己レヲ欺クコトヲ疑ヒ、(此ノ疑モ亦全ク理ナキニアラズ)法皇ノ命ヲ拒ミ、其ノ後フランシス一世ニ與フル書中ニ、法皇予ノ主張ヲ理アリトセバ別ニ要求スル所ナクシテ之ヲ可トスルノ宣告ヲ與フベキニ、其法權ヲ承諾セバ予ノ主張可決スヘシト云ヘリ職ラス幾許ノ程度マデ予ノ主張ヲ認可シタル乎ト、此ノ疑問ヲ擧テ嚴ニ之ヲ難シタリ、(按英王ノ主張ヲバ、法皇其ノ法權ヲ認メバ云々ノ要求ヲ爲サズシテ直チニ可決スベキニ、却テ此ノ要求ニ應ズルヤ否ト謂フテ可否ヲ左スル如キハ、眞ニ英王ノ主張ヲ認可セザル者ナラント難シ、然レモ法皇ガフランシスニ對シテ英王ヲ寬恕スルノ説ヲ爲シタルハ、其ノ意蓋シフランシスニ交結シ其ノ力ニ頼テ皇帝ノ掣肘ヲ免ル、ヲ得ント信シタルニ由ラズンバアラズ、)此ノ後幾バクモナク英國々會ノ有名ナル開期ニ會セリ、即チ千五百三十四年ノ初メニ開キタル國會ニ於テ英國内ニ法皇ノ法權ヲ廢スルノ決議ヲ爲シタルノ開期是ナリ、此開期ニ於テヤ異教ノ嫌疑アル者ノ處分法ヲ減輕シ、又初年稅ヲ廢スルノ條

例既ニ決議シ、未ダ批准ヲ經ザリシ者、此ニ至リテ國王ノ認可ヲ得タリ、按、僧侶ノ官職ヲ進メタル者ハ、其ノ寺領初年ノ入額ヲ法皇ニ納シタリ 此ノ事タル自然ニ僧正ノ任命法ヲ改正セル者ナリ、何トナレハ初年税ヲ羅馬ニ贈ラザルニ於テハ、法衣ト任命確定ノ法勅トヲ羅馬ヨリ贈ラル、一、無カルベキガ故ナリ、蓋シ是ヨリ以前ト雖モ、僧正任命ノ權ハ國王既ニ之ヲ僧會ヨリ剝奪セリ、而シテ法皇ノ之レニ與カルハ、纔カニ其ノ虛式ノミナリシガ、是ニ至リテ其ノ虛式モ亦不用ニ歸シタリ、但僧正ヲ撰舉スルノ權ハ之ヲ僧會ニ復與シタリト雖モ、其ノ撰舉後十二日內ニ之ヲ確定センガ爲メ國王ノ任命ヲ經ザル可ラズ、然ラズンバ王權ニ違叛スルノ罰ヲ以テ之ヲ處分スト定メタリ、此ノ如クニシテ僧會ハ只其ノ名義上ノ自由ヲ回復シタリ、何トナレハ僧正ヲ撰舉スルノ權利ヲ得タルモ之ヲ任命スルヤ否ヤハ全ク國王ノ擅斷ニ在リテ無制限ノ者ナレバナリ ピーターノ錢稅、按、ピーターノ錢稅トハ、聖、ピーターノ祭禮費及ビ羅馬廷ニ納メタル諸種ノ貢金ハ皆之ヲ廢セリ、而シテ三ヶ月內ニ法皇英王ヲ是トスルノ裁判ヲ與フルニアラザレバ、法皇ノ法權ハ英國ノ版圖內ニ全ク止息ス可シト定

メタリ、此ノ國會ハ英王トカザリントノ婚姻ハ無効ナリ、クランマーガ離婚ノ許可ハ有効ナリ、王トアン、ポレイントノ婚姻ハ法ニ合ヘル者ナリ、此ノ結婚ニヨリテ生シタル王子ハ、王位ヲ承繼スベシ等ノ箇條ヲ定メタル相續條例ヲ議スルヲ以テ其ノ開期ヲ終リタリ、

此ノ國會ノ開期終ルニ際シテ、法皇英王ヲ非トスルノ判決ヲ爲セリト云フノ報英國ニ到達シタリ、四月七日蓋シ此ノ判決ハ夙ニ定マリシト雖モ、巴里ノ僧正ノ中裁調停ヲカメタルノ故ヲ以テ、クレメント其ノ宣告ヲ二月二十二日マテ猶豫セシナリ、而シテ此ノ間ヘンリーハ法皇ノ要求ニ應セントスルノ意アリシガ如シ、然ルニ羅馬ニ遣ハセシ英國ノ使者事故アリテ途上ニ淹滯セリ此間クレメントハ西班牙大僧長ノ愆恩ニヨリハルセロナノ盟約以後西班牙大僧長ハ羅馬ノ宮廷ニ大權ヲ有セリ 英王ノ第二回ノ婚姻ヲ有効ナリト宣告シ、此ノ旨ニ違フニ於テハ英王ヲ教外放逐ノ刑ニ處スベシト言ヘリ、又此ノ宣告ヲ實行センガ爲メニ日耳曼皇帝ハ四ヶ月內ニ英國ヲ襲ヒ英王ヲ廢スベシト云ヒ、此ノ目的ノ爲メニ現ニ大兵ヲチーゼルランドニ集

メリ、而シテ佛王ハ英王ヲ援助スベキ旨ヲ約シテ、此ノ夏間ハ佛王ノ艦隊ヲ以テ英吉利海峡ヲ護衛セリ、チーゼルランドノ女大守マリーハ英國ヲ侵攻スルノ狀ヲ現ハシタリト雖モ、皇帝ノ心中英國ト深仇ト爲ルヲ好マザルハ諸事ニ就テ其兆候ヲ顯ハセリ、而シテ其ノ戰爭セントスルノ舉動ハ遂ニ其ノ成效ヲ見ザリキ、既ニシテ英國ニ於テハ其ノ羅馬ト絶ツノ事全ク決定シテ再ビ變ズル能ハザルニ至レリ、乃チ法皇判決ノ報告英國ニ達シタルノ日ニ於テ、法皇ノ法權ヲ英國ニ廢スル旨ヲ英國教門議會ニ於テ議決シ、六月二十五日王勅ヲ發シテ法皇ノ權利ヲ認メザル旨ヲ公告シ、次ノ國會即チ千五百三十四年十一月ノ開期ニ於テ法皇ノ權利ヲ廢シ、之レニ代ユルニ王權ヲ以テスルヲ議決シタリ、

クレメント
升遐ス

法皇ノ權利ニ對シテ此ノ如ク公然タル侵襲ヲ受ルニ先ダチテ法皇クレメント升遐シタリ、其ノ事九月ノ終リニ在リト雖モ其日ハ則チ詳ナラスクレメントハ放逸淫縱ノ行ナク、天資嚴肅ニシテ事務ニ勉強シ、又名聲ヲ立ツルノ冀望ヲ有セリ、然レモ騙詐多クシテ忠實ナラズ、蓋シ其ノ材器大ナリト雖モ性恇怯ナルガ爲メニ其決斷ヲ過

ポール三世
法皇ノ位ニ
撰擧セラル

ツク多ク、而シテ其ノ人チシテ忠實ナラザルノ觀ヲ致サシメタル者モ、亦職トシテ此ノ恇怯ノ短處アルニ由ラズンバアラズ、抑モクレメントノ性質ハ世ニ屢々見ル所ノ者ニシテ、人ノ下ニ立チテ謀議スルキハ雄偉ノ謀臣タルヲ得ベシト雖モ、苟モ決斷ノ責任其ノ身ニ存スルニ至リテハ首鼠兩端爲メニ機會ヲ失フヲ免レサルナリ、而シテ其ノ在位ノ間ハ羅馬ノ法廷ガ會テ受ケタル最大ノ厄運ニ當レリ、乃チ其ノ都府一タビ敵ノ爲メニ占領セラレ、其身囚虜トナリタリ、日耳曼端西ノ諸部ニ於テ宗教改革ノ起ルヲ目撃シ、英國ト羅馬法廷トハ分離シタリ、而シテ其ノ最モ彼レヲ悲痛セシメタルハ蓋シ英國分離ノ一事ニアリシナラン、何トナレバ其ノ此ニ至リシ所以ノ者ハ重モニ其ノ自己ノ政畧ニヨリテ之ヲ致セシヲ感ゼザルヲ得ザレバナリ、

クレメント升遐シテ其ノ後任ヲ撰擧スルニ當リ、佛王党日耳曼皇帝党ノ間ニ劇烈ナル爭議ヲ起セシガ、遂ニ兩党ノ何レニモ關係ナキアレンサンドロ、フアルニースヲ撰擧スルニ至リテ局ヲ結ベリ、千五百三十四年十月十二日(是ヲポール三世ト稱ス、フアルニースハ羅馬ニ生レ才能教育俱ニ富贍ノ人ナリ、是ノ人ヤ羅馬ニ於テポムポニ

オ、レトノ薰陶ヲ受ケ、フロレンスニ於テ「メヂシ」ノローレンツノ園ニ學習セリ、然レ此ノ時代ニ一般ニ流行セシ星卜學ノ迷信ヲ脱スル能ハザリキ、而シテ其ノ人ト爲リ從容寛汎ニシテ又盛觀ヲ喜ビ、且ツ羅馬ニ於テ最モ人望アリ、然リト雖モ僧長ノ法皇撰舉會ニ於テ多數ノ投票ヲ得タル所以ノ者ハ、職トシテ其ノ齡六十七歳ニシテ「按」其ノ頽齡ニ迫リ長ク法皇ノ位ヲ占ムル能ハザルヲ以テナリ、又其ノ許多ノ僧領ヲ有スルヲ以テ、法皇ノ位ニ登ル後ハ其ノ僧領ノ富テ僧長等ノ中ニ分配スルノ利ヲ享ルノ望アルニ由ルナリ、此ノ法皇モ亦前法皇ノ如ク内ヲ好ミテ嬖人多シ而シテ公然其ノ私生ノ男女ヲ自己ノ子ナリト認メタリ、又夫ノ「ファルニース」宮ヲ建立セシハ則チ此ノ法皇ナリ、英王離婚ノ件ニ關シテハ、大僧長「ファルニース」常ニ英王ニ左袒シ、而シテ其ノ終結ノ判決ヲ下シタル後ト雖モ尙ホ之ヲ再議センコト故法皇ニ勸言セリ、既ニシテ躬法皇ノ位ニ即キタルヲ以テ、佛王ヲ介シテ隱然和睦ノ談ヲ開キタルノミナラズ、尙ホ且ツ間接ニハ自身ニ此ノ事ニ勉メタリ、然レモヘンリーハ再ビ欺罔セラレンコト恐レ、斷然此ノ談判ヲ拒絕シタリ、是ニ於テカ法皇「ポール」二世モ其ノ和ス可カラザル

ヘンリー教
外放逐ノ刑
ニ處セラレ

ヲ見テ、千五百三十五年十一月初旬英王ヲ教外放逐ノ刑ニ處シ、此ノ刑ニ伴隨スル所ノ酷罰ノ外、更ニ附加スルニ左ノ箇條ヲ以テシタリ、曰クヘンリーノ王位ヲ剝奪ス、ヘンリートアン、ポレイントノ間ニ生ル、者ハ不正不義ノ兒子ナリ、英國人民ハヘンリーニ臣順スルノ義務ヲ脱ルベシ、且ツ干戈ヲ操リテ之レニ敵對スベシ、其ノ外國ト結ベル條約ハ一切無効ニ歸スベシ、而シテヘンリーガ羅馬ノ法廷ニ恭順ヲ尽スニ至ルマデハ歐洲ノ諸國ヘンリーヲ討セザル可カラザルナリト、法皇クレメントノ升遐ニヨリ、佛王「フランシス」ガ意大利ヲ經略セントスルノ圖謀ハ大ニ妨害セラレタリ、抑々「フランシス」ノ圖謀タル其ノ母ルイスノ死シテヨリ更ニ其ノ經書ヲ固クスルニ至レリ、其ノ故ハ其ノ遺財ヲ受クルニヨリテ大ニ貨幣ヲ有スルコトヲ得タレバナリ、而シテ此ノ時ヨリシテ其ノ準備ニ着手シタリ、其ノ重モナル一事ハ佛國ノ陸軍編制ヲ改正シテ之ヲ整備セントシ、特ニ各隊六千人ヨリ成ル所ノ歩兵七隊ヲ召集組織スルニ在リ、千五百三十四年乃チ從前外國人ヲ召集シタリシニ是ニ至リテ之レヲ佛人ヨリ取ラントセシナリ、然レモ貴族ハ國王ノ爪牙成リテ其ノ

フランシス
日耳曼ノ諸
公侯ニ同盟
ス

權力ノ過盛ニ至ランコトヲ猜忌セシガ爲メニ、フランシスハ十分ニ兵制ヲ更張スル能
ハザリキ、
然リト雖モフランシスハ日耳曼ニ對シテ皇帝ヲ攻撃スルコトヲ始メタリ、乃チマルセ
イニ於テ法皇ト會見盟約ヲ爲シタル後、ドランゲーチ日耳曼ニ使シ、フェルヂナン
ドノ撰擧ニ對シテ不滿ヲ懷ク所ノ公侯ト同盟シ、且ツ特ニ先キノウユルテンベルグ
公ヲ助ケテ復位セシメントセリ、ウユルテンベルグ公ノ逐ハレテ其ノ領地ヲ換地利
家ニ奪ハレタルコトハ既ニ前篇ニ記セリ、千五百三十四年一月フランシスハ先キノウ
ニルテンベルグ公ウウルリツクノ重ナル援助者ヘツス公フ井リツプニバルレヂユツ
クニ會見シ、而シテウユルテンベルグノ件ニ關シテ十二万五千弗ヲ豫出スベキ旨ヲ
承諾セリ、然レモ公然カムブレノ和約ヲ破ラザランガ爲メニ、名義ヲモムベルガ
ルドヲ購買スルニ托シ、之レガ爲メニ此ノ金ヲ出スト云ヘリ、是ヨリ先キ羅馬人民
ノ王ヲ撰擧スルニ關シテハ、佛王前日ノ條約ニ違ヒ十萬「クラウシ」ノ金ヲバヴェリ
アノ二公ニ拂ヘリ、而シテ今將ニ起ラントスル戰爭ノ費用三分一ハ尙ホ之ヲ支出セ

チャーレンス、
バルパロツ
サチ征セン
トス

海盜バルパ
ロツサ

ンコト約シタリ、此ノウユルテンベルグ公復位ノ事ハ後篇ニ至リテ更ニ記スル所ア
ルヘシ、
クレメントノ死シタルハ佛王ノ圖謀セル意大利侵攻ノ事ヲ延遲セシムルノ一原因
ニシ、其ノ他別ニ原因ノ在ルアリ、即チチャーレンスガバルパリー國（按）亞弗利加ノ
北岸地中海
ニ臨メル地ニシテ、現今ノ「チュニス」アルシールス（モ
ノ海盜ヲ討スルガ爲メニ軍備
ロツコ「トリポリ」フニツ等ノ諸國ヲ包括セリ
チ爲セルコト是ナリ、其故ハチャーレンスガ耶蘇教諸國ノ利益トナルベキ事業ヲ爲スニ
際シ、其多事ノ機會ニ乘ジテ之ヲ攻伐セバ、歐洲一般ノ疾惡其ノ一身ニ蝟集センコ
ト恐レタルニ由ルナリ、是ヨリ先キ西班牙意大利ノ海岸多年回教國ノ海盜ノ爲メニ
侵暴セラレ聖「ジョン」ノ武士モ之ヲ防禦スル能ハザルニ苦メリ、夫ノレスピアノ陶
工ノ子ニシテバルパロツサノ綽号アルハイラツヂン（又チエイレツヂント曰フ）出
ルニ及ビ、其ノ才幹勇氣ニヨリテ若干隻ヨリ成ル海盜船隊ノ長トナレリ、是レヨリ
先キ其ノ兄ホーリユツクアルシールスヲ取リテ之レニ據リシガ、其ノ死スルニ及ビ、
バルパロツサ繼デ此ノ國ヲ領セシヨリ、其ノ船舶近海ニ横行シ海岸ヲ侵攻シテ危險

不便更ニ増加スルニ至レリ、歐洲南部ノ脫走者盜賊等皆バルパロツサヲ仰キ適當ナル首長トシテ其ノ党ニ歸シ、就中西班牙ニ於テ壓制セラレタル「ムール」人ノ之レニ投ズル者最モ多シトス、バルパロツサ四方ヲテ鹵掠シプロヴェンスノ海岸モ亦之レガ害ヲ被ムルニ至レリ、而シテ千五百三十三年フランシス特ニ彼レト休戦ノ約ヲ締ビタリ、其ノ後バルパロツサ土耳其帝ノ海軍將ニ任セラレタルガ爲メニフランシスト最モ親厚ノ交ヲ爲セリ、而シテフランシス土耳其ヲ援助スルノ約ヲ爲シ、其ノ報トシテゼノアヲ襲フガ爲メニ彼レノ船隊ヲ假用セントシタリ、加旃佛王ハ土耳其帝ニ使ヲ遣リ、其ノ亞西亞諸方ノ戰爭ヲ止メテ自カラ日耳曼帝ニ對戦セシメテテ懇シタリ、此ノ如ク唯自己ノ慾望ヲ遂ンガ爲メニ回教徒ト同盟セルハ、フランシスノ爲メニ雪ク可カラザルノ汚辱ト謂ハザル可カラズ、若シ夫レフランシスノソリマント同盟スルコト唯防禦ヲ旨趣トスルニ止マラシメバ、尙ホ幾分ノ宥恕スベキ者アラン、何トナレバ其ノ壤地利家ノ威焰ニ脅カサル、ヲ以テ之ニ對シテ自カラ保全スルガ爲メニ、已チ得ズノ之ヲ爲ストノ分疏アル可クレバナリ、然レモ其ノ侵攻ヲ旨趣ト

スルノ同盟ニ至リテハ、歐洲ニ禍害ヲ招クベキ破廉恥ノ所爲ニシテ決シテ是ノ如キ分疏ヲ爲ス能ハザルナリ、此ノ時ニ當リ意大利西班牙ノ海岸ヨリ數里ノ内地ニ至ルマデ、一家ノ父タル者夜中ニ其ノ妻若クハ兒子ヲ奪ハル、ヲ以テ、期ニ及ビ妻子ヲ見ルヲ必期スル能ハザルコトヲ恐ル、ノ思ヲ爲セリ、此海盜ハ時トシテ土耳其官吏ノ命ヲ受ケ、又ハ無賴徒ノ爲メニ婦女ヲ虜獲スルコトアリ、而シテ之ガ爲メニ高位貴爵ノ婦女モ亦鹵掠セラレタリキ、千五百三十四年バルパロツサ其ノ出沒自在ノ船隊ヲ率ヒチープリスシ、リノーノ海岸ヲ侵シテ大ニ殘害ヲ加ヘ、更ニサルゼニアヲ劫掠シテ遂ニ路ヲ轉シテチユニスニ赴キ、其ノミニューリー、ハツサンノ虐政ヲ懲艾スルヲ名トシテ其ノ國ヲ取レリ、是ニ至リテバルパロツサノ勢力一層ヲ増加シ、諸國ヲシテ益々其ノ暴威ヲ恐怖セシムルニ至レリ、就中西班牙人ハ之ヲ患ヘテ哀號ノ聲四方ニ響々タリ、チヤールス帝ハ千五百三十三年以來西班牙ニ駐リシヲ以テ之ヲ不問ニ措クコト能ハズ、暫時歐洲ノ政略ヲ放棄シ、自カラ兵ヲ率ヒテ亞弗利加ヲ討伐セントセリ、此ノ遠征ハ恰モ一種ノ十字軍ノ如キ形狀アリキ、帝ハバルセロナヲ發セントス、ルニ先

ダチテ帽ヲ脱シ列儀ヲ張リテモンツニラツトノ聖母ノ廟ニ拜シ而シテ其ノ海軍將
 官ノ船旗ニハ聖母マリイ、及び聖徒ジョンノ立像アル十字章ヲ以テ徽号トナセリ、
 此ノ役ニ於テチャールレスヲ助クル者ハ唯葡萄牙ノ一國アルノミ、而シテ是レモ亦其
 ノ王ジョンノ與フル援助ニアラズシテ、其ノ弟ルイノ與フル所ナリ、乃チ船具兵器
 完備セル二十五隻ノ戰船ニ二千ノ兵ヲ副ヘ、且ツ六十隻ノ運送船ヲ附シテ帝ノ征軍
 ニ從ハシメタリ、帝又佛王フランシスニ援助ヲ請ヒシガ、フランシスハ佛人ノ虜獲
 セラレテチユニスニ呻吟悲哀スル者アルニ拘ラス、此ノ征軍ヲ援助スルコトヲ拒ミ
 タリ、既ニシテ皇帝自カラ引率スル所ノ兵ガグリアリニ集マル者歩兵二万五千騎兵
 二千ニシテ日耳曼意大利西班牙葡萄牙人ヨリ編成セル者ナリ、千五百三十五年六月
 総軍帆ヲ擧テ發シ、同月十六日古代ノユチカニ近キフアリナ港ニ到着シ、急ニチユ
 ニスノ要塞ゴレントツヲ襲ヒ一撃ノ下ニ之ヲ拔ケリ、同月二十日帝ハイラツヂン、
 バルバロッサト對戰シテ大ニ之ヲ取リ、バルバロッサ纒カニ身ヲ以テ逃ル、後五日
 奴隸トナリテ此ノ地ニ居リシ耶蘇教民ノ援助ニヨリテチユニスヲ取レリ、此ノ役ヤ

チャールレス
 チユニスヲ
 取ル

チャールレス唯一身ノ勇氣ヲ表セシノミナラズ、又長將タルノ才能ヲ顯ハセリ、ミユ
 ーリ、ハツサンハ帝ト左ノ條約ヲ締ビテ其ノ故領ヲ恢復スルヲ得タリ、曰ク海盜
 ヲ勦滅スルヲニカムベシ、曰ク耶蘇教諸國ノ人民ヲ暴害セザルベシ、曰ク其ノ拜神
 ノ自由ヲ享有セシムベシ、曰ク毎年一万二千「ヂユカツト」ノ貢金ヲ拂フベシト、
 帝既ニチユニスニ全捷ヲ得テ、八月七日海ニ泛ンデ軍ヲ旋シ、九月四日バルセルモニ
 上陸シ、是ヨリチープルスニ赴キ、此ニ數月ヲ經過セリ、而シテ其ノ駐蹕ノ間「カル
 ニヅアル」ノ醜ヲ張リ、按舊教諸國ニ於テ斷食ノ業ヲ行フ期ニ先クチテ酒食ヲ饗シ
開ク所ノ祭禮ヲ「カルニヅアル」醜ト云フ 假戰ノ技ヲ行ヘリ、（按）假戰ノ技トハ、盛裝ヲ着ケテ武技相匹スル者ヲ對而シテ帝自ラ
戰セシメテ其ノ勇氣技能ヲ試ムルヲ云フ 「ムール」人ノ服ヲ着ケテ假戰ヲ爲シタリキ、蓋シ帝ノ捷利ヲ得ルヤ其ノ性一變シ、氣
 象快爽テ加ヘテ恰モ豪俠勇士ノ狀ヲ爲シタリ、之レニ反シテ嘗テ帝ト顔顔シテ其ノ
 名ヲ四方ニ聘セタリシフランシスハ、沈淪シテ狡猾陰險ノ權謀者トナレリ、蓋シ帝ガ
 其ノ私生ノ女マルガレットヲ夫ノ陰匿惡行爲サマル所ナキ「メジシ」家ノアレツサ
 ンドロニ許嫁シタルハ、其ノチープルスニ駐蹕セル間ニアリト云フ、發キニ帝ノチ

チャールレス
 チープルス
 ニ祝儀ヲ張
 ル

マラヴ井グ

ユニスニ在ルヤ、大僧長、メジシノイツポリトハ(法皇クレメント七世ノ死後、此ノ僧長、メジシノ家族ノ長トナル)フロレンスノ重モナル人民ノ懲慰ニヨリ、其ノ族アレツサンドロニ對スルノ苦狀ヲ訴告シテ、帝乃チ其ノ歸途フロレンスニ過キリテアレツサンドロノ罪狀ヲ糾治スベキ旨ヲ約シタリシガ、アレツサンドロハ僧長ノ其ノ過惡ヲ帝ニ訴告シタルヲ聞テ大ニ恐レ、竊カニ僧長ノ進爵官ニ賄フテ之ヲ毒殺セシメタリ、千五百三十五年八月十日、僧長既ニ死シタリト雖モ、アレツサンドロノ罪ハ不問ニ付セズシテ、之ヲチープリスニ召喚シ、法廷ハアレツサンドロヲ有罪ト決シタリ、然レモ許サレテ復タフロレンス公タルヲ得、千五百三十六年六月マルガレットト盛ナル婚儀ヲ舉行シタリ、フロレンス人ハチヤーレス帝ニ請フニ帝ノ嘗テ法皇クレメントト締ビタル條約ヲ廢棄シ、再ビフロレンスヲ共和國トナサンコトヲ以テシ、此ノ許可ヲ得バ大額ノ金ヲ献スベキ旨ヲ進言シタリ、帝此ノ請願ヲ拒斥シタリト雖モ、アレツサンドロノ虐政ヲ制止スルノ方策ヲ立テタルガ如キノ狀アリ、

皇帝ノチユニスヨリ歸ルヤ、フランシスハ其使節マラヴ井グリア(又メルヴェイル

リアノ事件

スト稱ス)ノ虐殺セラレタルヲ聞戰ノ口實トシテ、意大利ヲ攻メント決心セリ、此ノマラヴ井グリアハ原ト公然國使ノ任ヲ帶ビズニミラン公ノ廷ニ派遣セラレ、其ノ狀恰モ間諜ノ如クナリキ、而シテ皇帝之ヲ悦ハズシテ之ヲミランノ廷ヨリ放逐スベキ旨ヲフラシシスコ、マリア、スフォルザニ要請シタリ、然ルニ之ヲ放逐スルニ先チテ之ヲ除去スルノ機會ヲ得タリ、乃チマラヴ井グリアノ從者トカスチグリオ子公ト市街ニ爭鬪シテ公ヲ殺セシカバ、千五百三十二年七月、其ノ主ナルマラヴ井グリアヲ拘ヘテ簡畧ノ糾罪ヲ爲シ直チニ之ヲ死刑ニ處シタリ、此ノ事タルミラン公ガ皇帝ト交情ヲ回復スルノ證トナリテ、先キノ條約ニ豫定セル如ク皇帝ノ姪女ヲ娶ルコトナレリ、之レニ反シテ佛王ハマラヴ井グリアノ刑殺ヲ以テ萬國公法ヲ破壞セル不法ノ所業トナシ、大ニ不平ヲ唱ヘテ其ノ回療ヲミラン公及ヒ皇帝ニ要求シタリ、蓋シミラン公ノ此ノ所業タル輕躁不正ナルハ言フテ俟タザルナリ、然リト雖モフランシスノ意タル固トヨリ皇帝ト衡テ意大利ニ爭フニ在リテ、此ノ虐殺ノ事ヲ以テ其ノ爭議ヲ開クベキ口實トスルニ過キザルナリ、故テ以テミラン公ガ卑辭ノ謝罪ヲ爲セルト、回療

フランシス
コ、ス、フ、オ、ル
ザ、死、シ、テ、チ
ヤ、レ、ス、ミ
ラ、ン、チ、取、ル

ノ方法甚ダ厚キトニ拘ハラス、一切之ヲ拒斥シテ以テ皇帝ノ歸ルヲ俟テ、然ル後大ニ回療ノ要求ヲ爲シタルナリ、然ルニ千五百三十五年十月二十四日スフオルザ死ス、是ニ於テ彼此ノ局面一變セリ、乃チスフオルザノ死ヲ以テ其ノ家系此ニ絶ヘ、其ノ公國ハ皇帝ニ復歸シタルヲ以テ、皇帝之ヲ収メテ更ニ其ノ政務ヲアントニオ、ド、レイヴアニ任シタリ、佛王ハ今其ノ要求ノ点ヲ變換シテ曰ク、カムブレノ條約ニ於テ予ガミランヲ棄タル者ハ、唯フランシスコ、マリヤ、スフオルザノ爲メニ之ヲ爲セルノミ、故ニスフオルザ子ナクシテ死スルニ於テハ、予ノ該國ニ對スル權利再生スル者ナリト、此ノ口實ニヨリ皇帝ノ該國ヲ佛王ニ與ヘンコトヲ要求シタリ、然レモ直チニ兵力ヲ以テ此ノ要求ヲ遂ルノ策ヲ用井ズシテ、數月間成功ナキ談判ヲ開キテ以テ皇帝ヲシテ或ハ平和ニ局ヲ結ブベシトノ望ヲ維ガシメタリ、乃チ皇帝ハ佛王ノ第二子アングーレム公ニシテ佛王ノ位ヲ承繼セザルニ於テハ、ミランテ公ニ與フベシト云ヒ、佛王ハ己レ先ヅ隨意ノ期限ノ間之ヲ占領シ、然ル後、メヂシノカザリンノ夫ナル佛王ノ第二子ニ之ヲ讓ランコトヲ請ヒタリ

然ルニ佛王ハ久ク其ノ大兵ヲ擁シテ之ヲ用井ザルヲ非策ナリトシ、遂ニサヴオイヲ侵取スルニ決セリ、之ヲ聞ク薩ニ佛王ガクレメント七世トマルセイユニ會見スルヤ、クレメント佛王ニ私語シ且サヴオイ侵取ノ舉ヲ勸メテ曰ク、往日佛國ノ意大利ヲ伐テ敗レタル所以ノ者ハ、其ノ適當ナル戰地ノ根據ヲ占領セザリシニ由ルナリト、而シテ今回ノ再舉ニ於テハ更ニ此ノ如キ地ヲ占據スルノ必要ヲ加ヘリ、其ノ故ハサヴオイ公チヤールス三世ハフランシスノ叔父ナリト雖モ皇帝ノ党ニシテ、又葡萄牙ノピートルリクスヲ娶リタルガ故ニ皇帝ト親兄弟タレハナリ、佛王ハサヴオイヲ侵サシガ爲メニ種々ノ口實ヲ準備セリ、曰ク瑞西人ヲシテ皇帝ト同盟セシムルニ就テハサヴオイ公之ガ介紹タリ、曰ク佛王ト法皇ト會見スルニ當リニ、ス、城ヲ貸與スルヲ許サバリキ、曰クピールドモント公ヲ西班牙ニ遣リ其ノ都マドリッドニ留學セシメタリ、曰クブールボン公ニ寶玉ヲ貸付シ、而シテブールボン公ハ兵隊召募ノ費用ニ供セシガ爲メニ之ヲ他ニ典シタリト其ノ他此ノ如キ口實ヲ以テサヴオイ公ヲ非責シ、就中フランシスガカムブレノ平和條約ノ爲メニ己ムコトヲ得ズ要求ヲ絶チタリシア

スチノ領地テサヴオイ公ガ收領シタルヲハ、實ハサヴオイ公ノ婦ビートリックス之ヲ收領シタルナリ、最モフランシスヲ辱シメタル行爲ニシテ殆ンド身上ニ無禮ヲ加ヘタルニ同キ者ナリト云ヘリ、此等ノ苦狀ヲ陳述シタル外別ニサヴオイ公ノ領地ノ一分ヲ割與センヲ求メタリ、抑々フランシスノ母ルイスハ故ノサヴオイ公フ井リツア二世ノ前妃ガ生メル所ノ第二子ニシテ、サヴオイ公チヤールスハ、其ノ後妃ノ生メル者ニテ第三子ナリト雖モ二男ナリトス、而シテチヤールスハ千五百四年其ノ兄フ井ルバート死スルノ後、續テサヴオイノ公國ヲ領シテヨリ二十年ニ至レリ、又ルイスハ其ノ夫アングレーム公チヤールスト婚姻ヲ爲シタル時ヨリサヴオイ國ニ對スル一切ノ要求ヲ廢棄シタリ、假令ヒ此ノ要求ノ廢止ナシトスルモ、男統ヲ取りテ女統ヲ捨ルハ、佛國ニ行ハル、男統承繼法ニ於テ定マル所ナリ、然ルニフランシスハ其祖母「ブルボン」家ノマルガレットガサヴオイ公ニ結婚セシ時ヨリ男統承繼法ハ既ニ廢セラレタリト主張セリ、然レモ遂ニ其ノ廢セラレタルノ證ヲ出ス可能ハザリキ、其ノ事此ノ如クナルニ拘ハラズ、フランシスハ巴里ノ高等裁判所長ポージェ

イナ使節トシテ其ノ叔父サヴオイ公チヤールスニ左ノ事ヲ要求セシメタリ、曰ク祖母ノ遺財十八万「クラウン」ヲ拂フヘシ、祖父フ井リツアノ往日ノ附屬地ブレツス及ビ其ノ四十年間ノ歲入ヲ與フベシ、「オルレアン」家ノ有タルベキアスチ、ヴェルセリ、一ノ二地ヲ與フベシ、ニース州フオーシグニールノ領主權并ニサリニツツ公領ノ諸地ハドーフ井子一及ビプロヴェンスノ舊屬地タルヲ以テ之ヲ與フベシ、加之チユリン及ビビードモントノ大部ハ、昔昔聖ルイ按往時ノ佛王ノ名弟アンジュノーノチヤールスニ屬セシヲ以テ之ヲ與フベシト、サヴオイ公チヤールスハ其ノ姪フランシスノ此ノ如キ要求ニ對シ、此ノ疑問ハ彼此共ニ信ズル所ノ人ニ托シテ其ノ中裁ヲ請ント答ヘタリ、然ルニフランシスハ此ノ答ヲ以テ自己ノ要求ヲ拒絕シタル者ト認メ、直チニ之ニ對シテ戰ヲ宣告シタリ、

是レヨリ先キ佛國トサヴオイトノ間既ニ隱然トシテ敵對ノ姿ヲ現ハシタリ、抑々サヴオイ公チヤールス即位以來ノ目的ハゼチヴァヲ併呑セントスルニアリ、蓋シ其ノ領主權ハ十五世紀ノ初メニ當リテゼチヴァ公オド、ド、ウ井ラルス之ヲサヴオイ公

ノ家ニ讓與シタリ、然レモゼテヴァ人ハフレイボルクベルント同盟シテサヴオイ公
 ガ之ヲ領セントスルコトニ抵抗シテ其ノ自由ヲ保護セリ（此ノ事前篇ニ見ユ）然ルニ
 カルヴ井ンノ先驅者タルファレル千五百三十五年ゼノアニ法皇ノ權利ヲ拒絕シタ
 ルヲ以テ、フレイボルクハゼノアト同盟ノ好テ絶チタリ、是ニ於テカサボオイ公再ビ
 ゼノアヲ臣屬セシメント謀レリ、而シテ佛王フランシスハ其ノ叔父サヴオイ公ヲ困
 迫セシメンガ爲メニ再ビ小數ノ援軍ヲ送リシニサヴオイ公ノ士官ノ注意嚴ナルニ
 ヨリ、之レガ爲メニ敗績シ、此ノ如ク其ノ目的ノ沮止セラレタルガ爲メニ佛王益々
 其ノ不平ヲ加ヘタリ、千五百三十六年二月フランシスノ海軍將官シャーポー、ド、ブ
 リオン佛軍ヲ率ヒテサヴオイ公チヤーレンスヲ伐チシニ、ブレンツスサヴオイ忽チニ守
 チ失ヒ、チヤーレンスハブリオンノ近ツクヲ見テチユリンヲ棄テウエルセリニ逃匿セ
 リ、而シテドラ、グロツサ河ニ至ルマテ國內悉ク征服セラレタリ、佛將此ノ河ヲ渡過シ
 テ將サニヴェルセリヲ侵サントセシニ、適マロルレインノ僧長四月十八日ヲ以テ佛
 ノ軍門ニ到ルニ會シ、之ヲ止メテ曰ク、ヴェルセリハ正サニミラン公國ニ屬セリ、故
 イテ伐ツ

佛軍サヴオ
 イテ伐ツ

ニ之ヲ侵攻スルハ全ク日耳曼皇帝ニ對シテ開戦スル者トナルヘシ是レ則チ不可ナ
 リト、

此ノ時ニ當リチヤーレンスチープルスヲ發シテ四月五日ヲ以テ羅馬ニ入り、此ノ地ニ
 於テ佛軍ノサヴオイニ進入スルコトヲ聞知セリ、同月十七日、チヤーレンス佛王ノ使節
 ヲ延見ス、法皇、僧長、皆此ニ臨席セリ、チヤーレンスハ從前フランシスニ對スル不滿ノ
 箇條ヲ擧テ之ヲ縷述シ長キ演說ヲ爲シタル後、遂ニ左ノ三事ヲ以テ其ノ說ヲ終レリ、
 曰ク佛王ハ其ノ第三子アングーレム公ノ爲メニミランヲ領受シ、而シテサヴオイノ
 屯兵ヲ退クヘシ、佛王若シ之ヲ肯ゼサレバ短衣ヲ着ケ長短ノ二劍ヲ執リテ予ト決闘
 スベシ、而シテ其ノ雌伏セル者ハホルガンヂー或ハミランニ關スル一切ノ要求ヲ拋
 棄シ、異教者ヲ剿絶シ、土耳其ヲ攘斥スベシ、之レニ不同意アラシムハ戰爭ニヨリテ
 異議ヲ勝敗ニ決スベシト、然ルニフランシスハ帝ノ決闘ヲ促セルヲ以テ戲言トナシ
 テ之ヲ避ケタリ、蓋シ佛王ハ平素武士ノ摸範トナリテ日ヲ度リシニ、夫ノ專フ外交
 ノ智術ニ長スルヲ以テ世ニ知ラレタル皇帝ニ對シ、再ヒ對當ノ決闘ヲ避ケタリシハ、

チヤーレンス
 佛使ニ要求
 ヲ陳ス

抑々亦異事ト謂フベキナリ、

此等ノ談判ヲ爲ス間、チャールズハロムバードニ於テ五六萬ノ陸軍ヲ集メ、一百門ノ大砲ヲ準備セリ、此ノ他ピカルヂーヲ攻メンカ爲メニチーゼルランドニ兵ヲ集メ、又西班牙北疆ノ兵ヲ以テラングドックヲ脅セリ、而シテ皇帝覺トナリタルサリユツヅ公ノ援助ニヨリテフオツツノヲ取レリ、此ノ間チャールズハ軍事議會ヲ開キテ佛國侵伐ノ可否ヲ熟議ニ附シタリ、ガスト公及ピドン、フェルラント、ゴンザガノ二人ハ佛國ヲ伐ツテ不可トシテ之ヲ勸止シ、アントニオ、ドレイヴアハ此ノ舉テ可ナリトシテ大ニ之ヲ慫慂セリ、是ニ於テ皇帝ハ此ノ議ヲ陸軍ニ下シテ其ノ決ヲ取リシニ、翁然之ヲ賛成シタルヲ以テ遂ニ開戰ニ決セリ、七月二十五日即チチャールズガチユニスヲ征服シタル期日ヲ以テヴァアル河ヲ渡過シタリ、フランシスハ其ノ國疆ノ防守ヲ嚴ニセズ忽チ此ノ侵攻ニ遭ヒ危難ニ迫レルヲ以テ、モンモランシイノ謀議ヲ採リテ、慘刻ナル防禦手段ヲ用井タリ、即チ海岸ヨリツール河ニ達シアルプス山ヨリローン河ニ達スル間ノ地ヲ一齊ニ荒涼ノ野トナシ、穀車ハ之ヲ毀壞シ、禾穀ハ之ヲ焚

チャールズ
佛國ヲ伐ツ

燒シ、井水ハ之ヲ汚穢ニシ、城邑ハ之ヲ破毀シ、住民ハ逃走シテ無人ノ地トナレリ、而シテエイクス府スラ尙ホ此ノ災ヲ免レザリキ、此ノ地方中兵ヲ屯シテ防衛シタルハ唯アール、ダラスクアン、マルセイユノ三所ノミ、フランシスガ不當ノ慾望ノ爲メニ佛國ノ最モ豊沃ノ地不幸ヲ受クルコト此ニ至レリ、之ニ反シテチャールズハ「ブルボン」家ノ運命ヲ見テ此ノ侵伐ノ成功甚ダ難キヲ思ヘリ、然レモ未ダ佛人ガ野ヲ清ムルノ策ヲ用井テ困難ヲ我ニ與ヘントハ預想セザルナリ、此ノ戰爭ノ際ニ佛國ノ太子フランシス死ス、(八月十日)此ノ事大ニ戰爭ヲ止メテ和議ヲ遂ルノ望ヲ屬セシメタリ、チャールズ尙ホフランシスニ告グルニ、若シ佛王其ノ三子アングーレム公ノ爲メニミランヲ要求セバ和議ヲ成サントノ意ヲ以テシタリシニ、佛王ハ此ノ如キ調停ヲ以テ満足スル能ハザルノミナラズ、尙ホ且ツピードモントヲ征服スルノ事ヲ止ムルニ意ナシ、既コシテ兩軍戰ヲ開キタリシガ、皇帝ノ軍アールヲ伐ダントシテ之ヲ中止シ、法皇所屬ノアヴ井ニヨリ城邑ハ意ヲ皇帝ニ傾ケタル者ナルガ、佛將モンモランシイ之ヲ取リテ總軍ノ根據トナシ、佛王自ラローン河ヲ溯リテヴァランスニ

帝軍マルセ
イユナ園ム

屯セリ、是ニ於テ帝軍ハマルセイユニ向テ進行シ、遂ニ八月二十五日ヲ以テ之ヲ合圍セリ、然ルニ軍資缺乏シ、傳染病諸隊ノ中ニ發シタルガ爲メ、チヤーレンス己ムヲ得ズシテ圍ヲ解カザル可カラザルニ至リ、九月十日不幸ノ退軍ヲ初メ、銃砲器械ヲ委棄スル者甚ダ多シ、幸ニシテモンモランシイノ追撃ニ遭ハズ、若シ此ノ時ニシテ追撃セラレンニハ、一人ノ脱歸スル者ナカルベシ、蓋シ此ノ役ノ死亡ニ万人ノ多キニ至レリト云フ、而シテアントニオ、ド、レイヅア亦此ノ退軍ノ際ニ死セリ、此ノ人ハ長將ノ材ヲ具ヘタリシガ、其ノ貪婪、慘刻、迷想ノ爲メニ毀譽相半セル者ナリキ、ガルシラソ、ド、ラ、ゼ、エ、イ、ガハ西班牙詩人ノ最モ采風ニ長セル者ナルガ、此ノ役ニ從ヒテ亦退軍ノ際ニ死セリ、農民等此ノ詩人ノ屍ヲムイ村ニ火シテ之ヲ葬レリ、其ノ裝飾頗ル燦爛タリシヲ以テ或ハ誤リテ皇帝殞シタリト思ヘリ、チヤーレンス十一月ノ下旬ゼノアニ歸リ、此ノ敗戦ノ爲メニ身心疲勞シ勇氣沮喪シタリシヲ以テ、直チニ海路ヲ取り西班牙ニ向テ去レリ、佛國ノ北疆ノ戦モ亦帝軍利アラズ、ナツサウハ其北疆ヲ攻メテベロシヌマデ進入シ之ヲ圍ミシガ、遂ニ九月十一日ヲ以テ圍ヲ解キテ退軍セリ、佛軍ハ

尙ホピードモントヲ占領シテ去ラズ然レモ未ダチユリンヲ攻撃セザリキ、此ノ諸戦ニ於テハ當時戦争技術ノ上進セル模様ヲ見ザルナリ、此ノ時既ニ大炮及ビ練練セル兵隊ヲ使用スルコト多キニ至リシト雖モ、其ノ交戦ハ尙ホ鹵掠ノ性質ヲ有シ、且其ノ征軍モ亦必勝ノ地ヲ撰ミテ之ヲ行ルニアラザリシナリ、

佛國ノ太子死シタルガ爲メニフランシスサシテ最モ怖ルベキ疑惑ヲ胸中ニ生ゼシメタリ、(此ノ疑惑ハ眞ニ之ヲ懐キシカ、或ハ自カラ之ヲ懐クノ狀ヲ爲セシカ、之ヲ確知スル能ハズ)蓋シフランシスハ其ノ被ムル所ノ諸々ノ不幸ハ皆チヤーレンスノ所爲ナリトノ迷想胸中ニ充滿シ、常ニ此ノ念ヲ絶ツ能ハザリシニ、チヤーレンス兵ヲ率ヒテ其ノ國疆ニ進入セシヲ以テ益々此ノ念ヲ増加シ、遂ニ此ノ魔鬼ノ爲メニ纏綿セラレテ其ノ太子ノ死モ亦帝ノ毒殺ニ係ルナラントノ想像ヲ起セリ、是ニ於テ太子ノ進爵官モンテク、リヲ拘執シテ之ヲ拷訊セリ、此ノ人ヤ怯弱ニシテ神經質ノ者ナリシガ拷訊ノ苦楚ニ耐ヘズ、心身恍惚トシテ其ノ告ゲラレタルノ罪アリトシ自供シテ曰ク、日耳曼ノ將レイヅア、ゴンザガニ使囑セラレ佛王及ビ其ノ三子ヲ毒殺セント誓ヘ

チヤーレンス
佛國ノ太子
ヲ毒殺セシ
カトノ疑ヲ
受ク

リ、而シテ二將ノ使囑ハ間接ニ皇帝ノ意ニ出テタリト、是ニ於テカ此ノ獄決レ、モン
 テク、リハ生ナカラ支解セラル、フランシス滿朝ノ侍臣ヲ隨ヘ此ノ慘刑ヲ親覽シテ
 其怨恨ノ心ヲ慰シタリト云フ、抑々此ノ疑獄ヲ起セルヤ之ガ證據ト爲スベキハ、唯
 モンテク、リノ所有物中ニ毒藥ノ方劑ヲ手記セル者アリシ一事ニ過ギザルナリ、フ
 ランシスノ心中果シテモンテク、リノ有罪ナルヲ固信シタリシヤ否ヤ、而シテ其ノ
 ノ後心氣沈靜セル時ニ至リテ實ニ前キノ誤見ヲ悔ヒタルガ如シ、抑々太子ノ死シタ
 ル事情ヲ考フルニ全ク自然ノ原因ヨリ來リテ毒手ニ中リタルニアラザルヲ知ルニ
 足レリ、何トナレバ太子打球戯ヲ爲シテ滿身熱シタル時ニ急ニ氷水一盃ヲ飲ミタレ
 バナリ、

保田久成校閱

第十四篇終

近泰西通鑑

ダイアー 著

嶋田三郎 譯

第十五篇

ムンスターノ「アナバプチスム」黨○フランシスチャールレスニ反對シテ日
 耳曼ノ新教黨及ビ土耳其ト同盟シ後又チャールレスト講和セントス○此
 政界ノ變易ノ結果

ジャン、マツ
 チースムン
 スターニ到
 着ス

此ノ時ニ當リテ日耳曼ハ狂信者非常ノ勢力ヲ得タリ、先キニトーマス、ムンゼルノ刑
 殺セラレタルヤ、其ノ党即チ「アナバプチスム」黨（按前卷第十三篇ノ第百三十二葉ノ註ヲ見ヨ）ハスリンジ
 アニ於テ受ケントセシ危難ヲ避ケンカ爲メニ、イースト、フリースランド、ウニストフ
 アリア、チーゼルランドニ潛匿シ、而シテ此等ノ地ニ於テ多クノ改宗者ヲ得タリ、千
 五百三十四年ノ初メレイデンノ麵包工ジャン、マツチース（又マチアセントト云フ）ハ
 「アナバプチスム」派ノ教義ニ心醉シ、又神助ヲ得タリト自稱シ、其ノ徒弟ジャン、ボツ

コルトト共ニウエストフアリアノ首府ムンスターニ到リシニ、此ノ府ノ大族ノ一人ナルベルンハイド、クニツベルドリンググ迎ヘテ厚ク之ヲ遇セリ、此ノ二個ノ蘭人其ノ衣服異常ニシテ容貌熱心ノ狀ヲ表シ、人ヲシテ之ヲ信ズルノ感ヲ發セシメ、特ニ尼ヲシテ信心ヲ起サシメテ忽チニ其ノ改信者ヲ得タリ、既ニシテ唯尼ノミナラズ、有夫ノ女モ亦此ノ集會ニ列スルニ至リ、皆其ノ寶玉奇玩ヲ將チ來リ之レヲ僧ニ獻ジテ以テ其ノ信心ヲ表シタリ、其ノ初メニ當リテハ人々駭異疾視シタリシガ、漸クニシテ之レニ化シ、自カラ信シテ其ノ宗派ニ歸依スルニ至レリ、蓋シ此ノ如キハ往々世ニ見ル所ノ常態ナリ、此ノ一種ノ流行忽チニ四方ニ感染シ殆ド防グ可カラザルノ勢アリ、マツチースハ一種ノ神藥ヲ持シ其ノ改宗者ニ洗禮ヲ行フニ當リテ之ヲ灌ギ以テ其ノ心ヲ蕩スルトノ説アリ、而シテ其ノ勢力漸ク増加スルヲ以テ該府ノ議會之ヲ惡ミ、遂ニ二月八日ニ及ビテ該信徒ト議會トノ間ニ勝チ争フニ至レリ、アナバアチスム「党ハ多クハ外國人ニシテ市場ニ集マレリ故ニ市吏及ビ該党ヲ信セザル市民ハ其ノ通路ト市門ヲ壅塞セリ、是ニ於テ兩者ノ間對戰ヲ爲ササル可カラザルノ勢ニ

「アナバアチスム」党ノ勢力益々加ハル

迫リシガ、彼此往復商議ノ後遂ニ左ノ事ヲ約定セリ、兩党各自ノ教義ヲ信シテ互ニ妨害ス可カラズ、而シテ俱ニ市吏ニ須從シテ抗拒セザル可シト、此ノ如ク「アナバアチスム」党ノ實力ヲ一試シタル後其ノ勢益々加ハリ、新タニ之レニ歸依スル者四方ヨリ來リテムンスターニ輻輳セリ、婦其ノ夫ト別レテ到ルアリ、夫其ノ婦ヲ去リテ來ルアリ、一家擧テ來歸スルアリ、四隣ノ無賴徒呆子モ亦皆此ニ集マレリ、既ニシテ一僧ロツトマンナル者其ノ舊來ノ教義ヲ變シテ此ノ宗派ニ歸シ、唱ヘテ曰ク此ノ宗派ニ歸シタルカ爲メニ棄捨シタル者ハ其ノ十倍ノ償ヲ獲ベシト、是ニ於テカ此ノ徒ノ狂信一層ノ勢力ヲ増加セリ、既ニシテ市吏撰擧ノ期ニ至リ之ヲ改撰セシニ、新撰ノ市吏ハ悉ク「アナバアチスム」党ヨリ出テ、職工其ノ多キニ居リ、而シテクニツベルドリング市長ニ擧ラレタリ、二月二十七日武器ヲ携帶セル會員市議院ニ集マリ拜神ノ辭ヲ唱ヘタリ、然ルニ豫言者ノ一人ナルマツチース急ニ呼デ曰ク、眞神ヲ信セザル徒ハ悉ク市内ヲ逐フベシ、又呼デ曰クエサウノ後胤ハ速ニ去レ、遺物ハ悉クシヤコブノ後胤ニ屬スト、（按、ニサウニシ

ヤコブハ俱コ「アイザク」ノ子ナリ、「エサウ」父ノ遺物相續權ヲ弟「ジャコブ」ニ賣リタル「經典」ニ見ユ、故ニ反對者ヲ所有權ナシトシ、所有權ナキ者ヲ「エリウ」ノ子孫ト云ヒタル。此ノ唱聲聞ユルト齊ク之レニ應ズルノ聲四方ニ起リ、皆呼テ曰ク「去レ去レ汝不信者ハ去レト」而シテ寒風凜烈タル日ニ當リ老少男女幼兒ノ別ナク、既ニ受ケタル洗禮ヲ無効トシテ新クニ此ノ派ノ僧徒ヨリ之ヲ受ケザル者ハ、皆之ヲ市門ノ外ニ驅逐シ、悉ク其資財ヲ奪ヒ、囊中一錢ヲ餘ヌヲ許サズ、其ノ中多年ノ勞力ヲ累テ蓄積セル者テ一朝ニ失フノ不幸ニ遭フ者往々之レアリ、此ノ如クニシテ「アナバプチスム」党全市ヲ掌握シ、其ノ宗教的ノ共和制ヲ建設シタリ、財産ノ權利ヲ廢シテ悉ク之ヲ共有物トナシ、其ノ私有トシテ藏匿スル者ハ死刑ヲ以テ罰スルコトナセリ、然レハ各人其ノ生業ヲ營ミ視テ以テ一種ノ職守ト爲ス、飲食ハ公費ヲ以テ之ヲ供給シ、男女ヲ呼ブニ兄弟姉妹ノ稱ヲ以テシ、男女食卓ヲ異ニシテ喫黙食ニ就キ、僧侶誦スル所ノ經典ヲ恭聽シタリ、

ムンスタ
ノ圍

以上ノ狀況ハ四隣ノ公侯テシテ震駭セシメタリ、四月ムンスターノ僧正其ノ自領并ニクローヴス公國、コローン撰舉侯國ノ中ヨリ召集セル兵ヲ率ヒテ此市城ヲ圍メリ、

マツチース
ノ戦死

レイデン
シヨ

然レモ攻圍速クニ厥ノ功ヲ奏セズ、城内ノ守兵熱心狂勇ヲ逞フシ、兒子ニ效ユルニ弓矢ノ使用ヲ以テシタルニ、兒子忽チニ其ノ術ニ巧ミナルヲ得タリ、マツチースハ眞ノ狂信者ニシテ古昔「イスレイル」ノ勇者ノ如ク敵ニ必勝ヲ獲ルト自信シ、武術ニ疎キ僅少ノ党與ヲ率ヒ突出シテ合圍ノ軍ヲ撃チ、其ノ黨與ト共ニ戰没セリ、是ニ於テ豫言者ノ法衣ハ其ノ徒弟「ヤン、ポツコルト」ノ身ニ歸シタリ、「ヤン、ポツコルト」ハ荷蘭ハーグ府ノ市長ノ子ニシテ諸國ヲ漂泊シ、後レイデンニ留リテ裁縫工トナリ、繼テ酒肆ヲ開キタル者ナリ、ポツコルト即チレイデンノシヨンハ容貌言語人ニ過ギテ又狂信熱心ノ性アリ、今其ノ師ニ繼デ市政ヲ執ルヤ十二人ノ市老ヲ置テ議員トナシ、朝夕六人ツ、集會シテ其ノ議ヲ以テ百事ヲ施行セリ、レイデンノシヨンハ一夫多妻ノ制ヲ引入セリ、然レモ此ノ事ニ關シテハ「アナバプチスム」党ノ中ニモ自然ニ之ヲ疾視スルノ情アルヲ以テ之レニ逆ヒ、其ノ中兵力ヲ以テ抗拒シタル者アリシモ力敵セズシテ逃レテ市廳ニ入りシガ、遂ニ迫ラレテ投降セシニ慘刻ニ殺戮セラレタリ、既ニシテシヨン立テラレテ王トナリ、擅制ノ治ヲ施シ一週ニ三日市場ニ王坐ヲ

フランシス
日耳曼ノ諸
公侯ニ同盟
ス

ムンスタ
ー
陥リテジ
ニ
ン刑殺セ
ラ
ル

設ケ之レニ臨ミテ訴訟ヲ聽ケリ、而シテクニツペルドーリングハ命ゼラレテ行刑官トナリ、裁判ノ劍ヲ執リテ稍々下坐ニ居レリ、ウヨンハ既ニ二十二人ノ妻ヲ有セリ、初メ聘セントシタル女十三人アリシガ、其ノ中ノ一女其聘ヲ拒斥シタリシニウヨン自カラ其ノ女ノ頭ヲ斬リ、其ノ屍骸ヲ蹂躪シタリ、此ノ間多クノ妻ハ「天上ナル上帝ノ名譽」ト歌唱シテ其ノ側ニ侍立シタリ、ムンスタールノ僧正本府ヲ圍ムト雖モ遽カニ拔ケズシテ日ヲ涉リシテ以テ遂ニ皇帝ノ兵ノ援助スル所トナリ、合圍益々強クシテ府内漸ク飢餓ニ迫リ、千五百三十五年六月二十四日ノ夜府内ニ應ズル者アリ、攻圍ノ軍急ニ襲フテ之ヲ陥レ、ロットマン及び其ノ徒多ク戰テ之レニ死シ、ボツコルト、クニツペルドーリング及び其ノ徒クレツチング囚虜トナリ、恐ルベキ拷訊ヲ受ケタル後死刑ニ處セラレタリ、其ノ骸骨ハ之ヲ三箇ノ鐵檻ニ盛リテ聖「ラムバート」寺ノ塔ニ置キタリ、此ノ三箇ノ鐵檻ハ今尙ホ遺存スト云フ、此ノ如キ非常ノ騷擾ハ、何レノ宗教ニ歸依スルニ拘ラズ、中和ノ説ヲ持スル者ハ皆之ガ爲メニ厭惡察感セザルハナシ、千五百三十五年ノ末ニ及び新教党スマルカルド

ウルリツク
ウエルテン
ベルグヲ恢
復ス

同盟ヲ再興擴張シタリシニ、之レニ加盟スル者少カラズシテ特ニウエルテンベルグ公ウルリツク此ノ中ニ在リ、而シテウエルテンベルグ公ハ先キニ其ノ所領ヲ失ヒシガ、ヘツス公フ井リツプノ勢力及び佛王ノ支出セシ金力ニヨリテ再ビウエルテンベルグヲ恢復セントシタリ、然レモ千五百三十三年十二月マデハ恢復ノ功ヲ遂ゲザリキ、是レスルビア同盟ノ之ヲ妨ゲタリシニ、是ノ年ニ至リ此同盟解散シタレバナリ、ヘツス公フ井リツプハ佛王ノ支給スル金ヲ以テ二万五千ノ陸軍ヲ徵募シ、五月十三日ヘールプロンノ近傍ラウフニンノ一戰ニ於テ大コフユルヂナンド王ヲ破レリ、ウエルテンベルグノ餘地速ニ服從シ、而シテウルリツク乃チ其ノ故領ニ復歸セリ、ウエルテンベルグノ奪領者フエルヂナンドハウルリツクノ子クリストフアーチ執ヘテ之ヲ密室ニ幽囚シ、而シテ之ヲ教育スルガ爲メニ閉居セシムト伴レリ、千五百三十二年チヤーレス帝クリストフアーチ西班牙ニ送ラントセシニ、其ノチロールニ到ルノ途上逃歸センコトヲ計リ、許多ノ危難ヲ犯シテ善ナクバヴニアニ達スルヲ得タリシガ、バヴエリアノ二公ハ其ノ母舅ナルヲ以テ善ク之ヲ保護シタリ、

カダンの和約

ウユルテンベルグノ事件ハ、千五百三十四年六月二十七日カダンの和約ニヨリテ局ヲ結ベリ、乃チ此ノ和約ニニリフニルヂナンドハウユルテンベルグニ對スル要求ヲ拋棄シタリ、但シ該國ハ日耳曼帝國ノ隸屬トシテ領地利家ニ附庸タルベシトス、而シテ此ノ和約ノ一方ノ主タルスマルカルドノ同盟ハフエルヂナンドヲ認メテ羅馬人民ノ王トナセリ、但シ爾後ハ撰擧諸侯ノ同心一致ヲ得ルニアラザレバ、何人チモ羅馬人民ノ王ニ選舉スベカラズト定メタリ、然リト雖モ此ノ和約ノ重モナル簡條ハ、日耳曼ノ宗教上ニ著シキ効果ヲ現セシニ在リ、即チ帝國裁判所ハ今ヨリ後宗教ノ事件ヲ決スルノ權ナカルベシ、此ノ主義ニ反セル既往ノ判決ハ皆之ヲ廢棄スベシト、而シテウユルテンベルグハ直チニ其ノ宗教ヲ改メテ新教ニ變セリ、此ノ改革ハ日耳曼新教黨ノ爲メニハ其ノ發達ノ一期限トナスベキナリ、即チホルステイン、ポメラニア、マーク、オフ、ブランデンブルグ及ヒ其他ノ諸地モ速ニ新教ニ歸シタリ、又ウユルテンベルグ、噠國王（ホルステイン公タルノ資格ヲ以テ）ポメラニアノ二公バリーニム、フ井リツア、アンハルトノジョージ、ヨアキムアウグスブルグ、フランクフオルト、ケム

スマルカルドノ同盟更ニ盟ヲ爲ス

プトン、ハノーヴァー、ハムブルグ、及ビミンデンノ諸都邑ハ、千五百三十五年スマルカルドノ同盟ヲ重新スルルレ之ニ加盟セリ、而シテ佛王モ亦之レニ聯合シ、英王ハ此ノ同盟ノ保護者タルベキ旨ヲ公言セリ、此ノ同盟ハ更ニ二十年ノ期限ヲ延續スルコトナシ、其ノ事務ノ指揮ハサキソニー撰擧侯、ヘッス公ト共ニ總兵官ノ稱ヲ以テ每半年ニ交迭シテ之レニ任セリ、此ノ間サキソニー撰擧侯（カフデインセンセテラル）シテ更ニ新教ノ教義文ヲ草セシム、之ヲスマルカルドノ信條ト稱ス、其ノ精神大底アウグスブルグノ教義文ニ同シ、然レトモ其ノ文章言語ハ嚴厲峻刻ナリ、是レ前ノ教義文ハメラントクトンノ手ニ成リ、今ノ教義文ハルーザー等ニ出タルニユルナリ、其ノ文中法皇ヲ以テ耶蘇ニ反對スル者トナシ、貪婪、驕慢、淫逸其ノ他有害ノ情慾ニ身心ヲ役セラル、若トナシタリ、

フランシスハ皇帝ノ權勢ヲ挫折センガ爲メニ日耳曼ノ新教黨ヲ庇護セリト雖モ、其ノ自領ノ佛國內ニ於テハ此ノ教黨ヲ慘酷ニ處斷セリ、蓋シ新教黨中過激ノ行爲アリ、其ノ自党中ノ穩和ナル者ニストラ非難ヲ受クルニ至リシヲ以テ、之レガ爲メニフラン

フランシス其國內ノ新教黨ヲ虐待シテ日耳曼

ノ新教党ヲ
好遇ス

シスノ憤情ヲ挑起シタルコトナキニアラザルナリ、即チ舊教ノ「マッス」祭及び他ノ諸事ニ對シ暴言乱語ノ攻撃ヲ加ヘタル公文ヲ草シタル者アリ、而シテ佛王藥室ノ奴フェレナル者ニユーシヤールニ於テ之ヲ印刷シテ巴里ノ市街ニ貼付シ、又之ヲ「ルーヴル館」(按「巴里府有」)「ミナラスフロア」ニ在ル所ノ王宮ノ戸扉ニマテ貼付シタリ、フランシスハ是等ノ張貼ヲ見テ心既ニ憤リタリシニ、モンモランシイ僧長ツールノン更ニフランシスニ説テ是等ノ暴行ハ佛國ニ「アナバプチスム」徒ヲ現出スルノ凶兆ナリト云ヘリ、且ツ此ノ時ニ當リフランシス其ノ信教ノ心ヲ變ジテ日耳曼ノルーザ一党英王ヘンリー及び土耳其ト通ズルナラントノ疑ヲ被ムリタルガ故ニ、此ノ機會ニ乘ジテ最モ苛刻ノ手段ヲ施シ其ノ然ラザルコトヲ世ニ表白セントセリ、千五百三十四年十一月既ニ若干人ヲ刑戮シ、明年一月二十九日ハ嚴肅ナル異教徒焚殺ノ刑ヲ行フヲ以テ著明ナリ、是ノ日聖ゼ子ヴヰーヅヲ初メ巴里ニ保存スル聖徒ノ肖像及び其ノ遺物(聖セルマイン、聖メリー、聖マルソー、聖オツポルチユーン、聖ランドリー、聖オノレー、ノ肖像及び其ノ遺物ノ如キ是ナリ)及び聖ルイノ頭并聖「シャベール」寺

ノ諸々ノ遺物等ヲ荷ヒ、儀列ヲ整ヘテ巴里ヲ經行シ、國王帽ヲ脱シ燭ヲ手ニシ徒行シテ之レニ隨ヘリ、而シテ三王子ヲ初メ王族、大臣僧長僧正等手ニ松明ヲ執リ、議會巴理上等裁判院其ノ他公會ノ諸員其ノ後ニ列ナリテ「マッス」ノ祭文ヲ聽クガ爲メニ「ノートルダム」ニ赴ケリ、其ノ後フランシスハ此ノ地ノ僧正ノ舎ニ於テ盛饗ヲ張リ、公衆列坐ノ席ニ於テ活潑ノ演説ヲ爲シテ、若シ新起ノ異教ニ薰染スル者アラン歟、予ハ我手ヲ以テ我兒子ヲモ刑殺スベシト明言セリ、此ノ夕異教ノ罪アリト證セラレタル者六人焚刑ニ處セラレ、其ノ刑具タル數人ヲ一列ニシ順次ニ火中ニ墜落スル如キ機關ニシテ、火其ノ繩ヲ燒斷シ而シテ後ニ死スル者ナリ、其ノ後又同一ノ方法ニ從ヒ二十四人ヲ焚刑ニ處シタリ、之レト同時ニルーザー派及び他ノ異教者ヲ剗絶シ、及び印刷ヲ禁止スルノ公文ヲ布キタリシガ、此ノ印刷禁止ノ事ハ實行セラレザリシガ如シ、此等ノ處分日ニ苛刻ヲ加ヘテ五月マテ續キタリケレバ、許多ノ宗教改革者ヲシテ巴里ヲ逃走セシメタリ、而シテ夫ノ後日ゼ子ヴヰアニ於テ人ノ耳目ヲ驚動スルノ事業ヲ爲シタルジョン、カルヴヰンモ亦實ニ此ノ中ニ在リシナリ、

フランススハスマルカルドノ同盟ニ與ミシナガラ自國ニ於テ此ノ如キ新教則絶ノ政略ヲ行ヒシテ以テ、彼ノ同盟ハ勢ヒ其ノ詐欺ヲ憤ラザルヲ得ズ、而シテフランススハ之ヲ分疏スルニ其ノ禁刑ニ處シタル者ハ異教者ニアラズシテ反徒ナリ、ルーザ一党ニアラズシテ、サクラメンター一党ナリト云フノ口實ヲ以テセリ、加之フランススハ佛國教會ト日耳曼ノルーザー一派教會トヲ聯合セントスルノ希望ヲ以テ、千五百三十五年一月二十八日手書ヲ贈リメランクトンナバ里ニ迎へ、聖餐ノ異議ヲ佛國ノ僧侶ト協議セシメントシタリ、然レモシモン、フレデリックハメランクトンノ他ニ曲從スルノ性アルヲ看破シテ彼ニ信用ヲ置カザルヲ以テ、其ノ招請ニ應ジテ巴里ニ赴クヲ止メタリ、然リト雖モ兩党其ノ利害チ一ニシ、フランスス及ビルーザー党ハ互ニ分離スルヲ喜バザリシヲ以テ、此等ノ爭論ハ容易ニ之ヲ調停スルヲ得タリキ、皇帝既ニ佛國ヨリ軍ヲ旋シタル後、フランススプロヴァンスヨリ巴里ニ歸ルノ途上、蘇格蘭ノジェームス五世ニ會見セリ、是レシジェームスガフランススノ長女マデレイシヲ娶ランガ爲メニ此ニ來レルニヨリテナリ、是時ニ當リテ歐洲ノ三君主此ノ少年

ノ王シジェームスニ同盟ヲ求ムルアリ、乃チ英王ヘンリー八世ハ、其ノ女マリーチ與ヘ、シジェームスヲシテ己レノ爲メ所ニ做テ自ラ蘇國教會ノ首長ト公言セシメンコトヲ要シタリ、然レモ是レシジェームスノ好シテ取ル所ニアラザルナリ、皇帝ハ其ノ親屬ノ三女中シジェームスノ意ニ適スル者ヲ與ヘント云ヘリ、而シテ夫ノ英國ノ王位ヲ將來ニ受クベキ時期シタル皇帝ノ從兄弟ナルマリーチ（按、ヘンリーノ初ノ后、カザリールハ西班牙王、フザリツアノ從兄弟ニシテ、他日英王ノ位ヲ承クベキ者ナリ、故ニ「マリーチ」ト婚スルハ英王ノ位ヲ將來ニ受クベシト云フナリ、モ亦其ノ一ニ居レリ、然ルニ千五百三十六年一月皇帝ノ叔母カザリール死シタル後、皇帝再ビヘンリー八世ニ交誼ヲ結バントセリ、此ノ如ク皇帝トヘンリートノ間ニ交誼ヲ復セントスルノ勢アルヲ以テ、佛王ハ己レノ勢力此ノ一方ニ衰ヘントスルヲ思ヒ、蘇格蘭ト同盟シテ之ヲ張ランガ爲メニ、ジェンドーム公ノ女、ブールボン家ノマリーチヲ紹介シテシジェームスニ嫁セント欲セリ、蘇王親シク女ヲ見テ其ノ適否ヲ定メント欲シ、千五百三十六年九月微行シテヴェンドームニ赴キタリシガ、其ノ女ノ容色意ニ中ラズ、然ルニ此ノ際偶マ佛王ノ長女マデレイシヲ見タリ、マデレイシ年十七

蘇格蘭王
エームスノ
婚姻

容色秀麗ニシテ其ノジエームスニ遇フヤ互ニ愛慕ノ情ヲ懷キ、フランシスモ亦之ヲ制スルノ難キヲ知り、遂ニ千五百三十七年一月一日婚姻ノ禮ヲ行ヘリ、而シテ饗臨祝賀ノ爲メニ數月ヲ經過セル後、五月二十八日蘇格蘭ニ皈レリ、然ルニ不幸ニシテマデレイン肺患アリシニ、蘇格蘭ノ寒氣ニ遭フニ及ビ病勢忽チニ重キヲ加ヘ、幾バクモナクシテ死去シタリ(七月七日)蘇格蘭ノ僧侶ジエームスニ再婚ヲ促カスヲ頻ナリ、而シテジエームスノ意既ニロングウ井ール公ノ寡妃キースノマリニ屬セリ、乃チ僧長ビートン及ビロバート、マキスウエルヲ佛國ニ遣ハシテマリニ結婚センヲ説カシム、然ルニ英王ヘンリーハアン、ポレインヲ殺シ〔按ヘンリーカザリイボレインヲ娶リシガ、幾バクナラズシテアン、ポレインヲ以テ姦罪アリトナシテ之ヲ殺セリ〕ゼーン、セイムールヲ娶リシガ分婉ノ間ニ物故ス、是ニ於テ平マリニ娶ラントセシニ、佛王フランシスハ英王ニ快ラザルヲ以テ蘇王ニ嫁セシメントセリ、然リト雖モ英蘇ノ二國ニ大關係ヲ生ゼル此ノ婚姻ハ遽カニ決セズシテ翌年ノ夏マデ遲延シタリキ、

此ノ時ニ際シフランシスハ新タニ戰爭ヲ開カントスルノ意アリ、千五百三十七年一

フランシス
チヤールス
ヲ召喚ス

月裁判廳ノ決定ニヨリ、埃地利家ノチヤールスヲシテフランドアース、アルトワ二州ノ領主タル資格ヲ以テ佛王ニ對シ臣禮ヲ行ハシメンガ爲メニ、巴黎ノ高等裁判廳ニ召喚シタリ、是レチヤールスガカムブレノ條約ヲ破リタルノ故ヲ以テフランドアース、アルトワ二州佛王ノ支配ニ復歸シタリトノ旨趣ニ基キタルナリ、若シ佛王ニシテ實ニフランドアースヲ征服シ、朝貢ノ約ヲ定メテ之ヲチヤールスニ領セシメバ、此ノ召喚モ亦理アリト雖モ、此ノ事ナクシテ條約ヲ破レリトノ口實ヲ以テ召喚セルハ適ニ其笑フベキヲ見ルノミ、サレバチヤールスハ此ノ召喚ニ應ゼズ、佛王ヨリ頑冥不信ノ臣トシ譴責ヲ受クルニ至レリ、而シテフランシスノ意タル唯チーゼルランドヲ侵攻スルノミナラズ、土耳其帝ソリマンノ援軍ニ藉リテ大ニ意大利ヲ畧セントスルニ在リ、千五百三十六年一月佛國ノ使節ラ、フォロー土耳其ノ宰相イブラヒムト同盟ノ約ヲ定メリ、而シテ外觀ニハ貿易條約ノ狀ヲ裝ヘリト雖モ、其ノ實ハ政治條約ナリトス、其ノ約ニ曰ク千五百三十七年バルバロッサハ土耳其ノ軍兵ヲアプリアニ艦送シテチーブルスヲ征服スベシ、而シテフランシスハ五万ノ兵ヲ以テロンバーヂーニ入

フランシス
土耳其ト同
盟シテチヤ
ールスニ抗
ス

リ其ノ北疆ヲ擾スベシト、

佛王ハ其ノ奮前ノ勇氣ヲ缺キタルヲ以テ(蓋シ良心ノ餒タルヲモ亦之レナシト言フ可カラズ)其ノ計畫ヲ十分ニ實行スル能ハザリキ、佛王ノ力ヲ用フル所先ツテ、子ゼラ ンドノ役 ル ラ ニ 在 リ、三月下旬フランシス及び其ノ將軍モンモランシイ兵ヲ擧テヘスヂン、聖 ボ ル、聖 ヴ エ ナ ン ト ヲ 取 リ、而シテフランシスハ非常ノ惰慢ヲ生ジ彼ノ宏大ナル經畫ニ對シテ此ノ么麼ノ成功ニ満足シ、軍兵ノ多分ヲ散歸セシメ、其ノ餘ノ少兵ヲビード モ ン ト ニ 遣 リ、其ノ身ハ快樂ヲ取ランガ爲メニ急ニ巴里ニ歸レリ、然ルニ日耳曼帝ノ將ビユー レ ン 公 三 万 五 千 ノ 兵 ヲ 率 ヒ テ 其 ノ 北 部 ニ 出 テ、聖 ボ ル ヲ 回 復 シ、モ ン ト リ イ ル ヲ 奪 ヒ、進ミテタル ン ヲ 圍 メ リ、是ニ於テカフランシスハ遽カニ其ノ兵ヲ再集シ、太子ヘン リ ー 將 軍 モ ン モ ラ ン シ イ 之 ヲ 率 ヒ テ タル ン ヲ 救 援 ニ 赴クニ際シ、子 ゼ ラ ン ド ノ 攝 政 マ リ ー 后 講 和 ノ 說 ヲ 出 シ、七月二十日ボ ミ ー ニ 於テマリ ー ト 其 ノ 同 胞 ナル 佛 后 エ リ ニ ノ ル ト ノ 間 ニ 十 箇 月 ノ 休 戰 ヲ 約 シ タ リ、此ノ時ニ際シ土耳其帝ソ リ マ ン ハ 前 約 ヲ 履 ミ、ア ッ ロ ナ ノ ア ル バ ニ ア 府 ニ 大 軍 ヲ 集

ボミールノ休戰條約

子ゼラ
ンドノ役

メ、此ノ地ヨリオトラントノ海岸ヲ望見スベシ)バルハロツサハ一百隻ノ帆船ヲ以テ土耳其軍ヲ轉運セント其ノ準備ヲ爲シ、佛國ノ海軍將十二隻ノ戰艦ヲ以テ之レト共ニ進マントス、是ニ於テ意大利ノ全國大ニ震懾セリ、法皇ポール 羅馬 ヲ 遁 走 セ ン ト シ、羅馬 ニ 屬 ス ル 諸 國 ノ 海 港 ハ 戍 兵 ヲ 増 加 シ テ 戒 嚴 セ リ、皇帝ノ海軍將ア ン ド リ ユ ー、ド リ ア ハ ハ ル ハ ロ ツ サ ノ 船 隊 ヲ 避 ケン ガ 爲 メ ニ 己 ム ヲ 得 ズ シ テ メ ツ シ ナ ニ 逃 レ タ リ ケ レ バ、ア プ リ ア ノ 海 岸 守 ヲ 失 ヒ テ 土 耳 其 人 ノ 侵 入 ヲ 支 ユ ル 者 ナ シ、是ニ於テパ ル バ ロ ツ サ ハ オ ト ラ ン ト ノ 近 傍 ニ 一 万 ノ 騎 兵 ヲ 上 陸 セ シ メ タ リ、然ルニ砲隊ノ備ナカリシヲ以テ偉大ナル都城ニ逢フモ之ヲ攻陷スルコト能ハザルガ故ニ、平原ヲ蹂躪シ約子一万人ヲ虜獲シテ奴隸トナシ、カ ス ト ロ ヲ 攻 ム ル ヲ 以 テ 滿 足 シ タ リ、土軍約ヲ履ミテ此ノ如ク意大利ニ侵入セシト雖モ、佛王フランシスハ豫定セル時期ニ葉來セザリシヲ以テ、ソリマンモ亦深入スルコトナカリシ、此ノ事實ニ千五百三十七年ノ夏ニ在リテ、フランシスが意大利ニ入ルノ準備ヲ爲セシハ延テ九月下旬ニ至レリ、十月三十一日佛軍リヴォリマテ進入シ其ノ兵皆敵ト會戰スルヲ欲スト雖モ、佛王ハ其

フランシス
戰ニカメザ
ルヲ以テソ
リマン其攻
取ノ擧ヲ中
止ス

チャールズ
フランシス
ノ平和商議

將ノミナラズ太子ノ功ヲ立ツルヲモ悦バズ、使ヲ遣リテ言ハシメテ曰ク戦ハズ我
到ルヲ俟テト、抑々フランシスガ其ノ出軍ヲ遅延シ、又會戰ヲ止メタル主因ハ、其講
和ノ期望ヲ懷キシニヨラズ、而シテホミールノ休戰後アラゴンノモンソン
ニ於テ商議ヲ開キ、十一月十六日ニ至リモンソンニ於テ兩國ノ全權使節三箇月ノ休
戰書ニ署名シ、其ノ二十七日ビードモントニ於テ之ヲ公ニスベシト定メタリ、其ノ
載スル所ニ據レハ兩國互ニ其軍兵ヲ解散スヘシ、兩國ハ休戰條約公示ノ時ニ於テ占
ムル所ノ土疆ヲ有スベシ、而シテ更ニ全權使節ヲ派出シテ確定ノ和約條款ヲ商議ス
ベシト

法皇ポール三世モ亦皇帝ノ如ク土耳其ノ侵攻ヲ遏メ、且ツ教會ヲ混乱セル分裂ヲ調
和一致セシメンコトヲ願ヘリ、然ルニ此ノ兩個ノ目的ハチャールズトフランシストノ
争鬭ノ爲メニ妨ケラレテ共ニ之ヲ遂グル能ハズ、是ニ於テカ先ヅ此二君ノ戦争ヲ止
ムルコトニ力メタリ、而シテ此ノ止戰ノ計畫ハ皇帝ノ同胞ナル佛國ノ后、匈牙利ノ寡后
之ヲ助ケタリ、夫ノ老邁ノ法皇ハ熱心ニ其ノ目的ヲ成就セント欲スルガ爲メニ危険

ヲ畏ルス等苦ヲ顧ミス、而シテ其ノ一身及ビ親屬ノ利ヲ此ノ間ニ計畫シ、又故法皇
ノ先蹤ヲ追テ日耳曼帝及ビ佛王ノ一族ト結婚シテ其ノ姻婭トナランコトヲ願ヘリ、ポ
ール三世子アリピエル、ルイギ、フアルニースト云フ、是ヨリ先キカメリノ領ノ女統ニ
歸シタルヲ以テ之ヲ沒收シ、ピエル、ルイギ、フアルニースト封シテカメリノ公トナス、
(ピエル、ルイギ、フアルニースノ人トナリシザル、ボルジアニ類シテ小ナル者ナリ
按) シーザル、ボルジアハ法皇アレキサンドル六世ノ子ニシテ兇惡無比ノ人ナリ、
ピエル、ルイギ、フアルニース之ニ類シテ其ノ甚シキガ如クナラズ、故ニ小ナル
者ナリト) ピエル、ルイギ、フアルニースニ女アリオクタヴニースト曰ヒ、ウ井ツトリ
アト曰フ、法皇ポール此ノ二孫女ヲチャールズ及ビフランシスノ一族ニ嫁セシメン
ト欲シ、此ノ目的ヲ以テ先ヅ兩主ノ間ニ和約ヲ整ヘン爲ニニースニ會見スルコトヲ周
旋セリ、而シテフランシスハ兵力ニ頼ラズ商議ニ頼リテ其ノ目的ヲ達スルノ機會ヲ
此ノ會見ニ得ントシテ容易ニ之ヲ承諾シ、皇帝モ亦日耳曼ニ帝權ヲ立テントスルニ
際シ、佛王二國ノ兵政モ亦豊裕ナリト云フ可カラズ、此ノ時ニ當リ皇帝歐洲ノ一半
ニ君臨シ、メキシコ、ペリユーヲ兼領スト雖モ、尙ホ其ノ雇兵ニ給スルニ十分ナル金

ヲ得ル能ハス、チーゼルランドハチャールズノ印土領ニシテ資財ノ源ナリ、然ルニ其ノ人民ハ納税ノ力アリト雖モ常ニ之ヲ納ル、チ好マスシテ租税ノ事ニ關シケン
トノ人民殆ンド叛乱ノ徴ヲ現ハシタリ、

ニースノ會

千五百三十八年五月二十七日ポール、ニースニ到着シタリシニ、サウオイ公ハ戰爭ノ結局ニ於テ僅カニ自家ノ有トシテ遺存スルノ府中ニ法皇若クハ日耳曼帝佛國王ヲ入ル、チ拒メリ、是ニ於テ法皇ハ郊外ノ「フランシス」派ノ寺院ニ寓宿シ、佛王ハ府城ヲ去ル約チ二里ノヴ井ラヌーヴア村ニ假居ヲ設ケ、皇帝ハ其ノ乘リ來リタル兵艦ニ居リテヴ井ラフランカノ小港ニ碇泊シタリ、ポールハチャールズ、フランシスニ説クモ其レヲシテ對見セシムルヲ能ハズ、故ニ一人ツ、自己ノ所ニ延見シ、自ラ其ノ中間ニ立チテ調停ヲ行ハントセリ、然レモ二君ノ心中互ニ猜疑ヲ懷キ、如何ナル條約ヲ締ブモ其ノ能ク後日ニ行ハル、チ保ツ能ハザルヲ顧念セリ、此ノ如キ事情アルニ際レテハ後來ヲ豫期セル箇條ヲ立テ、以テ平和ヲ約スル能ハズ、唯現狀ヲ基礎トシテ約スルノ一方法アルノミ、此ノ方法タル大ニフランシスニ利益アリトス、何

十年間ノ休戰條約

トナレバ之ニヨリテサウオイ、及ビビードモントノ多分ハフフランシスノ有ニ歸スベクシテ、此ノ地ヲ有スルハ殆ンドミランチ有スルト其ノ價ヲ同クシ、特ニ佛國ニ取リテハ却テミランヨリ便ナル者アリ、之レニ反シテチャールズハフランシスガ其ノ叔父サウオイ公ノ領地ヲ却奪シテ忌憚ナキニ拘ラズ、公ノ妃ビートリツクス死シテサウオイ公トノ縁絶ヘタリト雖モ、先キノ姉兄弟タル公ヲ遺棄スルヲ以テ羞辱トナセリ、然リト雖モ政治上ノ道德心ハ幾バクモナク消散シ、世ニ實例乏カラサル如ク、弱ノ肉強ノ食トナレリ、而シテ平和豫約ノ一箇條ハ土耳其ニ抗スルカ爲メニ近時法皇皇帝及ビヴェニスノ間ニ組織セル聖教保護同盟軍ニフランシスノ連合スベシト云フニ在リ、然レモフランシスハ公然土耳其帝トノ條約ヲ破ルヲ欲セザルガ故ニ平和ノ確定條約ヲ締ブ能ハズシテ之ニ代フルニ十年間ノ休戰條約ヲ以テシタリ（六月十八日）、日耳曼帝佛王トノ此ノ休戰條約ハ、平和條約ノ如ク互ニ之ヲ守リ永ク保續スルヲ得ント信シ、而シテ此ノ信用モ亦幾分ノ理アリトス、是ノ約ニヨリブレツス、サウオイ及ビビードモントノ一半ハ佛王之ヲ保有シ、ビードモントノ他ノ一

半及ビミランハ皇帝之ヲ保有セリ、ヘスゲンハ佛國ニ復歸シ、ゲルデルランドニ至テハ佛王他ノ要求ニ從ヒ、サヴオイ公ノ豫約セル如ク其ノ地ヲ皇帝ニ納ルベキヲ承認セリ、此ノ如クニレテサヴオイ公ノ領地トシテ遺存スル者ハ唯ニースノ一州ノミトナレリ、ペイ、ド、ヅアウドハベルンニ屬シ、ゼテヅアハ其ノ新得ノ自由ヲ享受セリ、此ノ事タル日佛二君其ノ領内ニ後來叛徒ヲ出スノ種子ヲ偶然遺存シタル者ニシテ、即チカルヅ井ンノ宗教改革ヲ此ノ市街ニ行ハシメタル原因トナレリ、以上ノ如ク國土ヲ分割シテ平和ノ約ヲ爲シタルハ詭巧貪饒ナルニ政治家ノ計畫スル所トス、此ノ外フランシスハミランドヲ得タリ、故ニフランシスノ位置ハ之ヲカムブレノ條約ニ比スルニ甚ダ利ヲ得タリト雖モ、サヴオイ公チヤーレンスハ其ノ領地ヲ奪ハレ其ノ權利ヲ侵蝕セラレタリ、世人或ハ評シテ曰クサヴオイ公ハ有力ノ來賓（按）法皇帝佛王ニ對シテ適當ノ禮遇ヲ缺キシガ爲メニ其ノ不幸ヲ招キタリ、蓋シ公ガ平和ヲ定ムルノ商議中共ノ府内ニ外國ノ戍兵ヲ屯スルヲ拒ムハ固トヨリ當然ノ事ナリト雖モ、法皇皇帝佛王ヲ府内ニ入レザルハ弱ヲ以テ強ニ對スルノ待遇ニアラザル

ヲ以テナリト、而シテ此ノ休戰條約ハ明年ノ初メニ至リトレドニ於テ之ヲ改訂シテ（二月十日）永久ノ和約トナシタリ

法皇ハ此ノ會見ノ間、夫ノ結婚ノ計畫中共ノ一ヲ遂グルヲ得タリ、皇帝ノ私生ノ女換地利家ノマルガレットハ蘇ニ「メヂシ」家ノアレツサンドロニ嫁シタル者前年其ノ夫アレツサンドロノ殺サレタルヲ以テ今寡居セリ、抑々アレツサンドロノ人トナリ慘刻淫蕩ニシテ、屢々フロレンスノ資性端淑ニシテ且ツ高等ノ位置ヲ占メタル婦人ニ懸想シ、唯之レガ名譽ヲ辱カシメタルノミナラズ、公然其ノ痴情ヲ遂ケタルヲ言ヒテ以テ自ラ誇ルニ至レリ、アレツサンドロノ親屬ニローレンシノナル者アリ、彼レノ淫行ヲ助ケ、又之ヲ共行シタリシガ、其ノ心此ノ鄙陋ノ行爲ヲ假リテアレツサンドロヲ斃シ、自ラ代リテ大權ヲ把握セント欲スルニ在リ、レオナルド、ギノリノ妻ハローレンシノノ叔母ニシテ年尙ホ少ク絶美ノ婦人ナリ、アレツサンドロ見テ之ヲ悦ビ屢々之ニ意ヲ通シタリシガ彼レ遂ニ應ゼズ、然ルニローレンシノ僞リテアレツサンドロニ告ゲテ曰ク、レオナルド、ギノリノ婦密ニ公ヲ見ントス、請フ某所ニ待テト、

コスモ撰立
セラレテ公
トナル
オッタヴ井
オ、マルガレ
ットト婚ス

アレツサンドロ恍然トシテ心目昏迷シ、復タ其ノ眞偽ヲ思フニ暇アラス闇黒ノ幽室ニ入りテ約スル所ノ美人ヲ期待セシニ、忽然ローレンジノ及ビ其ノ使フ所ノ刺客ニ遭ヒ、兇刃胸ヲ刺シテ斃レタリ、千五百二十七年一月六日然ルニローレンジノハ敢テ刺殺ノ罪惡ヲ行ヒシモ遂巡狐疑セシヲ以テ僭奪ノ目的ヲ果サマリキ、彼レ其ノ所爲ヲ顧ミテ深く悔恨畏怖シ、人民ヲ煽動シテ自ラ之レガ長タラントスルノ計畫ヲ爲サズ、倉皇ホロニアニ遁レ、遂ニヴエニースニ走レリ、フロレンス人ノ一党、僧長シボ史家フランシスコ、ギーシアルヂニノ議ヲ採リ、黒隊ノ長ニシテ有名ナル將軍ジョヴアンニノ子「メヂシ」家ノコスモヲ立テ、其ノ君長トナシ之レニ公稱ヲ與フ、コスモ此ノ時纔カニ十八歳ナリ、而シテ此ノ撰舉ハ其ノ後皇帝之ヲ認可確定シタリ、千五百四十七年コスモ竊ニ人ヲシテローレンジノチヅエニースニ殺サシム、コスモ又故公アレツサンドロノ寡妃マルガレツトヲ娶リ之レニ藉リテ以テ皇帝ノ愛ヲ固クシ、自己ノ位置ヲフロレンスニ確立セント欲シタリシニ、法皇ポール其ノ孫オッタヴ井オ、フアルニースノ爲メニマルガレツトヲ娶ルヲ得テ、コスモノ目的ハ爲メニ破レタ

エイグ、モル
トニ於テチ
ヤーレンスフ
ランシスノ
和陸

リ、
義キニチヤーレンス、フランシスノニースニ會スルヤ、互ニ對見スルヲ肯ゼザリシヲ以テ、日佛ノ兩朝及ビ法皇皆謂ヘラク、兩主一時已ムヲ得ザルノ事情ノ爲メニ休戦ヲ約シタリト雖モ、其ノ尙ホ怨恨ノ深キヲハ其ノ對見セザリシヲ以テ之ヲ見ルベシ、故ニ此ノ休戦ハ久シキヲ持セズシテ戰機一タビ到ラバ直チニ開戦スルニ至ルナラント、然ルニ此ノ推定ハ當ラザリキ、其ノ二君ノ相見ルヲ肯ゼザリシ所以ノ者ハ、自家胸中ノ畫策ヲ他人參席ノ地ニ於テ露出セシメテ恐レタルニ由レリ、而シテ二君ハ既ニ後日ニ會見スルヲ豫期セシ者ト見ヘタリ、此ノ事果シテ如何ヲ確知スベカラズト雖モ、フランシスノニーム僧領ノ寺庵ニ集會ヲ爲シ、會終ルモ尙ホ此ノ地ニ留マリテ待ツ所アルモノ、如ク、既ニシテ皇帝ノ船隊ニイグ、モルトニ到着シタルノ報アルヤ、七月十四日直チニ馬ニ乗ジテ海岸ニ赴キタリシニ、皇帝ノ乗船ヨリ解舟チ下シテフランシスチ迎フ、フランシス乃チ帝船ニ移乗セントスルハ皇帝自カラ手ヲ出シ之ヲ助ケタリ、フランシス足ヲ艦板ニ着クルヤ呼テ曰ク我兄ニ兄ノ囚虜ハ再ヒ

此ニ會見セリト(按)兄ノ囚虜トハ「フランシス」自カラ言フ者ニシテ、先「フランシス」此ノ如ク親信ヲ呈シタルヲ以テ帝モ明日上陸シテ之レニ答禮シタリ、佛后ニリエノルモ夫ト兄トニ交々親厚ノ禮ヲ致シ、アンドロウニ、ドリアマモ亦フランシスニ謁見シ、前日ノ争鬪ハ全ク痕跡ヲ消滅シテ復タ一点ヲ留メザルニ至レリ、二君此ニ留マルコト數日ナリト雖モ其ノ會見ノ時ハ頗ル長カリキ、而シテ會席ニ列シタル者佛王ノ方ニ於テハ王后、ロルレインノ僧長、モンモランシイ（今ハ「コンスタール」官タリ）(按)政府ノ第一等官ニシテ、皇帝ノ方ニ於テハ保羅官グランヴェニル大將ゴヴニアノミ、軍事ヲ總督スル者ナリ）七月十七日佛王皇帝ヲ送リテ其ノ船ニ至リ、是ニ於テ其ノ會ヲ終レリ、此ノ會見ノ狀ハ之ヲ一見スル者テシテ吃驚セシムルニ足レリ、數月前ニ在リテハフランシスハ公然皇帝ヲ以テ叛臣ナリト明言シテ其ノ罪ヲ聲ラシ、尙ホ且ツ其ノ太子ヲ毒殺シタリトシテ非責シタリ、而シテ皇帝チヤールスハ佛王ニ對シテ疾惡難服ノ意ヲ顯ハシ且ツ公然生死ヲ一擧ニ決セント佛王ニ戰ヲ挑ミタリ、然ルニ此ノ如ク愛憎頓ニ地ヲ換ヘ、往日ノ仇敵一旦好友トナリタル者ハ抑々以テアリ、此ノ時期ニ際シ

フランシス
其ノ政畧ヲ
一變ス

モンモランシイ權勢ヲ得テ其ノ力ニ頼リテ此ニ至ル者多キニ居レリ、モンモランシイノ人トナリ峻刻殘忍ニシテ驕傲放肆ナリト雖トモ頗ル經倫ノ才能ヲ有シ、近ゴロ舉ラレテ「コンスタール」トナレリ、蓋シ「ブルボン」ノチヤールス謀反シテヨリ以來久シク此ノ職ニ居ル者ナリシガ此ニ至リテモンモランシイ之レニ任ゼリ、此ノ人頑平タル羅馬教徒タルヲ以テ、日耳曼帝ガ漸次黨ヲ仇視シテ之ヲ壓服セントスルノ政畧ト自カラ其歸旨ヲ一ニセザルヲ得ズ、然ルニ是マデ佛國ノ政畧ハ「ルソー」黨及ビ土耳其人ト同盟セザル可カラザルノ傾嚮アリ、且ツ此ノ時ニ至リフランシスハ奢侈ノ爲メニ氣力ヲ弱メ病痾ノ爲メニ身体ヲ疲ラシ、政務ヲ他人ニ委セント欲スルノ心アリ、然リト雖モフランシスガ其ノ快樂ノ昏睡ヲ破リテ一時其ノ胸中ニ激生シ、尙ホ思ニ絶ツ能ハザル者一アリ、ミランチ回復セント欲スルコト即チ是ナリ、而シテモンモランシイハ兵力ニヨラズ商議ニヨリテ此ノ志望ヲ達スベキコトヲフランシスニ告ゲタルニ、フランシスハ是マデ兵力ニヨリテ之ヲ強取セントシテ遂ニ成功ナカリシテ以テ氣挫ケ意下リテ其勅敵タル日耳曼帝ノ好意ヲ以テ之ヲ得ント欲スルニ

至リタリ、事情此ノ如シ、其ノ媾和成リテ情好密ナルハ固ヨリ怪シムニ足ラザルナリ、其ノエイグ、モルトノ會見終リタル後一二日ヲ過ギニームニ於テ記シタル手書中（七月十八日）明言シテ曰ク、今ヨリ以後我ト皇帝トノ政畧ハ同一ノ方向ヲ取ルベシト、

佛國ノ政畧一變シタルヲ其跡忽チニ顯然タリ、ニイグ、モルトニ於テ商議シタル者ニ事アルガ如シ、曰ク宗教事件ニ關スル者、及び英國ニ對スル行爲ニ關スル者はナリ、此ノ會以後ハ佛國既ニ日耳曼ノルーザー党ニ協和スベキ理由ナキヲ以テ、其ノ國內ノ新教党ヲ遇スルノ苛虐一層甚キヲ加ヘタリ、ツールースニ新教党ヲ糾彈スベキ命ヲ受ケタル者アリ、却テ新教党ノ誨諭ヲ受ケテ該教ニ改宗シタルノ故ヲ以テ該地ニ於テ焚殺セラル、千五百三十八年九月十日（十二月十日ニ至リ宗教改革者ニ對スル布告出テタリ、其ノ旨趣ノ峻厲苛刻ナル未タ嘗テ其ノ比ヲ見サル所ナリ、佛國ノ内治ニ行ハレシ者此ノ如クニシテ、久カラズシテ日耳曼ノルーザー党モ親シク此ノ變革ヲ知ルニ及ヘリ、乃チモンモランシーウエルランブルグ公ウリツクニ傳告シテ

英佛ノ爭議

曰ク、足下佛國ノ疾惡ヲ招カザラント欲セバ近隣ノ舊教ノ僧正等ヲ攻撃スルヲ勿レト然ルニウリツクハ嘗テ此等攻撃ノ意ナカリシナリ、

佛國ノ英國ニ對スル政畧モ亦全ク變換シタリ、蓋シヘンリー八世ト皇帝トノ調和ハ決シテ遂グルノ望ナシト想定セシニ基キシモノ、如シ、フランス既ニ英王ニ迎合シテ友誼ヲ保ツテ要セズトナセシノミナラズ、尙ホヘンリート全ク絶交スルハ却テ自家ノ利益ナラン乎ト思惟スルニ至リ、タリ、ムールノ條約ニ違ヒテ毎年十萬、クラウンヲ拂フハ既ニ厭フベキヲニシテ、此ノ事ハ皇帝ノ侵攻ニ遭ヒ佛國疲敝シタルヲ理由トシテヘンリー王ノ承諾ヲ得暫ク之ヲ拂フヲ停止シタリ、フランスノ入トナリ自己ノ利益トナル間ハ約束ヲ履ムト雖モ、其ノ不利ヲ見ルニ至リテハ之ヲ破リテ忌憚セザル者ナリ、サレバニースノ休戰後忽チ英國ニ對スル負債ノ約束ハ有効ナルヤ否ヤノ疑問ヲ起シタリ、蓋シ英佛二王ノ交誼日ニ疎濶ニ趨クハ其ノ原因一ニアラザルナリ、ヘンリーガ「キース」家ノマリーヲ娶ラントセシニフランスノ之ヲ拒ミタルハ既ニ上文ニ記シタリ、抑々ヘンリーガ佛國ノ公女ヲ娶ラント欲シタルハ一

人ノミニアラザルナリ、「ギース」家ノ他ノ公女及ビマデモイセル、ド、ヴエンドーム
 ノ中一人ヲ娶ラントシ、其ノ撰擇ヲ爲スニ先ダチテ二婦人ヲカレイニ見シテ望ミ
 シガ此ノ如キ不敬ノ請求ハフランスヲシテ輕侮ノ心ヲ發セシメタリ、佛國ノ宰相、
 英國駐劄ノ佛公使カスチロンニ贈リシ書中記シテ曰ク、我王ハ足下ト英人ト商議セ
 シ婚儀ニ關シテ一笑ヲ發セリ、王ハ之ヲ評シテ云フ、英人ノ妻ヲ撰ムハ乘馬ヲ購フ
 ガ如ク、數個ヲ並觀シ之テシテ歩セシメ、其ノ態度驟跑ノ最モ可ナル者ヲ取ラント
 スルナリト、然レドモ此ノ時ニ當リテヘンリーガ佛國ノ婦人ヲ娶ラントスルノ情
 意ハ甚ダ熾盛ナラザリシナラン、何トナレハ其ノスツオルザ公ノ寡妃ヲ娶ラント欲
 シ、又皇帝ノ同胞マリー后(按)匈牙利ノ寡后ナリヲモ娶ラントスルノ意アリシヲ以テナリ
 ヘンリー既ニ羅馬ト分離シテ法皇ノ權利ヲ英國ニ認メザルヲ以テチャーレンス及ビ
 フランシスノ疾視スル所トナリシトセハ、其羅馬廷ノ憤怒ヲ惹起シタルヤ固ヨリ更
 ニ大ナリトス、然レモヘンリーアン、ボレインヲ斬首セシ後ハ、法皇皇帝俱ニ英王ト
 調和ヲ爲サント欲シ、特ニチャーレンスハニースノ會ニ至ルマデ尙ホ此ノ目的ヲ達ス

法皇等ヘン
 リーヲ仇視
 ス

ルニカメクルガ如シ、外交文書ノ今ニ遺存スル者アリ、其ノ中載スル所ヲ見ルニ、千
 五百三十八年ノ夏チャーレンスウヰラフランカニ在ル時、佛國ニ反對シテ同盟ヲ爲サ
 ントヘンリーニ進言セシマアリ、而シテ其ノ計畫ハ上文ニ記セル婚姻ノ事ニ關スル
 者ニシテ、即チ皇帝ノ姪女故ミラン公ノ寡妃ヲ以テヘンリー八世ニ嫁シ、皇帝ノ姪
 葡萄牙ノドム、ルイテミラン公ト爲シ之ヲシテ英王ノ女マリーヲ娶ラシメントスル
 ニ在リキ、然レモチャーレンスノ佛國ト媾和シテ親密ノ同盟ヲ爲スニ至リア此等ノ計
 畫皆消滅シタリ、而シテ千五百三十八年十一月ヘンリーハチャーレンスニ對シ其ノ冷
 遇薄待ヲ憾ムノ言ヲ爲セリ、同年法皇ポール三世、ヘンリーニ對シテ再ビ其ノ王位ヲ
 剝奪スルノ法勅ヲ發セリ、蓋シ法皇ハ皇帝佛王ノ盟好ヲ締ビタルヲ見テ、此ノ機會
 ニ乘シ其ノ力ニ藉リテ英王ヲ廢セントスルノ意甚ダ熾ニシテ復タ他念アルコナシ、
 而シテ此ノ計策ハ僧長レシナルド、ポールノ隱謀ニヨリ更ニ其ノ勢力ヲ加ヘリ、抑々
 レシナルド、ポールハ「ヨーク」家ノ系統ニ出ルノ故ヲ以テ英國ノ王位ニ登ルベキ主
 張ヲ有シ、而シテ其ノ主ニシテ夙トニ恩惠ヲ受ケタルヘンリーニ叛クノ計ヲ爲スト

雖モ、其ノ法皇ニ從順スルノ主義ニ藉リテ自カテ托言ノ曰ク、予ガヘンリーニ背キテ法皇ニ通ズル所以ノ者ハ別意アルニアラズ、唯ヘンリーヲ愛シ其ノ利益ヲ計リ、彼ヲシテ法皇ニ違ハシメント欲スルニ在ルナリト、而シテ佛廷モ亦實ニ此ノ謀計ニ與カレリ、此ノ時ニ當リテ英國ニ離叛ノ心ヲ懷ク者アリシコトハ疑フ可キニアラズ、佛國ノ使節カスチロン英國ノ狀ヲ記シテ曰ク、皇帝佛王及ビ蘇格蘭王ニシテ若シ聯合ヲ爲サバ、唯ヘンリーヲ廢スルヲ得ベキノミナラズ、英國ヲ征服シテ之ヲ三分スルモ難キニ非ス、而シテ其ノ北部ハムバー河ニ至ルノ地ハ之ヲ蘇ニ與ヘ、ハムバー河ヨリテームス河ニ至ル中央ノ地ハ皇帝之ヲ取り、其ノ餘ノ南部ウエールスニ至ルノ地ハ佛王之ヲ取ラント、然ルニチャーレンスハ此ノ建言ヲ拒ミテ其ノ意ヲ告ゲテ曰ク、我が第一ニ爲サバ、爾可カラザル者別ニ之アリ、即チルーザー黨及ビ土耳其ヲ克服スルコト是ナリ、然リト雖モ其ノ内部ニ争フベキ欲ナキノ佛王ニシテ之ヲ企ツルコトハ予ノ可トスル所ナリト、然レモ佛王ハ獨リ英王ヲ敵トスルヲ好マズ、實ハ佛王ノ計畫ニアラズシテ其ノ將軍モンモランシーノ意ニ出タルナリ、而シテポール及ビポール

ヘンリー、ル
ーザー黨ト
同盟ヲ固ク
シ且クルー
ヴノアント
婚ス

ノ後援者タル法皇モ亦此ノ計畫ヲ遲延セザルヲ得ザルニ至レリ、然レモヘンリーハ此等ノ謀計ヲ聞テ大ニ驚キ、千五百三十九年三月英國ノ海港ヲ發シテテールランドニ赴クノ船舶ヲ差止ムルノ令ヲ布キ、英國ノ海岸ヲ防禦センガ爲メニヘンリー自カラ巡檢シ、船艦ノ數ヲ増加シテ二百五十隻トナシ、全國ニ令シテ兵ヲ徵シタリ、又此ノ危險ニヨリヘンリーヲシテ益々スマルカルドノ同盟ト親密ノ盟約ヲ爲サシメ、又謀臣クロムウエルノ議ニヨリクレーヴノアント不幸ナル婚姻ヲ約スルニ至リタリ、然レモ此ノ婚姻ノ事ニ就テハ數言ノ説明ヲ要スル者アリ、千五百五年ニ於テ大公フヰリツアゲルランド、ヅトフエンヲ畧取シタルコトハ之ヲ前篇ニ記シタリ、然レモフヰリツアハ長ク此等ノ地ヲ保有セザリキ、エグモントノチャーレンス牢獄ヲ脱出シ、而シテ此等ノ故領ヲ恢復シ、佛國ノ援助ニヨリテ之ヲ保有セリ、千五百八年カムブレノ同盟組織セラレ、此ノ同盟ノ議ヲ以テチャーレンスハ其ノ領地ノ小分ヲ割キ餘ハ之ヲ領スルコトヲ假許セラレタリ、抑々エグモントノチャーレンスノ日耳曼ニ在ル恰モシツキンゲンニ類シテ切密ヲ事トスル魁首トナリ、

四隣無頼ノ徒此ノ領内ニ群集シ、之レガ爲メニチーセルランドノ政府ヲシテ困難痛
 心セシムルニ至レリ、然リト雖モ千五百二十八年皇帝チャールスハゴルカムノ條約
 ニヨリテエグモントノチャールスニ迫リ、其ノ繼嗣ナクシテ死スルニ及ビテハ、ゲ
 ルデルランドツトフェンチ皇帝ニ讓與スベシト約定シタリ、而シテカムブレーノ條
 約ニ於テフランシス一世モ亦之ヲ認メタリ、(千五百二十九年)然ルニ此ノ條約アル
 ニ拘ラズ、エグモントノチャールスハ千五百三十四年其ノ死後ハ領地ヲ擧テ佛王フ
 ランシスニ讓與セント公言シ、之レガ爲メニ佛國ノ使節ゲルデルランドニ赴キ、其ノ
 領内ノ重ナル堡寨ノ將官ヨリ忠順ノ誓言ヲ受ルアリ、此ノ事タルニエグモントノチャ
 ールスヲシテ其ノ臣民ノ心ヲ失ハシメタリ、蓋シ此ノ領内ノ臣民ハフランシス王ノ
 民タルヲ欲セズ、又チャールス帝ノ民タルヲ欲セズ、其ノ隣國ノ主クレージュ公
 シヨン三世ニ歸セントスルノ心アリ、是レロルレーン公アントニー其母フ井リツピ
 ナノニエグモントノチャールス同胞タルヲ以テ相續ノ權利アリト主張スト雖モ、ク
 レージュ公シヨンノ相續權最モ近密ナルヲ以テナリ、千五百三十八年ゲルデルランド

土耳其
 ヌースト戰

公其ノ臣下ノ勸メニ從ヒ、シヨン三世ト條約ヲ締ビ、其ノ領地ヲシヨンノ子ウ井リ
 アム(リツチ)ノ續號アリシ者、(按「リツチ」ハ「富ノ義」)ニ讓與スルヲ許シタリシガ、同年六月
 ゲルデルランド公卒シテウ井リアム其ノ遺領ヲ占取セリ、明年二月ウ井リアムノ父
 シヨシ卒ス、ウ井リアム其ノ遺地ヲ領シテクレージュ公トナレリ、是ニ於テカ其ノ領地
 ウニル河ヨリミユース河ニ達シ、ライン河ノ兩岸ニ沿フテコローンヨリウトレクト
 ノ疆ニ抵レリ、是レ其ノ父シヨンガベルグ、ユーリイシラヴニンスベルグノ故領主
 ノ女ニシテ其ノ相續者ナル某ヲ娶リテ其ノ領地ヲ併有シタルヲ以テナリ、此ノ勢力
 熾盛ナル公ノ同胞シピール、ハサキソニー撰擧侯シヨン、フレデリツキニ嫁シ、而シテ
 千五百三十九年英王ヘンリー八世ハ其ノ謀臣中新教黨ノ議ニ從テクレージュ公ノ同
 胞アンチ娶レリ、是ノ事ヤクロムウニル失權ノ原トナリテ、偶然ヘンリーチシテ英
 國舊教黨ノ擁スル所トナラシムルニ至リタル張本ナリ、
 東方ノ形勢ニ於テハ土耳其ノ將ハイラツヂン、バルバロッサ意大利ヲ侵シテ志ヲ得
 ザリシ後、土耳其帝ソリマンハチーブルスヲ征セントセシ軍ヲ移シテヴニースヲ

伐タントセリ、是レ佛國ノ使節ヲ、フオレーノ勸誘ニヨリテ其ノ目的ヲ變換セシナリ、千五百三十七年八月アウロナニ會セシ土軍コルフニ向テ進攻セリ、然レモ其ノ攻撃利アラズ、ソリマン又亞細亞領地ノ騷擾ニヨリテ緩カニナボリ、テ、ロマニア及ヒマルヴアシアチ圍ムニ足ルノ兵ヲ留メ、餘ノ大兵ヲ回サマルヲ得ザルニ至レリ、ナボリ、テ、ロマニアマルヴアシアハモレニア於テウエニース人ガ保守セシ重モナル都邑ナリ、又バルパロツサハ其ノ船隊ヲ率ヒ、佛將聖フランカード佛船ヲ以テ之レニ次ギ進ンデ、エシアン海ノ諸嶋ヲ攻メタリシニ、是年ヨリ明年ニ至ルノ間多クノ嶋嶼皆土耳其人ノ有トナレリ、千五百三十八年ニ組織セシ聖教同盟モ此ノ際ウエニースノ爲メニ効益ヲ發セザリキ、ドリアハウエニースノ爲メニ辛苦計畫セザル者ノ如ク、其ノ往時ノ名譽ニ當ルベキ一事ヲモ成サザリキ、千五百三十九年三月ウエニースノ共和國土廷ト三箇月間ノ休戰ヲ約シ、尋テ平和ヲ商議センガ爲メニ更ニ九月ノ終リマデ延期ヲ爲セリ、此等ノ商議ヲ爲スニ際シ、西班牙ノ冒險者リンコン(マリラツクニ繼テ佛國ノ使節トシテ土京コンスタンチノーブルニ駐在スル者)ウエニースヲ助ク

チヤールス
西班牙ニ赴ク

ベント揚言シタレドモ、實ハ之ヲ欺テ其ノ利益ヲ害シタリ、ウエニース政府ハ如何ナル條約ヲ締ブモ平和ヲ爲スニ意アリテ竊カニ此ノ議ヲ決シタリシニ、リンコン十員議會及ビ「ブレガデー」(按、政務ヲ決スル議會ノ書記ニ略フテ、此ノ秘議ヲ聞知シ之ヲ土廷ニ内通シタリ、土廷是ニヨリテ既ニウエニース政府ノ意ヲ知ルガ故ニ、千五百四十年十一月ニ條約ヲ締ブニ當リ、土帝最モ苛刻ノ條款ヲ主張シテ緩カニナボリ、テ、ロマニア、マルヴアシア其ノ他二三ノ地ヲ除キ、バルパロツサガ奪取セシ嶋嶼ハ悉ク之ヲ土耳其ニ讓與シ、且ツ三十万「ヂユカット」ノ償金ヲ拂ハザルヲ得ザルコトナレリ、是等ノ約款ニヨリ曾テ顯赫ノ聲威ヲ輝カセシ共和國變ジテ殆ンド獨立ノ位置ヲ失フノ衰頹ニ陥リ、國ヲ擧ゲテ佛國ノ保護ヲ仰カザルヲ得ザルニ至リタリ、皇帝チヤールスハ佛王フランシストエイグ、モルトニ會見シタル後西班牙ニ赴キシガ、是ニ於テ忽チ國會ト爭議ヲ開クニ至レリ、西班牙人就中其ノ貴族ハ自家ノ關セザル功業計畫ノ爲メニ其ノ負擔スル所ノ租稅重キヲ加ヘ、特ニ精銳ノ兵隊ヲ多ク外國ニ派出スルヲ快ハズシテ往々不平ヲ唱ヘ、而シテ國會ハ四方「ヂユカット」ニ超

國會ノ變制

ユルノ金ヲ出ササルベシト議決シ、「コンスタール」ヴエラスコノ首領タル貴族党及ビ墾地利家ニ左袒スル貴族党ハ、チャールズガ貴族ニ課スベキ新稅ヲ起サントスルノ舉ニ對シテ大ニ憤怒シタリ、ジエラスコ抗議ノ畧ニ曰ク租稅ヲ拂フハ農民ノ事ナリ、之ヲ貴族ニ課セントスルハ唯其ノ祖先ガ鮮血ヲ濺テ購ヒ得タル特權ヲ省減スルノミナラズ、併セテ其ノ名譽ヲ毀損スル者ナリト、而シテチャールズノ西班牙ニ留マリ國費ヲ節減シテ其ノ匱乏ヲ補足センコトヲ請フガ爲メニ激烈疎妄ノ言ヲ出シテチャールズヲ諫メタリ、彼レノ主張スル所ニヨルニ、貴族ハ自家ノ軍費ヲ以テ國王ニ從フノ務アリ、又唯王國ヲ防護スルノ務アルノミト、チャールズハ國會ヨリ多額ノ資金ヲ得ル能ハザルヲ見テ之ヲ怒リ、千五百三十九年二月國會ヲ解散ス、然レドモ貴族ハ其ノ租稅ヲ出ササルカ爲ニ此ノ舉ニ遭ヒ、偶然其ノ權威ヲ失喪シタリ、是ヨリ以後チャールズハ貴族僧侶ガ租稅ヲ出ササルノ故ヲ以テ之ヲ國會ニ召集スルコトヲ止メタリシカバ、唯十八都邑ノ代理員ヲ以テ國會ヲ組織セリ、是レ平民ヲシテ納租ノ義務ニ服セシメンガ爲メニ其ノ代理員ヲ召集スル者ナリ、然レモ權威微弱ニ

西班牙ノ貴族

シテ唯其ノ代理ヲ出サシムルノ外觀アルノミナリキ、

西班牙ノ貴族既ニ議政ノ職ヲ失ヒテ其ノ領邑ニ退キ其ノ宮殿ニ住セリ、其ノ宮殿ハ「ムール」人ノ式樣ニ從テ四方形ニ造リ表面ニ隔戸ナク、樹木ヲ環植スルノ公堂ヲ有セリ、貴族ハ宏大ノ領地ヲ有シ、或ハ其ノ歲入十萬「デユカット」若クハ其以上ヲ收メ、三万家ノ陪臣ヲ有スル者アリ、其ノ倨傲尊大ナルハ殆ド思想ノ外ニ在リテ、各其ノ自家ノ小朝廷ヲ有シ、其ノ内ニハ往々二百ノ華麗ナル衛兵ヲ置ク者アリ、侍婢ノ其ノ主婦人ニ仕フル者膝行俯伏シ、侍臣ノ杯ヲ捧グル者ハ婦人ノ飲ヲ畢ルマデ跪キテ敢テ立タズ、其ノ自尊鄭重ナルコト此ノ如シ、貴族等既ニ其ノ公務ヲ停メラレ、私邑ニ退居スルニ至リシテ以テ、互ニ華麗ヲ究極シ奢豪ヲ競誇シテ其ノ歲入ヲ浪費セリ、是ニ於テ其ノ尙武ノ風ヲ失ヒ、負債ヲ爲シ、嘗テ國王ヲシテ貴族ノ強勢ヲ恐懼セシメタル者變ジテ遂ニ國王ヲ恐懼スルノ微弱ニ陥リタリ、チャールズ五世ハ貴族ヲ朝ニ會スルコト希ニシテ、フ井リツプ二世ハ貴族ヲ疎斥シテ離居セシムルノ術ヲ用井タリ、二君ハ唯王室ニ忠實ニシテ異心ヲ懷クノ款ナキ僅々ノ貴族ヲ信任シタルナリ、

ゲント人民ノ叛亂

皇帝チャールスハ其ノ西班牙領ニ於テ貴族ノ驕傲ト威權トニ對シテ抗争セザル可カラズシテ其ノ子ーゼルランド領ニ於テハ其ノ商民ノ叛心ヲ鎮壓セザル可カラザルニ至レリ、而シテ此ノ商民ノ不滿モ亦租税ノ疑問ニ關スル者ナリ、抑々ゲント府ノ人民其ノ賦課セラレタル租税ヲ拂フヲ拒ミタルコトハ上文既ニ之ヲ記シタリ、千五百三十七年匈牙利ノ寡后、子ーゼルランドノ女太守マリーハ、ブラッセルニ召集セシ國會ニ於テ百二十萬、フロリンノ税ヲ徵スルノ議決ヲ得タリ、而シテ諸州邑ニ配當シ各其分ニ應ジテ之ヲ出サシムルコトセリ、此ノ賦課ニ對シ諸州邑皆之ヲ承諾シタリト雖モ、獨リチャールスノ生地ナルゲント府ノ人民之ヲ拒ミタリ、此ノ府ニハ市政議會アリ、又フランドルスノ諸公及ビボルガンヂーノ諸公ヨリ多年ノ間ニ得タル免除及ビ特許アリ、此等ノ爲メニ自然民政自治ノ制度ヲ有シ、其ノ甘心セザル租税ハ之ヲ拒ムノ權利アリト主張セリ、ゲント府ノ人民別ツテ二種トナス、曰ク富民、工人、賤民是ナリ、此ノ工人賤民モ亦或ル場合ニ於テハ市政ニ參スルノ權利アル者ニシテ、此ノ二種族今ハ租金ヲ納ムルコトヲ拒ミ、唯古來ノ慣習ニ從ヒテ兵役ニ服ス

フランシス皇帝ニ佛國ヲ經行セシコトヲ勸ム

ベシト言ヒ、富民ニ至リテハ納租服役共ニ其ノ義務ナシト言ヘリ、マリーハ此ノ抗命ノ所爲ヲ懲サンガ爲メニゲント府民ハ何人ヲ問ハズ所在之ヲ逮捕スベキノ命ヲ下セリ、府民乃チ之ヲチャールスニ控訴シタリシガチャールス之ヲ聽納セズシテメクリンノ大議會ニ付シテ其ノ可否ヲ斷ゼシメタルニ、議會ハ府民ノ訴旨ヲ否決シタリ、是ニ於テ府民公然反跡ヲ現ハシ貴族及ビ皇帝ノ官吏ヲ驅逐シ、府城ヲ防守スルノ準備ヲ爲シ千五百三十九年代理員ヲ佛國ニ派遣シ佛王ヲ主權者ト認定シ其ノ保護ノ下ニ立タンコトヲ請ヒタリ、抑々佛王ハ西フランドルス及ビアルトアノ二都ハ自己ノ監督スベキ地ナリト主張シ、二年前ニ其ノ裁判廳ニ臣禮ヲ致ス可キ旨ヲ以テ皇帝ヲ召喚セントシタルコトハ上文ニ記スル所ノ如シ然レモ今ハフランシスノ所見全ク前日ニ異ナレリ、其ノ目下ノ政畧タル皇帝ニ反對スルノ途テ更メテ之レニ協同セントスルニ在リ、乃チゲント府民ノフランシスニ十分ノ憑信ヲ置テ此ノ進言ヲ爲セシテモ願ミス、畜ニ之ヲ距ムノミナラズシテ却テ其ノ反狀ヲ皇帝ニ通シタリ、又之レト同時ニ皇帝若シ比耳時ニ赴クヲ要セバ佛國ヲ經行セラルベシト言ヘリ、此ノ事

ハ數月以前ニ言ヒ送リタル者ニシテ今又之ヲ再言シタルナリ、
 チヤーレンスハフランシスノ此ノ進言ニ從ヒテ路ヲ佛國ニ假ラントセリ、然リト雖モ
 路ヲ假ルノ便利ヲ得タルノ故テ以テミランヲフランシスニ讓與スルヲ諾シタリ
 ト云フノ説ハ信ス可カラザルナリ、此ノ説ハチユベルレーノ言フ所ニシテ某々ノ史
 家ニ亦此ノ説ヲ採リタリ、大凡此ノ如キ説ハ確證ヲ舉ゲテ其ノ事ノ必無ヲ保シ難シ
 ト雖モ、當時ノ事情ヲ推シテ考量テ下スニ此ノ説ノ毫モ信ズルニ足ラザルヲ知ル、
 抑々セントノ反乱ハ二三年間ヲ經タリシト雖モセント以外僅カニ一二ノ小都邑ニ
 波及シタルニ過キザレバ、之ヲ鎮壓スルヤ易事ニシテ固トモリチヤーレンスノ親征テ
 要セザルナリ、而シテチヤーレンスガ此ノ府ニ赴ク所以ノ者ハ唯此ノ府民ヲ懲艾スル
 顯著ノ蹟ヲ示サント欲スルニ過キサルナリ、又チヤーレンスガ佛國ヲ經行スルハ之ガ
 爲メニ旅行ノ日時ヲ減ズルニアラズシテ、却テ其ノ來廷ノ待遇ニ應ズル儀禮ノ爲メ
 ニ二ヶ月ヲ費セシニアラズヤ、若シ又チヤーレンス長キ海路ヲ取ルテ嫌フトセン耶、陸
 路ニ由リ意大利及ヒ日耳曼ヲ經行スルモ亦二ヶ月ヲ要セサルベシ、當時チヤーレンス

ト日耳曼ノルーザー党トハ親厚ノ情アルヲ以テ道路ニ毫モ支吾ナカルベキナリ、意
 フニチヤーレンスハ厭氣ヲ以テフランシスノ進言ヲ承諾シタルナラン、而シテ其之ヲ
 謝絶セザリシ所以ノ以テ、フランシスニ對シテ信用ヲ置カザルガ如キ形迹ヲ露出ス
 ルノ好政畧ニアラザルヲ思ヘバナリ、又其ノ心中悦ビテ之ニ應セザリシ所以ノ者ハ、
 其ノ欺計ニ陥リテ虜獲セラル、ノ危險アルノミナラズ、路ヲ假スノ報トシテ佛廷我
 ニ要請セントスル事アラシク豫見シタルハナリ、抑々佛廷ガセント府民ノ信憑ニ背
 キ其ノ反狀ヲチヤーレンスニ通知シ、又路ヲチヤーレンスニ假サントセシトハ、皆モン
 モランシイガ計畫ニ出デ、先キニ兵力ニヨリテ獲ザリシ者チヤーレンスノ感恩ニヨ
 リテ獲ントスルニ在リ、而シテフランシスガチヤーレンスニ對シテ最モ寛大ノ情アル
 ハ只尋常ノ款待ヲ高價ニ鬻キテ以テ大ニ欲スル所ノ目的ヲ遂ントスルニ在ルノミ
 (按)大ニ欲スル所ノ目的トハ、ミラン
 ノ公國ヲ得ントスルヲ云フ 千五百三十九年十月チヤーレンス發覺シテ佛國
 ニ入ル、フランシスノ二子及ビ「コンステールブル」モンモランシーベイオンヌニ於テ
 チヤーレンスニ會見ス、モンモランシーハ皇帝ノ安全ヲ保證センガ爲メニ二王子ヲ帝

ニ質トセントス、帝聽カズシテ唯此ノ行ニ伴ハントナ要セリ、既ニシテ佛王皇帝
 一シエニ會シ盛儀ヲ張リテ之ヲ祝セリ、アムボアズ、プロア、オルンアン、フオンテイ
 ンブローニ於テモ亦祝宴ヲ舉行シ、巴里ニ入ルニ及ビテハ其ノ盛ナルヲ特ニ他ニ超
 過シタリ、是レ實ニ千五百四十年一月一日ノ事ナリ、此ノ如キ盛舉ノ中ニモ往々皇
 帝ノ心ヲ驚動スベキ小事變ナキニアラス、典香官ハ香烟ヲ以テ殆ンド帝ノ呼吸ヲ塞
 カントシ、顧問官ボーエーハ帝ノ頭上ニ大ナル木片ヲ擊倒スガ如キ不敬ノ所爲アリ
 テ爲メニ痛ク帝ヲ傷ツケリ、オルンアン公ハ佛人ノ輕快ヲ以テ急ニ帝ノ鞞子ニ跳上
 シ、緊ク帝ヲ抱キテ之レニ謂テ曰ク陛下自カラ因虜トナリタリト思惟セヨト、又佛
 廷ノ侏儒ニブラツケーナル者アリ、諧謔ノ才ヲ以テ其名ヲ顯ハセリ、乃チ其ノ愚人
 ノ書ト題スル冊子中ニ險ヲ冒シテ佛國ニ入ルノ故ヲ以テチヤールス五世ノ名ヲ書
 中ニ記入シテ愚人ノ列ニ置ケリ、フランシス戯レニ問フテ曰ク、汝皇帝ノ險ヲ冒シ
 テ佛國ニ入ルヲ愚トセリ、若シ予皇帝陛下ヲシテ安全無事ニ佛國ヲ去ラシメバ如何
 ト、ブラツケー之レニ應ジテ曰ク、果シテ然ラバ予ハチヤールスノ名ヲ此ノ冊子ヨ

セント人民
ノ懲罰

リ削除シ、更ニフランシスノ名ヲ記入スベキノミト、然ルニ此ノ如ク諧謔笑樂ノ中
 ニ在リテモ、佛廷隱然ミランヲ要求スルノ意此ノ間ニ現ハレタリ、フランドーム之
 ヲ評シテ曰ク、皇帝ガ受ケタル尊敬親愛ニ比スレハ此ノ要求ノ度ハ復カニ過キタル
 ノ狀アリト、
 千五百四十年一月ノ末ニチヤールス佛國ノ疆界ヲ出テ、二月二十四日即チ其ノ誕
 日ヲ以テ毫モ抵抗ヲ受ケズシテセントニ入レリ、反民ノ首領等ハ其ノ良心ニ於テ罪
 業ヲ感ゼザルガ如ク毫モ逃匿セザリシガ、皇帝ハ嚴刑ヲ以テ之ヲ處斷シタリ、府中
 ニローランドノ鐘ト云フモノアリ、之ヲ打チテ府民ニ懲ヲ報シ、往々府民ヲシテ武
 器ヲ執リテ起タシメタリシガ、是ニ至リテ此鐘ヲ取去ラレタリ、市老及ヒ市民ノ重モ
 ナル者頸ニ掛クルニ糾ヲ以テシ徒跣行シテ赦免ヲ哀求スベキヲ命ゼラレ、人民ニ
 加擔セル市吏十九人ヲ斬首シ、其ノ他ノ市吏ヲ悉ク廢黜シテ之レニ代ルニ皇帝ニ忠
 順ナル者ヲ以テセリ、此ノ府ノ古來襲受シタル特權ハ之ヲ剝奪シ、府民ヲ鎮壓スルガ
 爲メニ新ニ築壁ヲ起シ、其ノ建築ノ費川ハ府民ニ課シテ罰金ヲ以テ之ニ當テタリ、

チヤールレス
ミランチ佛
國ニ與フル
ヲ許サズ

ウーデナルド、クールトレーノ二地モ亦此ノ反謀ニ與ミセシノ故ヲ以テ罰セラレ、
グントガ其ノ府ノ自由ヲ防衛スルガ爲メニ屢々戰ヒシモ、是ニ至リテ全く其自由ヲ
失ヒタリ、而シテ其ノ自由ヲ失ヒタルト共ニ商業ノ繁榮ハ此ノ府ヲ去リテアントウ
ニルプニ移リ、其ノ民權ノ精神ハ荷蘭ニ移リ、幾バクナラズシテ新アーテヴェル
〔按〕アーテヴェルドハ第十四紀ニ於テ愛國ノ名ヲ以テ
顯ハレタル「ゼームス」及ビ「ヒリツプ」父子ノ子ナリ、荷蘭ノ中ニ起リタリ
チヤールレスノ佛國ノ疆ヲ出テ、纔カニチーゼルランドニ入ルヤ、隨行シ來リタル佛
國ノ使節二人ハ、チヤールレスニ對シ其ノ佛國ヲ經行セシ報酬トシテミランチ其ノ主
フランシスニ與ヘンコヲ請ヘリ、チヤールレスハ此ノ要請ヲ聞キ心中憤怒シテ之ニ應
ヘテ曰ク、予チシテ先ツ自家ノ國事ヲ料理スルヲ得セシメヨ、予ハチーゼルランドニ
テ於テ我弟フェルザナンドニ會見シ之レト協議スルニアラザレバ此ノ事ヲ談ズル
能ハザルナリト、而シテ使者ノ強請スルニ及ビ斷然之ヲ拒絕シテ曰ク、足下等ガ予
ノ約束セリト云フノ事ハ、予初メヨリ之ヲ約シタルコトナシト、既ニシテグントニ至
リ再ビ此ノ問題ヲ議シタル所、チヤールレスハ明言シテ曰ク、予ハ決シテミランチ佛

モンモラン
シーノ失敗

國ニ讓與セザル可キナリ、予豈要地ヲ讓與シテ領國ヲ連接スルノ鍵鎖ヲ中斷スルコ
ト爲サンヤ、然リト雖モ予ノ長女ヲシテ佛王ノ子オルレアン公ニ許嫁シ、其ノ嫁資ト
シテフレミング領及ビホルカンヂーナ贈ルベク、或ハシヤロレイ或ハミランチ與フ
ベキナリト、而シテフランシスハ之ヲ肯ゼザリキ、双方ノ議此ノ如ク合ハズト雖モ
共ニニースノ休戰條約ヲ遵守スベキ旨ヲ明言セリ、而シテチヤールレスハフランシス
ガ其ノ要請ヲ更メテ再ヒ商議ヲ開クヤ否ヤヲ待ツコト數月ノ後、千五百四十年十月十
一日ブラツセルニ於テミランチ其ノ子フ井リツプニ與ヘタリ、
モンモランシーノ政界ハ此ニ至リテ全く破レ、其ノ身モ共ニ權勢ヲ失フニ至レリ、
千五百四十一年ノ初メニ於テモンモランシー朝廷ヲ去リテニコリアンニ退隱セザ
ルヲ得ザルニ至リタリ、然レモ其ノ退隱後六年ヲ經過スル間始終太子ヘンリトノ愛
顧ヲ受ケタリ、此ノ際フランシスハ快々トシテ失望シ、其ノ威權ノ挫折セルヲ嘆ク、
再ビ皇帝ト開戦セント欲シテ其ノ機會ヲ窺ヒシガ、久カラスシテ此ノ機會ヲ得タリ
キ、然リト雖モ吾人ハ此ノ事ヲ叙述スルニ先ダテ、暫ク日耳曼ノルーガー党及ビ

土耳其ノ事ヲ記セザル可カラス、此ノ二者ハフランシスガ今聯盟ト交誼トノ親密ナ
ランヲ求メタル所ナリトス、

保田久成 校閱

第十五篇終

近泰西通鑑

マイアー 著

肥塚龍 譯

第十六篇

千五百四十六年トレントノ教門總會及ヒルザルノ死亡迄日爾曼新教
徒ノ情况、土爾其ノ進撃、千五百四十四年クレスヒーノ和約迄日帝ト佛
王トノ戦争

法皇ポール
三世教門總
會ニ就テノ
舉動

法皇ポール三世ハ意ヲ寺院ノ平和ヲ立ツルコト、日爾曼帝ト佛蘭西トノ平和ヲ立ツ
ルコトニ用ヒ、教門總會ニ關スル事件ニ就キ調和ヲナサン爲メニ、日爾曼國內ノル
ザルノ宗義ヲ信スル王侯并ニ加特基宗ヲ信スル王侯ノ別ナク、皆之レニ使節ヲ遣ハ
シ、而シテ此目的ヲ以テ法皇ノ使節ベルゼリオハサキンニ於テルルザルニ面談
シタレヒ更ニ調和ノ効ヲ見ザリシ、千五百三十六年六月法皇ポールハ教令ヲ發シ、
翌年五月ニマンチユアニ於テ教門總會ヲ開ク旨ヲ通知シタレヒ、此總會ハ種々ノ理

由ニ依リテ英佛二國ノ王ノ抵抗スル所ト爲リ、又日爾曼國內ルーザル宗派ノ人ハ意
 大利ノ都府ニ往クヲ欲セザル理由ヲ以テ拒ミタリ、法皇ハマンチユアチ會場トスル
 ノ代リニヅイセンザチ以テシ、此地ニ法皇ノ代理人カムベツジオアレンドロ(此二人
 ハ此會議ヲ統理セン爲メニ命セラレタル者ナリ)ヲ派シ、現ニ數ヶ月間此ニ止マラ
 シメタレトモ、彼英佛ノ二王及ヒ日爾曼ルーザル宗ヲ信スル人々ガ此地チ會場トス
 ルヲ喜ハザルハ、マンチユア會場ヲ喜ハザルニ異ナラズ、斯ク紛議アル間ニ日爾曼
 帝ト佛蘭西ハ戰爭ヲ起シタリシカバ、此ヅイセンザチノ教門會議ニハ一人ノ「プリ
 ート」(按、プリートトハ羅馬宗有位ノ僧ニシテ彼モ出席スル者アラザリシ、斯クシ
 ノ教門總會ノ席ニ列スルヲ得ル者ナリ)ヲ改革者トハ新教ヲ主張シ舊教ヲ排
 テ改革者トハ新教ヲ主張シ舊教ヲ排撃スル者ヲ指ス以下之ニ倣ヘ)等今ハ此ノ會議ノ全ク不適當ニハ非
 サルヤノ疑議ヲ容ル、トトナリ、且ツ要求シテ曰ク、此會議ハ古時ノ會議ニ倣ヒ、少
 クモ有位ノ僧各州ノ王、及ヒ各州ノ代理官ヲ以テ組成セザル可カラズト、又曰ク法
 皇ハ此會議ニ於テ裁判官トシテ出席セズノ、宜ク會員ノ一人トシテ出席スベシト、
 日爾曼皇帝ノ法皇ノ權力ヲ支持スルコトニ刻苦スルハ、却テルーザル信仰ノ徒ニ一層

分離ノ情ヲ増サシメタル者ト謂フ可シ、此會議ヤ帝ハ顧問官ヘルドチ遣ハシ、法皇
 ノ使節ゾオルスチウスガスマルカルドノ同盟者(按、新教黨ニ對シテ提出セル説ヲ贊
 成セシメシカ、ヘルドノ所爲ハ頗ル不穩ニ出テ、會場ニ於テ發シタル論議ハ狂暴ニ
 シテ且ツ不満足ノ者ナリキ、其後ヘルドハルーザル宗派ノ人ヲ排撃シツ、國中テ遍
 歴シ、終ニ加特基同盟ナル者ヲ組立テ、之ヲ呼ンテニウレムベルグノ神聖同盟ト曰
 ヘリ、千五百三十八年六月)此神聖同盟ナル者ハ十年間ノ年限ヲ定メテ設立セシ者
 ナルガ、其同盟員ノ重ナル者ハ即チフェルゲナンド王、サキソニ一侯シヨルジバウ
 エリヤ諸公メンツ及ビサルツブルグノ二大僧正及ヒ其他二三ノ加特基信仰ノ公侯
 ナリ、此同盟ハ其後千五百三十九年五月二十日)トレドニ於テ日爾曼帝ノ確認ヲ經
 タル者ナルガ、ニイスニ於テ日爾曼帝チヤーレスト佛王フランシスノ間ニ決定シタ
 ル休戦ノ爲メニルーザル宗派ノ人ニ取ツテハ一層恐怖ス可キ者トナレリ、
 千五百三十九年ノ春フランクフォルトニ於テ新舊二教徒ノ會議ヲ開キシガ、此時日
 爾曼帝ノ一方ニ於テハ「パラチン」撰學侯(解ハ首篇ニ見ユ)チ出シ、ブランドンホルグ

ノ撰擧侯 ヲアキム二世ハスマルカルド同盟ノ代理員トシテ出席セリ、抑々此ヨアキム二世ハ千五百三十五年ブランダンプルグノ撰擧侯トナリシ者ニテ其ルーザル派ニ熱心スルノ篤キハ、其父ガ曾テ舊教ニ熱心ナリシト異ナルコトナシ、此フランクフオルトノ會議ニ於テ十五箇月間一種ノ休戰約定（按）此間宗教ノ爭論ヲ中止ノ如キ者ナルノ謂ヒナランヲ修整シ、此約定ニ依テニウレムベルグニ開キタル聯邦會議ノ命令ト千五百三十二年ヲチスボンニ於テ發シタル平和ノ勅令ハ、次回ノ聯邦會議迄有効ノ者トセラレ、其間帝國裁判所ニテ宗教事務ヲ裁判スルノ權力ハ一時中止スルコトナレリ、此十五箇月ノ間ニ新舊兩教徒ヨリ撰ビ出シタル若干ノ卓越ナル學士等相會シテ、親切ニ宗義ノ爭點ヲ討論シ、之レガ報告ヲ次回ノ日爾曼聯邦會議ニ呈出スベキコトナシタリ、法皇ハ此會議ヲ以テ羅馬朝廷ノ權力ヲ傷ケタル者トシ、其約定ヲ無効ノ者トナシタレトモ、然レトモ其効力ハ終ニ持續シタリ、此時ニ當リルーザル派ハ大ニ勢力ヲ得ルノ一事ヲ引起シタリ、千五百三十九年四月十七日サキソニー侯ジョルジノ死亡是ナリ、前ニモ記セシ如ク侯ハ非常ニ新教ノ反對者ニアリ、而シテ侯ノ二子ハ共ニ侯ニ

先ツテ死セシガ故ニ、侯ハ遺言シテ曰ク、我ノ兄弟ニシテ且ツ相續者タルヘンリー（新教熱心ノ人ニシテ信神者ト呼ヒ做セシ者）カ宗教上若シ改革ヲ行ハントスル舉動アラバ、日帝及ヒフエルシナンド王（按）西班牙ハ我諸領地ノ政務ヲ攪ルベシト、此諸領地ハ讀者ノ注意シテサキソン撰擧侯國即チサキス、ウイツテンベルグト區別セサル可カラザル者ニシテ、サキソン家ノ幼族即チ「アルベルト」家ニ皈入セリ此、アルベルト家ハ、ミスニヤツリンシヤニ於テ廣大ナル領地ヲ有シ、且ツ此内ニハライプシツクドレンスデン等ノ諸都府ヲ有セリ、斯クノ如キ事情アルニモ拘ハラズ、ヘンリーハ一ノ抵抗ニ遇ハズシテ此諸領地ヲ相續シ、而シテ直チニ「アルベルト」家所領ノサキソニー内ニ新教ヲ引入スルコトヲ始メタリ、ルーザル及ヒ其他有名ナル新教徒ハライプシツク府ニ招聘セラレ、直チニ加特基ノ禮拜ヲ廢セシガ、此府ノ人民ハ心中既ニ久クルーザルノ宗派ヲ信仰シタルガ故ニ、此舉ニ向テ大ニ満足ヲ得シカバ、今ハバルチック海ヨリライン河ニ至ル迄、殆ント新教主義ノ蔓延セザルナキニ至レリ、フランクフオルトノ約定ニ從ヒ、千五百四十年十一月加特基教ノ學士ト新教ノ學士

ウオルムス
ニ於ケル新
舊二教徒ノ
爭論

「ゼシユイッ
ト」教派ノ設
立

トノ討論テウオルムスニ於テ開キシカ、此會ヤ法皇ノ公使マロチ及ヒ近頃日帝ノ顧問官ニ命セラレシグランヴェルノ二人出席セリ、(グランヴェルハ彼ノ過激ヲ以テ事ヲ誤リタルヘルドノ代リニ顧問官ニ命セラレタルナリ)其當日ノ討論タル加特基ノ一方ニ於テハ博士エバン重モナル辨士トナリ、新教徒ノ一方ニ於テハメランクトン重ナル辨士トナリ、孰レハ優劣アリ共思ハレザリシガ、論本源ノ罪惡ニ涉ルニ及ブヤ、紛紜錯綜シテ分解シ難ク、之レガ爲メグランヴェルノ忠告ニ依リ、日帝ハ翌年ノ春ラチスボンニ開ク日爾曼聯邦會議ノ日ニ至ル迄其討論ヲ遷延セシメタリ、抑々當年ハ「ゼシユイッ」(按「ゼシユイッ」ハ羅馬教ノ設立ヲ以テ世ノ紀念トナレル年ニシテ之レガ發起者イグナチウス、ロヨラハ千五百三十九年ニ於テ其畫策ヲ羅馬法皇ノ朝ニ獻シタル者ナリ、法皇因テ三人ノ大僧長ヲ撰ビテ之ガ調査委員トナシ利害ヲ吟味セシメシガ、此委員モ其畫策ヲ可トセシカバ、之レニ由リテ法皇ヲシテ之ヲ認可セシメタルハ、此教派ガ羅馬教ニ默從スルノ誓ヲ爲スニ因ル)法皇ハ千五百四十年九月二十七日法赦ヲ發シ此教派ノ設立ヲ許シタリ、然レ千五百四十一年ノ初メニハ此

ラチスボン
ノ聯邦會議

教會員僅カニ十人ノミニテアリキ、

千五百四十一年四月ラチスボンニ開キタル聯邦會議ニハ日帝親臨シテ開場式ヲ行ヒタリ、敬神教會員ノ一人ナル大僧長コンタリニ(宏才博學ニシテ宗教熱心ノ人ナリ)ハ法皇ノ代理トシテ出席シ、ルーザルモ亦出席セリ、此會ヤ大僧長コンタリニハ大ニ新教徒ニ向テ讓與スル所アリシガ、幾クモナク此討論ノ無効(常ノ如ク)タルヲ昭然タリケレバ、帝ハ七月二十八日會議解散ヲ命シタリ、佛王フランシス一世ハコンタリニ爲シタル讓與ヲ不當トナシ、之ヲ法皇ノ諸公使ニ彈劾シタリシガ、此讓與タル羅馬ニ於テモ多少ノ嫌疑ヲ受ケタリ、是ヲ以テ法皇ハ世間ノ會議ハ宗門ノ事物ヲ論スルニ適セザリシトノ口實ヲ以テ、此會議ニ爲シタル一切ノ行爲ヲ無効ノ者トナシタレバ、新教徒ト舊教徒ノ爭ハ、此場合ヲ以テ前後コナキ調和ノ色ヲ顯ハシタリト云フ、斯ク數回ノ會議ヲ爲セシモ常ニ其効ヲ見サレバ、今ハ法皇及ビ法皇ノ代理人ヲ始メ、パウエリヤ國內ノ諸侯伯ハ日帝ニ迫ツテ説ヲ爲シテ曰ク、最早此上ハ武器ノ力ニ依ツテ新教徒ヲ擊破スルヲ必要トナスト、然レ日帝チヤールスハ當時尙ホ

土爾其ニ對シテ新教徒ノ力ヲ尽サシメザル可カラザルノ必要ヲ有スルカ故ニ、法皇等ノ勸メニ從フ能ハズ、新教徒ヲ待スルニ一層寛大ナル處置ヲ以テシ、且ツ我ハ斯ル經畫ニ要スル貨財ト勢力トヲ有セズト答ヘタリ、乃チ令ヲ發シテ曰ク宗教爭論ノ事ハ、先年ニウレムベルグ宗門和約ニ於テ定メタル有様ト殆ント同一狀ニ從ヒ事ヲ處スヘシト、

土爾其人ノ外ニ、日帝ニ取ツテ一層接近シ、タル敵一人アリ、即チ有力ナルクレーブス兼ゲルデルランド侯是ナリ、是亦帝ヲシテ此時ニ當リテ新教皈依ノ王侯ノ歡心ヲ買ハシメタル原因ナリ、千五百四十年帝チヤーレンスガゲント府ヲ討シ、帝トフランシストノ間ニ新戰爭ノ起ラントスル後此二君主ハ共ニウイリアム侯(按)クレーブスチ己レニ同盟セシメント計リ、而シテフランシスハウイリヤムヲ誘フニ若シ侯ニ我ニ同盟スルアラバ我ハ我姪女ゼーン(ヘンリー、ダルブレットノ一女)ヲ卿ニ妻ハスベキヲ以テシタリ、此時佛國朝廷ハ既ニナブアル國ノ遺領ヲ佛國ニ併ハスルノ計畧ヲ爲シタル也又日帝チヤーレンスハ當時尙ホラチスボンニ滯在中ナリシガ、帝ハクレ

日帝ハブレ
ンデンボル
グ侯及ヘッ
ス侯ト同盟
ス

ーブス侯ト種々ノ關係アルノ故ヲ以テ、六月十三日ヘッス侯ヒリツプト一ノ條約ヲ結ヒタリ、抑々此ヘッス侯ハ一時ゾーゼルランドノ女太守マリート懇懇ノ交際アリシ人ナリ、而シテ此女太守ハ新教徒ニ左袒スルノ嫌疑ヲ受ケシ人ナリ、又此女太守ハ佛蘭西ニ反對スル政畧ヲ取り且羅馬ニ反對スル政畧ヲ取りシ人ナレト其一ノ希望ハ日耳曼全國ヲ日帝チヤーレンスノ一統ニ歸セシムルニ在リ、却テ詭クチヤーレンスハヒリツプトノ條約ニ依リ、ヒリツプニ許スニ彼ガ従前オーストリヤ家ニ對シテ犯シタル罪ヲ赦シ、亦ヒリツプノ一方ニ於テハ向後日帝ノ政治黨派(按)宗教黨派ト別ニ爾カ云ヒトナリ、スマルカルドノ同盟ガ英國或ハ佛國ト結ビタル一切ノ同盟ニ反對スベシ、殊ニクレーブス侯チスマルカルドノ同盟ニ入ラシメザルベシ、又如何ナル場合タリトモクレーブス侯チ支持セザルヘシ、加之若シ日帝ニシテ他ヨリ攻撃ヲ受ケ燃眉ノ急アラハ自カラ出テ、帝ヲ援助ス可シトノ約ヲ以テシタリ、チヤーレンスハ又其年ノ七月ニ於テブランデンボルグノヨアキム二世ト一ノ條約ヲ結ビ、此條約ニ依リテヨアキムハクレーブスノ事務ニ就テ日帝ニ左袒シ、而シテ現ニ爭フ所ノ領地ヲ

回復スルコトニ於テ帝ヲ援クベキコト約シ、其他フエルヂナンド王(按)日帝ノ弟撰擧ナリ、(今再ヒ紛争ヲ起セシ所ノ者)ノ疑問ニ就テ日帝ニ左袒ス可キ旨ヲ約シ、佛蘭西ノ爲メニスル一切ノ援助ヲ絶チ、而シテチャーレンスニ保証スルニ己レカ畢生ノ信用ヲチャーレンスニ致ス可キ旨ヲ以テシタリ又一方ニ於テ日帝ハブランデンボルグ侯ニ教門總會ノ開ク迄又ハ日爾曼聯邦會議ガ從前ヨリ一層善美ナル決議ヲ爲スニ至ル迄ハ、其領内ニ於テ新教ヲ遵奉スルコトヲ許シタリ、斯ノ如クシテブランデンボルグ領内ニ立タル新教禮拜ハ一分法律上ニ効力ヲ起シ、侯モ亦欣然トシテ從來爲セシ所ノ者ヲ其マ、ニ存シ亦スマルカルドノ同盟ニハ聯合セザルヘシト決セリ、

ヘツスノ領主ヒリツプナシテ日帝ト此條約ヲ結ハシメタルハ、チーゼルランドノ攝政(按)「マリー」女后ヲ指ストヒリツプト親善ノ情アルガ爲メノミナラズ、尙ホ自餘ニ原因アリ、元來人ノ性質タル戀慕ノ情ト宗教信仰ノ熱心ト連結セラル、者ナルガ、ヘツス

侯ヒリツプモ此等ノ性質ノ一ヲ有シタリキ、而シテ侯ノ婦クリスチーン(サキソニ一侯シヨルシノ女)ハ侯ニ嫁シテ既ニ數人ノ子ヲ擧ゲタレトモ、其性質ト云ヒ容貌ト

ヘツス侯ニ妻ヲ娶ル

云ヒ侯ノ意ニ満足セザリシガ故ニ、侯ハ此家内ノ不快ヲ慰スルニ法律背違ノ色情ヲ以テセントシタリ、侯ハ數々不法ノ色情ヲ縱ニシテ數々後悔シタリシガ、キタ惡魔ト此争ヒテ爲ス間ニ終ニ一ノ拍和ヲ爲スノ場合ニ遭遇シタリ、蓋シ斯ノ如キ拍和ハ侯ト相類シタル性質ノ人ノ前ニハ往々出現スル者ナリ、侯ノ意謂ヘラク我ノ罪惡ハ法律ト云ヘル外套ニテ掩フヲ得ヘシ、我ガ買妾ノ臭氣ハ婚姻ト云ヘル神聖ナル名ヲ以テ清ムルヲ得ヘシト、是ヨリ先キ侯ハロクリツツニ於ケル已ガ姉妹ノ宮廷ニテフローレオン、マルガレタヴオン、デル、サールノ美色ヲ見テ神飛ヒ魂迷ヒ其痴情ニ勝ヘサルコトアリキ、然レ此少艾ハ母ノ誘導ニ從ヒ一切侯ガ不法ノ戀慕ニ抗シ其求メテ容レザリシ、是ニ於テ侯ハ其宿望ヲ遂ント欲シ乃チ自ラ經文ヲ搜索セシニ、舊約全書ニ於テ一夫衆妻ヲ正視スル如キ章句アルコト容易ニ檢出シタリ、侯ノ夫人クリスチーンハ柔順温厚ノ性質アル如ク見ユル人ナルガ、侯ガ彼少艾ト結婚セントスルヲ見テ毫モ嫉妬ノ色ヲ顯ハサズ、却テ手書ヲ草シテ侯ニ有禮ノ承諾ヲ與ヘ、只自己ニ屬シタル權利ト己ノ産ミタル諸子ノ權利トノミハ此新婚ノ後ト雖モ變セサル可シト云フ

新教學者へ
ツス侯違法
ノ婚姻ヲ承
諾ス

箇條ヲ存シタリ、ヒリツプハ斯ノ如ク經文中ニ見出セシ所アリト雖モ尙ホ宗教學士
ノ承諾ヲ得サレバ心ニ安ゼサル所アリ、即チ宗教改革ノ法皇トモ云フベキル^ルザル
及ヒメラントン^トテ宗學ノ本源ナリトシテ之レニ承諾ヲ請フタリ、此承諾タル^ルル
ザル等ニ取ツテ甚ク迷惑ト謂フ可シ、其故ハ若シ之ヲ承諾セバ二妻ヲ娶ルヲ許スノ
恐レアリ、若シ之ヲ許サ、レバ、ヘッスノ領主ノ如キ強盛ニシテ且ツ有力ナル新教
主張者ヲ失フノ恐レアリ、而シテ後者ハ前者ニ比スレハ一層恐ルベキ者ナリ、ル^ル
ザル、メラントン^トンガヘッス侯ノ請願ニ答ヘタル書中ニハ、此請願ニ反對シテ議論ス
ルヲ得ベキ充分ナル道理ヲ含蓄シタル也、此二人ハ尙ホ之レガ承諾ヲ拒ム能ハズ、
只懺悔証ト極メテ秘密ノ命令ヲ附シテ終ニ一夫二妻ノ不法ヲ犯ス仲間トハナレリ、
此承諾タル固ヨリ不法ヲ免レザレ也、吾人今法皇クレンメント七世ガ英王ヘンリー八
世ニ助言スルニ側室ヲ娶ル可シト云ヒシ事實ヲ以テ、此二人ノ新教學士カ爲シタル
事跡ニ比セバ其間ニ大差ナキ者ト思考セリ、然レ一夫二妻タル只道德及ヒ宗教上ノ
罪ナルノミナラズ、亦法律上ノ罪ナレバ、此領主ノ心中ニハ又恐怖ス可キ一事ヲ生

シタリ、即チ日帝及ヒ日爾曼帝國ノ法廷ガ之ヲ以テ侯ヲ追躡スルノ新手段トナサン
トチ恐ル、ナリ、此恐懼アルガ故ニ侯ハ始メサキノ^ニ撰舉侯ト一層親密ノ同盟
ヲナサントチ勉メ、若シ此撰舉侯ニシテ報酬トシテ此新婚(即チ千五百四十年三月
ニ實行シタル者)ヲ支持スルトチ肯セバ、ヒリツプハスマルカ^ド同盟ニ付テ箇條
ヲ具ヘザル事物^シジョン、フレデリック^ノ外戚クレ^ープス侯ノ事件ノ如キ)ニ關シテ
ハサキノ^ニ撰舉侯ヲ援助ス可シト言ヒタリ、然レ此撰舉侯ノ宗教熱心ハ、斯ル不
法ノ約束ヲ爲スヲ禁シタルガ故ニ、ヒリツプハ前ニ云ヒシ如ク身ヲ日帝ニ投シタル
ナリ、勿論此婚姻タル秘スルヲ得ベキ者ニアラザレバ、時ヲ經スシテ世ノ知ル所ト
ナリ、之レガ爲メ非常ノ誹謗ヲ起セリ、當時メラントン^ハハゼ^ノニ於ケル聯邦
會議ニ出席セントシタリシガ、己レモ此婚姻ヲ承諾シタル者ノ一分ナルヲ以テ抑鬱恐
怖措ク能ハズ爲ニ危篤ノ病ヲ引起スニ至リシカバ、ル^ルザル(メラントン^ニ比スレ
バ差ヤ大膽ナル人)ハ其ヲシテ安穩自若ナラシメンカ爲ニ畢生ノ心力ヲ勞シテ之ヲ
慰諭シタリト云フ、

ラチスボンノ聯邦會議タル、日帝チヤーロスノ舉動甚々寛和ナリシガ爲メニ、新教徒ノ心ヲ和ケ、土爾其征討ニハ帝ヲ援助スヘキコトヲ約シ、此等ノ新教徒ハ皇帝ノ親征アランコトヲ望ミタリ、然レ當時日帝ハ亞非利加ニ向テ他ノ遠征ヲ企テ、アルシールスノ大將ヘツサン、エガ(ヘーラツジシ、パーバロツサニ隨從シタル割勢異教ノ人)ガ伊太利西班牙ノ海岸ニ於テ恐ル可キ却畧ヲ爲スコトヲ制セントスルノ最中ナレバ、帝ハ土爾其遠征ノ都督ヲ其弟フェルヂナンドニ委任シタリ、前章ニ記シタル如ク千五百三十三年歐洲諸國ト土爾其朝廷ト平和ノ約ヲ結ビタレト、此和約ヤ日帝ノ關ラザル所ニシテ、事物ノ未タ調定セザル者多シ、是ヲ以テ千五百三十四年ノ初コルチリウス、ジュプリシウス、セツベルハ土京コンスタンチノープルニ派遣セラレ、若シ爲スヲ得バ前回ヨリモ一層満足ス可キ條約ヲ結ハントシタリ、而ルニ彼レ土京ニ至レバ、事物ノ情態大ニ前日ニ同シカラス、アロイシオ、グリツチハ其權勢ノ大部分ヲ失ヒ、イブラヒイムノ勢力頓ニ墜ントシ、之レニ對シテ恐怖スヘキ黨與(パーバロツサ)及ヒ土爾其朝廷ノ譯官ナルジュニスベーノ二人之レガ巨魁タリ(土爾其ノ内閣ニ

西班牙王土帝ト協議ス

起リタリ、之レガ爲メセツベルガ經畫モ其効ヲ見ルヲ得ザリキセツベルガ最後ノ謁見ニ於テ、土帝ハ數々言ヲ爲シテ曰ク、ホンガリーハ我ニ屬セリ、又曰クゼナス、ラー(ホンガリー)王ジョシオンヲ指ス、ハ我ノ臣僚タルノミ、其爲ス所凡テ我ノ代理タルニ過キズ、卿歸朝セハ宜クフェルヂナンド王ニ告クベシ、王ハホンガリー國王ニ對シテ不軌ヲ圖ル勿レト、其後幾クナラズシテ土帝ハ直チニグリツチヲ全權大臣トシテホンガリー國ニ派遣セシメ、彼レ七千人ニ將トシテトランシルヅアニヤニ進入シタレト、其ザポリヤ(按、ホンガリー)ノ黨派ノ爲メニ惡マレ且疑ハル、コハ、更ニフェルヂナンドノ黨派ガ彼ヲ惡ミ彼ヲ疑フニ異ナルナク、四方ノ兵士ハ武器ヲ取ツテ起リ、グリツチノ小軍ヲ殲シ、グリツチヲ捕ヘテ之ヲ劊手ニ交付シタリ、此所爲タル自然ニ土帝ソリマンノ怒ヲ引起シタレバ、土帝ニ對シタル爭論ハ、到底平和ノ局ヲ結ブノ望ナキニ至リタリ、此變ヲ聞キ、フェルヂナンドハグリツチヲ死罪ニ處シタルハザポリヤニシテ己ハ此暴殺ニ關係ナキ旨ヲ陳述セン爲メ、公使ヲ土國大臣イブラヒイム及ヒ土帝(當時バグダットニ在リ)ニ派遣シタレト、土帝ハ此陳述ヲ承諾セズ、フ

エルヂナンドニ求ムルニ賠償ヲ以テシタリ然レモザボリヤガ土爾其朝廷ノ信用ヲ失フニ至リシモ實ニ此時ヲ以テ始メトス、是ヨリ先キ、土帝ハグリツチ殺害ノ事情ヲ審査セシメン爲メニ廷臣シユニスベークホングリニ發遣シタリシガ、フェルハナンド王ハ之レニ陷ハシムルニ年金ヲ與フルノ約ヲ以テシケレバ、シユニスベークノカ爲ニ籠絡セラレ、而シテザボリヤハ百二十万「シユケツト」ノ罰金ヲ課セラレタリ、此罰金ハ土爾其朝廷ニ拂フ可キ年金ノ殘餘ト、ザボリヤガ奪フタルグリツチニ屬スル財産ニ充ツル者ナリ、シユニスベーク土京ニ歸ルノ後久シカラズシテ、大臣イブラヒムハ土爾其朝廷ノ或ル隱謀黨ノ爲メニ殺害セラル、物情斯ノ如クナル間ニ、土爾其ノ遊擊兵ハ漸次ニボスニヤヨリイスジークノ地方ニ向テ進軍スルガ故ニ、フェルハナンド王ノ大將カツチアテルハ、此土兵ヲ中途ニ防ン爲メニ、幾ント二万四千ノ兵(多クハ日爾曼人ナリ)ヲ帥ヒテ進軍シタリ、而ルニ此兵ハ土爾其騎兵ノ爲メニ圍マレシガ故ニ餘儀ナク不幸ナル退軍ヲ爲シ、而シテ悉ク其砲銃ヲ失ヒ、(千五百三十六年十一月)其兵士ハ潰散シ幾ント収拾ス可カラサルニ至レリ、

土國ノ兵壞
國ノ兵ヲ破
ル

ザボリヤト
ノ和約

此役ノ後ハ、暫時重大ナル戰爭ナシ、千五百三十八年、日帝及ヒフェルヂナンドハホングリ王ザボリヤト平和ノ約ヲ決定セシカ、此約ニ依リザボリヤハ土帝ノ信用ヲ失フトナリタレモ、之レト同時ニ日帝及ヒフェルヂナンドハザボリヤト己レノ兄弟(即チ一國ノ王トスルコトナリ)トスルコト承認シ、當時ザボリヤガ所有シタル領地ハ皆彼レニ與フルコト許シタリ、然レモザボリヤノ死後ハ其子ヲ遺存スルト否ラザルトニ論ナク、其領地ハ悉クフェルヂナンドニ歸入スベキ約條ヲ立テリ、千五百三十九年九月ヒローニマス、ラスクジ(今ザボリヤノ臣下タルコト止メテフェルヂナンドノ臣下トナリシ者)ハフェルヂナンド王ノ公使タル命ヲ帶ビテコンスタンチノーブルニ進入セリ、然レモ土帝ト未ターノ條約モ決定セザル前事物ノ狀況全ク變換セリ、是レホングリ王ザボリヤノ死セシニ由ルナリ、(千五百四十年七月廿一日)ザボリヤハ前年波蘭王シシスモンド一世ノ女イサベラト結婚セシガイサベラハザボリヤノ死ニ先タツコ僅カニ九日一男ヲ産メリ、而シテ此一男ノ生ル、ヤ忽チ此幼者ヲ愛護セントスルノ黨派ヲ生シ、之レガ巨魁ハグロツスワールテンノ僧正マーチニウツジ

ザボリヤ王
ノ死

(即チザボリヤノ兄弟シエルジ)トス、然レ以前ニザボリヤノ支保者アリシグレゴリ
 I、フランシパニピーター、ペレニ一其他ノ者ハ皆フエルヂナンドチホンガリー王ト
 スルコチ承認シ、斯ノ如ク物情洵々タルガ故ニ、今ハ佛蘭西ノ陰謀黨再起シ、從前埃
 地利家ニ向テ佛王フランシスノ友愛ノ政畧ハ其終ヲ告クルニ至レリ、而シテ在土京
 佛國公使ハ在土京ホンガリーノ公使ヲ誘導シテ、ホンガリーノ王位空虛トナル場合
 ニ於テハオルンヤン侯チ其王ト撰定センコチ土帝ニ請ハシメタリ、彼ノラスクジ今
 ハ捕ハレテ獄ニ下サレ、土帝ハフエルヂナンドニ對シテ開戦ヲ布告シ、土帝親カラ
 ホンガリーニ進軍シ、千五百四十一年八月二十五日恰モ無人ノ地チ行クガ如ク(ラ
 チスボンノ聯邦會議ニ決定シタル軍勢ノ大將トシテフオルステンベルグ侯ノ到着
 スル以前ニ)ブダニ進入シタリ、是ニ於テホンガリーノ首府ニ三條尾ノ旗(按土國ノ
 總督ノ
 建ツル 旗)チ樹テ、土爾其政府チ建立シ、其重モナル寺院ハ回教寺院ニ變シブダハ殆ン
 ト一百五十年間回教徒ノ掌有ニ歸シ、ザボリヤ王ノ夫人及ヒ幼兒ハ宮殿ヨリ放逐セ
 ラレテタイス河ノ前岸ニ於ケルリツバニ送遣セラル、ノ不幸チ見ルニ至レリ、土帝

土帝ブダチ
 畧取ス

ソリマンハ三週間ブダニ駐紮セシガ、此間ニフエルヂナンド王ヨリ來リタル他ノ公
 使チ受ケ無禮ニ之チ驅逐シ、夫ヨリ道チ本國ニ取り、十一月二十日コンスタンチノ
 ーブル府ニ歸着セリ、是ヨリ先キ、フエルヂナンドハ土廷ニ申告スルニホンガリー
 チ土國ノ朝貢國トナサンコトチ以テシタレトモ、土帝ハ此申告チ承諾セザルノミナラ
 ズ、尙ホ年々埃國ヨリモ土廷ニ向テ朝貢ノ禮チ取ルベシト命ジタリ、
 吾人ハホンガリーノ最後ノ運命迄其實況チ續記スベシ、抑々土爾其ノ連戰連勝ノ勢
 タルヤ、日爾曼諸邦チシテ非常ノ恐怖チ起サシメ、千五百四十二年ノ初メスピール
 ニ於テ開キタル聯邦會議ハ、平生ニ似サル活潑ナル舉動チ爲シ、四万ノ歩兵八千ノ
 騎兵チ發スルコチ議決シ、フランデンブルグノミアキム二世チ以テ之レガ都督トナ
 シタリ、ミアキム二世ハ此兵士ノ一部チ提ケテベツス府ニ進軍ス、ベツスハ則チ八
 千ノ土兵屯守スル所ナリ、ミアキムハ此都府チ攻ムルニ大砲チ以テシ、之レニ次グ
 ニ接戦チ以テセントシタレトモ、其師ユル所ノ兵ニ満足ス可キ給料チ與ヘザルガ爲メ
 内亂ノ兆候チ顯ハシタレバ、此ニ久シク止ルチ得ズシテ餘儀チク退軍スルコトナレ

土帝再ヒホ
ンガリーニ
侵入ス

リ、千五百四十二年土帝ハ再ヒホンガリーニ進軍シ、ブダニ暫時滞留ノ後、グラント
園メリ、グラントノ屯兵ハ勇奮健闘シ、寺院ノ消金十字架砲丸ノ爲メニ打碎セラル、
迄ハ、敢テ一步モ退カサリシガ、此十字架ノ砲射ニ遇フヲ見テ宗教惑溺ノ恐懼ヲ生
シ、八月十日降ヲ土軍ニ納ル、ニ至リタリ、タラスツールワイセンボルグモ日ナラ
ズシテ陥没セシガ、スツールワイセンブルグノ防戦ハ殊ニ慘酷ヲ極メ、殆ント住民
ヲ屠戮シテ子遺ナキニ至リ、千五百四十四年ヱイツセグラツドモ土軍ノ爲メニ取
ラレシガ、此地ハホンガリー國內ニ於テ最モ古ク最モ華麗ナル王地ナリ、此地ノ陷
落トトルナ近傍數城ノ陥没ノ後、土軍ハクローシヤ斯拉ボニヤニ進入セリ、フェル
ヂナンドノ兵モ幾分ノ勝利ナキニハアラサレ、全局ヨリ之ヲ見レバ到底望ヲ屬ス
ルニ足ル者ナシ、之レガ爲メ千五百四十五年フェルヂナンドハブダニ於ケル土爾其
ノ總督ト休戰條約ヲ決定シ、夫ヨリ講和ノ條約ヲ調整センガ爲メニ、公使ヲコンス
タンチノーブルニ派遣シ、種々遲緩ナル評議ヲ爲セシ後、土帝ハ終ニ五ヶ年ノ休戰
條約ヲ承諾シ、千五百四十七年六月十三日フェルヂナンドガ年々土廷ニ三万シユ

土帝トノ休
戰約定

カツトノ貢物ヲ納レテ、從前ノ有様ヲ其儘保存シ置クトナレリ、是當時土帝ハ方
ニベルシヤニ向ヒ兵ヲ發セントスルノ目的アレバナリ、土爾其ニ從屬シタル他ノ領
地ト同様ニホンガリー國內ニ土國ガ畧取シタル土地ハ、土爾其ノ分地法ニ依テ區分
セラレ、最初ハ其數十二區ニテアリシ、即チブダグランスツールワイセンブルグモ
ハツスフーンフキールシエン等是ナリ、

日帝チヤ
ールスアル
シ
遠征

土帝ソリーマンハ斯ノ如クホンガリーニ於テ百戰百勝ノ戰ヲ爲ス間ニ、日帝チヤ
ールスガアルジュールスニ對シテ久ク企テタル遠征ハ甚タ土帝ノ勝利ニ反對シタル結
果ニ遭遇シタリ、蓋シ帝チヤシテ此ニ至ラシメタル者ハ先年アルジュールス遠征ニ帝大
ニ勝利ヲ得タルヨリ、此等ノ海岸征討ニ心ヲ傾クルニ至リシナラン、帝ノ今回ノ遠
征タル其海軍大將アンドリュウドリウノ諫言ニ逆ヒタル者ニシテ、此諫言トハ之ヲ征
伐スルニハ時候已ニ晚シト云ヒシト是ナリ、日廷ノ軍艦ニハ幾ント二万二千人ノ精
兵トセント、シモンノ武士二百人ヲ乗セタル者ナルガ、此軍艦ガアルジュールスノ近
海ニ來ラサルニ、既ニ十月二十日トハナリタリ、此兵士ノ一部分ノミ漸ク上陸シタ

ル時、猛風起リ大雨益テ傾クルノ勢ニテ、陣幕之レガ爲メニ吹キ去ラレ、火藥復々用
 フ可カラザル者トナリ、陣營ハ變シテ水澤トナリ、怒濤激浪之レニ次テ起リ、軍艦ノ
 大部分ヲ破壊シ、兵士チシテ糧食ニ乏テ告クルニ至ラシメタリ、斯ノ如キ危急ノ時
 ニ際シテヤーレンスハ剛氣撓マサルノ壯志ヲ顯ハシタリ、其故ハ彼レ帝者ノ身ト雖モ
 最モ鄙賤ナル兵士ダモ堪ヘ難キ危難困苦ヲ冒シ、其間大將タルニ羞テザル最上能力
 ナ顯ハシタルコト是ナリ、激浪ノ爲メニ散乱シタル船艦再ビ一處ニ集合シタル時、チ
 ヤーレンスハ命シテ悉ク馬ヲ海中ニ投ゼシメタリ、是レ馬ヲ惜マザルニアラザレモ、
 斯クモザレバ船中人ヲ容ル、ノ室ナキニ由レリ、然モ此命令未タ全ク行ハレザル間
 ニ第二ノ風浪來リ、再ヒ其船艦ヲ散乱シタルニ、今ハ如何ンシテ兵士チ本國ニ歸ラ
 シム可キヤノ疑問トナレリ、然モ惡疫流行ノ爲メニ兵士ノ過半ハ死亡シタルニ、此
 疑問ハ忽チ一決スル所トナレリ、帝チヤーレンスハ兵士ニ後レテ乘船シ、許多ノ危難
 ニ遇着レタル後、終ニ十二月一日其殘兵ヲ帥ヒテカータゼナニ着港シタリ、之レチチ
 ヤーレンスガアルジョールス遠征ノ結果トス、

佛王日帝ノ
 敗軍ヲ聞テ
 歡ブ

佛王フラン
 シス言ヲ全
 權公使ノ殺
 害ニ籍ク

日帝チヤーレンスノ敗報ハ佛國朝廷チシテ限リナキ歡喜チ生セシメ、此時コソ佛國ニ
 取ツテ新戰爭ヲ開クノ好機ヲ得タル如ク見ヘ、而シテ前年ノ夏ニ起リタル事變（按）
 下文ニ云フ所ノ佛國公使「リコン」等ガ「ミラン」太守ハ、此新戰爭ヲ公告スル口實ヲ
 ノ旗下ノ爲メニ殺害セラレタル事變ヲ指スナラン、此新戰爭ヲ公告スル口實ヲ
 與ヘタリ、是ヨリ先キヴェニスト土廷トノ和約決定スルヤ、否直チニ在土京佛國
 公使リコンハ新命令ヲ受クル爲メニ本國ニ召喚セラレシガ、千五百四十一年六月
 再ビ土京ニ派遣セラレ、此時ヴェニスニ於ル佛國公使タル「コナ」命セラレタルフ
 ゴント云ヒシゼノア人アリ、リコン這回ノ土爾其行ニ此人ト相伴ヘリ、元來此二
 人ハ日帝ノ臣民ニテアリシガ前ニモ云ヒシ如ク、リコンハ西班牙ノ叛人ニシテ、フ
 レゴンハゼノアニ於ケルドリリア及ヒ日帝ノ黨派ニ反對シ、之レガ爲メゼノアノ都城
 ニリ追放セラレ謀叛人ト宣告セラレタル者ナリ、而シテ此二人ハ本國追放ノ後、佛
 王フランシスノ臣僚トナリシガ故ニ、日帝ハ賞ヲ懸テ此二人ノ頭ヲ購ヘリ、リコン
 ノ人トナリ肥大ニシテ騎馬ヲ好マズ、又急程ヲ厭フ者ナレバ、今回ノ旅行ハリコン
 ノノ便利ノ爲メニ、フレゴント共ニ小船ニ乘リポー河ヲ下ルノ約束ヲ爲シ、而シテ

佛王フランシス日帝ニ敵對スル同盟ヲ結ブ

敵人ノ眼ヲ欺ン爲メニ服粧ヲ變シ、又通行券ヲモ有セザリシ、此時ニ當リ伊太利國内ニ於テハチユリンノ佛國太守シユ、ベルレー、ランジート日爾曼帝黨トノ間ニ既ニ小戰ヲ開キ、ミラン府ノ太守マルクイス、デル、ガストート彼佛國ノ太守ランジートハ始終目ヲ注テ相互ニ使人ヲ妨ントシタリ、一日ガストート旗下ノ勇者數人ハ不意ニ彼佛使リンコンフンゴソノ二人ニ逢ヒシガ、直チニ之ヲ捕ント進ミタルニ、此二人モ豫テ覺悟ノアル者ナレバ手ヲ拱シテ縛ニ就ク者ニアラズ、直チニ一場ノ小戰ヲ開キタルニ、衆寡ノ勢敵ス可キニアラズシテ二人ハ其場ニ殺害セラレ、其携帶セル書類ハ皆彼ノ勇者ノ爲メニ奪ハレタリ、佛王此報ヲ聞キ之ヲ以テ万国々際法ヲ破リタル者トナシ深ク憤リタレト、彼レ當時ハ尙ホ之ヲ以テ直チニ兵ヲ起ス程ノ勇氣ナク、若シ日帝ノアルジョールズ遠征取績ノコナカリセバ、フランシス、ハ尙ホ此一事ヲ不問ニ付セシナルベシ、然レ彼レ日帝ノ敗報ヲ聞クヤ時失フ可カラズトナシ、即チ百方術ヲ尽シテ苟モ日帝ニ不滿ヲ懷ク者アレバ何人ヲ問ハズ之レト同盟センコトヲ求メタリ、是ヨリ先キフランシスハクレーブス侯(侯ハ日帝トゲルデルラン

トチ争フ人ナリ)ト同盟ヲ爲セシガ、今ハ又チープルスノ不平黨ヲ煽動シ之レト同盟ノ約ヲ結ビタレト、只英王ヘンリー八世ノミハ誘フテ同盟ニ入ラシムルコト能ハザリシ、クレーブス侯ト同盟トナルヤ、フランシス王ニ左右ヨリチゼルランドヲ攻撃スルノ便利ヲ與フルノミナラズ、王ハ尙ホ侯ノ領地ヲ假リテ日爾曼ヨリ己レガ要スル如何ナル軍勢ヲモ引入スルノ便ヲ得タリト千五百四十一年十一月十九日佛王ハ又デンマルク王クリスチヤン三世ト十年間ノ條約ヲフオンテインブローニ結ビ、之レニ依テデンマルク王ハ佛國ノ敵トアラバ何人ヲ問ハズサウンド海峽ヲ閉鎖ス可キヲ約シ、而シテ翌年七月佛王又瑞典王ゴスタビユス一世トラグニイニ於テ攻守ノ盟約ヲ結ベリ、從來スカンヂナビヤ諸國(按「スエーデン」「ノルウェー」ハ歐洲一般ノ政務ニ與ラザリシガ此時ヨリ漸ク其干涉ヲ始メタリ、佛王フランシスハ斯ノ如ク己レノ功名ヲ遂ケ忿恨ヲ慰セン爲メニ全歐羅巴ヲ煽動シテ千五百四十二年ノ夏ニ至リ兵ヲ分ツテ五軍團トナシ始メテ開戦ニ着手セリ、此五軍團ノ中二軍團ハ之ヲチゼルランド攻撃ニ向ハシメ、第四軍團ハ佛國太子ヲ大將トシテ西班牙ノ國界ニ進マシメ、

自餘ノ一軍團ハ水軍大將ダンチホーテ大將トシピードモントニ部署シタル兵士ヨリ編成シタル者ナリ

子ゼルラ
ドノ戦陣

戦争クレーブスノ方面ニ開ケシガ、クレーブス侯ハ其船將ノ一人ナルマーチン、ロツセム(零奪漂泊者ナリ)ニ命シ、公ケニ己レテクレーブスノ將官ナリト明言セズシテ、私カニ散兵隊ヲ子ゼルランド國境ニ集合セシメタリ、テゼルランド攝政ハ其舉動ノ異ム可キ狀アルガ故ニ、之ヲクレーブス侯ニ詰問セシメタルニ、侯之レニ答ヘテ曰ク、其兵ハ我ノ旗下ニアラズ、我ハ此兵士ヲ以テ土爾其ノ征討ニ赴ク者ナリト信セリト、而ルニロツセムハ不意ニレーズ府ノ前ニ顯ハレ、其帥ユル兵士ニ命シテミウズ河ヲ涉ラシメタレバ、レーズノ人民之ヲ見テ其府門ヲ閉ヂタルニ、ロツセムハ河ノ上流ヨリ涉リ、至ル所其劫奪ヲ恣ニシ、アントウエルプ府ヲ取り其財物ヲ掠ムルノ圖謀ヲ以テ此府ノ一方ニ軍ヲ進メタリ、オレンジ侯即チナツソノレテーハロツセムノ進撃ヲ防ントシタル者ナルガ、ホーグストレーテンノ戦ニ敗レ、其帥ユル兵一千四百人ヲ亡ヒシニモ拘ハラズ、漸クルーヴエーアンアントウエルプヲ防禦ノ地位

ニ置クヲ得セシメタルハ、侯防禦ノ功少ナカラズト謂フ可シ、戦况斯ノ如クナレバフランススハ愈々子ゼルランドノ方面ニ開戦スルヲニ決心シ、千五百四十二年七月十二日迄ハ開戦ヲ布告セザリシガ、此日ニ至ツテ最モ無禮ナル言語ヲ以テ開戦ヲ布告シタリオルンヤン侯チヤールズノ帥フル佛軍ノ一隊(其實ハオルンヤン侯ノ指揮スルニアラズシテ侯ノ軍術教師キース侯クラウドガ陰然指揮スル者ナリ)ハルキセムブルグノ國境ニ集リ、他ノ一隊ハヴエンドム侯之ヲ帥ヒ佛蘭西ノ國境ヲ脅セリ、日爾曼帝黨ハルキセムブルグノ攻撃ヲ受クルトハ嘗テ期セザル所ナレバ、固ヨリ之ヲ防禦スルノ用意ナク、之ガ爲メダムピイリイルスイヴオイ、アーロンモントメジ一首府ルキセムブルグスラ直チニ佛軍ニ降り、ルキセムブルグノ外ハ大概殘忍ナル待遇ニ遇フタリ、オルンヤン侯ハ幼年客氣ノ人ナルガ此勝利ノ意外ニ容易ナリシヲ以テ心ニ満足セズ、其利器ヲ平野劇戰ノ間ニ試ンコトヲ渴望セタリ、佛軍南方部面ノ一隊(侯ノ兄弟佛國太子ノ帥フル一隊ナリ)ハ多分激戦ヲ爲スナラント云フ者アルヲ聞キ、不意ニ己レガ帥フル兵士ノ大部ヲ放遣シ、只佛國を界ヲ守ルニ足ルノ兵

ザルヲ覺リ圍ヲ解クヲ命シタリ、斯ノ如クシテフランシス治世ノ間ニ集メタル無
 比ノ大軍ト世ニ評セラレシ此兵モ、一ノ効力アル攻撃ヲモ爲サズシテ退軍シ、此役ノ
 爲メニ各所ニ設ケタル準備ハ、數小地ヲ奪取スルノミニシテ其終リヲ告ゲタリ、即
 チヴエンドム侯ガブーロン及ヒカレース近傍ニ於テ取リタル二三ノ小地トシユ、ベ
 ルレー、ランジイカピードモントニ於テ取リタル二三ノ小地是ナリ、此取績ヤ一ハオ
 ルレンヤン侯ノ無謀ナルト一ハフランセス王ノ遲疑シタルニ歸セザル可カラザル者
 ナレトモ、其最モ失策ト謂フ可キハ、佛王ガ全力ヲ一所ニ集メテ激戦スルノ策ニ出デ
 ズシテ、兵ヲ各所ニ分遣シタルニ在ルナリ、

西班牙ニ於
 ケルチャー
 レス五世ノ
 舉動

此戦争ノ間日帝チャールスハ敢テ戦地ニ近寄ラス從容自若トシテ西班牙ニ止リタ
 リ、帝ハ亞非利加歸陣ノ後、順次ニタルラゴナトルトサバレンシヤアルカレール、デ、ヘ
 テルス、マドリッド等ヲ巡廻シ、皇子ヒリツプチ人民ニ面會セシメ、佛人ヨリ受ケタ
 ル攻撃ヲ説テ人民ノ勤王心ヲ誘導セシカバ、西班牙立法院モ深カク帝ヲ信シ、帝ニ
 許スニ廣大ナル軍需ヲ以テシタリ、帝ハ又葡萄牙王ノ女マリート其皇子ト婚姻ヲ約

蘇姑土王セ

スルニ因テ大ナル粧資物ヲ得、モリユツカ諸嶋ノ要求權ヲ葡萄牙王ジョーン三世ニ讓與
 スルコトニ因リ國債ヲ募集シ大ナル金額ヲ得タリ又亞米利加ノ礦山ハ平年ニ比シテ
 收穫非常ニ多カリシ、此等ノ事情ニ依リ帝ガ第一戦争ノ始メニ於テアリシ有様ニ比
 スレバ、第二戦争ヲ起スニ稍ヤ富饒ノ資力ヲ得タリ、之レニ反シ佛國ノ資力ハ殆ン
 ト窮乏ヲ告グルニ至レリ、

加之帝ハ大ニ勢力ヲ増セシ一事アリ、即チ英王ヘンリー八世ト決定シタル盟約是ナ
 リ、是ヨリ先キ佛王ハ蘇格蘭ノ政務ニ干渉シ之レガ爲メ英佛二王ノ間ニ不和ヲ増シ
 タリ、始メ英王ヘンリーハ蘇王セームス五世ト同盟ノ約ヲ結ビ、セームスニ勸メテ
 蘇格蘭ニモ英國ト同様ノ宗教改革ヲ行ハンコト望ミシニ、蘇王モ始メハ英王ノ勸メ
 ニ悖ル心モアラザリシガ如シ、然レモ英王ノ此齟齬ハ蘇國ノ僧侶ノ抵抗ト佛廷ノ隱謀
 トノ爲メニ破ラレタリ、蓋シ佛廷ハ蘇國ト英國トガ聯合スルニ至ラバ、佛廷ガ蘇國
 ニ於ケル勢力ハ之レガ爲メ減損セラル、コトヲ前見シタレバナリ、英王ヘンリーハ此
 失望ノ爲メニ兵ヲ起シテ蘇國ニ向ヒ、ノルフオーク侯ヲ大將トシ二万ノ兵ヲ發シ、千

イムス五世
ノ敗軍及ヒ
死亡

五百四十二年ノ秋トウイード河ヲ涉リ、蘇國ニ大ナル損耗妨害ヲ被ラシメタリ、世
ニ云フソルウエー、フイルスノ敗ハ蘇王ゼームスニ非常ノ愁悶ヲ與ヘ、之レガ爲メ一
層王ノ死期ヲ促シタリト、而シテゼームスハ同年十二月十四日ニ死セリ、ゼームス
死亡ノ事變タル英王ヘンリーヲシテ政略ヲ變ゼシメタリ、ゼームスノ死後英王ハ蘇
格蘭ニ敵對スルノ準備ヲ止メ、ゼームスノ幼女マリート自己ノ太子エドワードト婚
姻ヲ結ビ之ヲ以テ英蘇二國ヲ聯合セシメントシタリ、然レ此畫策タル復タ佛國朝廷
ノ爲メニ抵抗セラル、ハ必然ノコトナレバ、ヘンリーハ意ヲ日帝ト同盟スルコトニ決
シ、千五百四十三年二月十一日條約ヲ締結シ、是レニ依テ此二國ノ君主ハ左ノ約款ニ
同意シタリ、曰ク佛王フランシスニ土爾其トノ盟約ヲ廢セシメザル可カラズ、曰ク
佛土兩國ノ同盟ヨリ受ケタル日帝ノ損害ハ償還セシメザル可カラズ、曰ク佛王ガ以
前ニ日帝及ヒ英王ニ結ビタル一切ノ約束ハ皆履行セシメザル可カラズト、而シテ若
シ佛王ニシテ此等ノ箇條ニ抗拒スルアラバ、彼ニ對シテ開戦ヲ布告スベク而シテ日
英二國ノ君主ハ各々二万ノ歩兵五千ノ騎兵及ヒ二千ノ水兵ヲ載スル所ノ艦隊ヲ發

日帝英王ヘ
ンリー八世
ト同盟ス

テーゼラ
ンドノ戰陣

シテ日帝ハボルガンデー侯領トピカーシーヲ回復シ、英王ハ自餘ノ佛蘭西全邦ヲ回
復セザレバ己マザルベシトノ箇條ヲ遂行セシムルコトシタルナリ此條約ハ同年六
月迄公ニセラレザリシガ、此中亦拾段ニ日英兩國ノミニ關スル若干ノ條約ヲ包含シ、
殊ニ此兩國ノ君主ハ互ニ左ノ事ヲ約セリ、曰ク日帝ニ於テハ英國ノ著書英王ニ於テ
ハ日爾曼ノ著書ヲ其各自ノ領内ニ於テ刊行スヘカラズト、然レ千五百四十四年迄ハ
此條約ヨリ生スル重要ナル事變アラザリキ、
千五百四十三年ノ戰爭ハ、前年ノ戰爭ノ如ク、佛將ロッセムノ一方面ニ於テ若干ノ
勝利アリ殊ニ三月二十四日レツタードニ於テ帝兵ノ敗績アリシカバ、佛王ハ此勝利
ニ氣ヲ得テ再ヒ專ラ此方面（接）テーゼラ（接）ニカチ用ノコトヲ試ミタリ、然レフラン
シスノ胸中ニハ一定ノ畫策アルニアラズ、而シテ王ノ命令タル變轉常ナク前後撞着
スル所多シ、此ニ詳記スベキ價值モナキニ三ノ戰爭ヲ爲スノ後、王ハ七月ノ終リニ
レームス地方ニ退キ、此ニ其軍隊ノ大部ヲ解放シ、田獵ヲ事トシテ身ハ軍中ニ在ル
コトヲ忘レタリ、此役ヤフランシス王ハデンマルク人ヨリ多少ノ援助ヲ得タリ、此デ

伊太利ニ於ケルチャールス五世

マルク人ハチーゼルランドノ海岸ニ上陸シワルシエレンヲ略取セント試ミタル者ナリ、

又一方ニ於テ日帝チャールスハ領内ノ叛臣クレーブス侯ヲ討伐スルコトニ意ヲ決シ、此目的ヲ以テ伊太利ヲ經テ日爾曼ニ進入シタリ、伊太利ノ侯伯ハ帝ノ入駕ヲ聞キゼノアニ於テ帝ニ謁見ノ禮ヲ執ン爲メニ集合シ、而シテコスモ、デ、メジシ、ハ金貨二万「クラウン」ヲ出シテレグホルン及ヒフロレンス内ニ在ル堡塞ヲ償復シタリ、是レ此堡塞ハ日帝ノ兵士ガ是レ迄保守シタルニ由ルナリ、六月二十二日チャールスハバルメサンニ於ケルブツセツトニテ法皇ニ會見シタルニ、法皇ポールハ帝ニ説クニミランヲ佛王ニ讓與シテ平和ヲ買フ歟、否ラサレバオツタヴィオ、フワーテス(法皇ポールノ孫ニシテ日帝ノ婿ナリ)ヲミラン侯トナス可シト云フヲ以テシタルニ、帝聽カズ、又法皇ハ三十万「スキウヂ」(按伊太利羅馬ニ通用シタル貨幣ニシテ價一定シ難シ)ヲ拂フテ彼ニミランヲ所有セシメント請求シタルニ、帝又之ヲ聽カザリキ、

七月ノ末日帝ハスピールニ着シ直チニコレーブス侯ヲ討スルノ準備ヲ爲セリ、日帝

日帝クレーブス侯ヲ討ス

ハ先キニヘツスノ領主ト同盟ノ約ヲ固クセシガ、此約今ハ日帝ニ大ナル幸運ヲ與タリ、其故ハクレーブス侯ノ外戚ナルサキソニ撰擧侯ハ陰然侯ヲ補助シ、加之侯ヲ誘フテスマルカルドノ同盟ニ引入センコト望メリ、クレーブス侯ハ同盟者タルノ資格ニ合セン爲メニ新教式ノ「サクラメント」ヲ受ケタルナリ、ヘツス侯ハ先キニ日帝ト盟約シテ決シテクレーブス侯ニ援助ヲ與ヘサル可シト約シ、帝ニ向テ身ヲ檢束スル者ナレバ、固ヨリクレーブス侯ガ彼ノ同盟ニ入ルコト許ス者ニアラズ、是ニ於テスピールノ僧正トサキソニ撰擧侯ノ公使ハクレーブス侯ノ爲メニ百方術ヲ尽シ、帝ノ寛容アラントテ請フ、帝之レニ答ヘテ曰ク「土爾其ノ兵我ノ城門ニ迫ルト雖モ我ハ之ヲ顧ミス、先ツ我ノ謀叛者ヲ討伐セザル可カラズ、其謀叛者トハ嘗テ我が國內ノ最大危難ノ時ヲ以テ敵國ト同盟ス可キ機會トナシタル者ナリ」ト、實ニクレーブス侯ノ日帝ニ對シタル所爲ハ、帝ニ取ツテハ甚タ惡ム可キ者ト謂フ可シ、何トナレハ侯ハゲルデルランドヲ占奪シタルノミナラズ、佛王ニ日爾曼兵ノ援ケヲ與ヘ、デンマルクヨリノ進撃ニ便ヲ與ヘ、チーゼルランドノ政府ヲシテ日帝ニ援助ヲ與フ

ルヲ得サラシメタリ、此役ヤチヤールス帝ハ西班牙四千ノ撰拔兵ト伊太利同數ノ練兵トチ一隊トナシテ之ヲ帥ヒ、之レニ加フルニ二万六千ノ長鎗兵ト四千ノ騎兵ハオレンジ侯之ヲ帥ヒテ帝ニ伴ヘリ、左レバ豫テ日帝ト戰テ爲ソコヲ望ミタル佛王及ヒ其諸子ハ、今ヤ好機會ニ遭遇シタル者ナルニ佛王ハ其晩年ノ舉動ニ於ケル如ク只歡樂ニ沈醉シ、此危急存亡ノ秋ニ當リテモ徒ニレームスニ於テ田獵ヲ事トシ、クレール侯ガ命運旦夕ニ迫ルヲモ顧ミザリシハ、人情地ヲ掃フタル人ト謂フ可シ、抑々此クレール侯ノ佛王ニ於ルヤ實ニ功勞多キ同盟者ニシテ、佛王此侯ヲ以テ佛國ノ王族ト連結セシメタル者ナリ、佛王斯ノ如ク田獵ニ荒ム間ニ、日帝チヤールスハヅールン府ニ圍ヲ置キ四十ノ大砲ヲ以テ連撃セシカバ、ヅールン府ハ防禦ノ術尽キ八月二十六日終ニ日帝ノ手ニ落チタリ、府陷ルヤ、恐ルヘキ虐殺隨テ起リ、同日ノ夜ハ此府ニ進入シタル兵卒ノ外一人モヅールン府内ニ生存シタル者ナカリキ、ヅールンハヨールーシ侯領内ニ在ツテ最モ堅固ノ場所ナレバ、此府ノ陥落ト運命ハ自餘ノ都城ヲシテ震慄セシメ、首府ヨールーシロールモンドヴェンロハ風ヲ望ンテ降り、而

佛王クレール侯ノ危急ヲ救ハズ

ナクレール侯ハ切ニ援助ヲフランシスニ請ヒ使者項背相望ムト雖モ更ニ其効ナケレバ、侯モ進退維レ谷リ帝ノ膝下ニ奔リテ罪ヲ謝スルノ外ナシト思ヒ、乃チ急ニ帝ノ行在地ヴェンロニ向フタリ、斯ク叩頭シテ罪ヲ謝スルモ帝ハ少シモ侯ニ謁見ヲ許スノ氣色ナク、叛臣ヲシテ久シク其命ヲ待クシメシガ、懷ニ入ルノ窮鳥之ヲ殺スハ人情ニアラズ、帝ノ怒リモ稍ヤ解ケタルニヤ終ニ侯ニ降服ヲ許スコトナリ、二都府ヲ除キ侯ガ世襲相續ノ地ハ皆侯ニ復歸スルコトヲ許サレタリ、彼ノ二都府ハ侯ガ忠義ノ保證トシテ帝ノ手中ニ留メタルナリ、然モ此降服ニ依テ侯ハゲルデルランドツトフエンノ所有權ヲ廢スルコト、新教ヲ捨テ、加特基教ニ復スルコト、佛王及ヒデンマルクノ王ト同盟ヲ絶ツコト、日帝及ヒ其太子ニ向テ忠義ノ誓ヲ爲スコト、ゲルデルランドノ人民カ嘗テ侯ニ對シテ執リシ忠義ノ誓詞ヲ解クコト、ロツセム及ヒ其凶惡ナル夥伴ヲ變シテ日帝ノ指揮ヲ奉ゼシムルコト、等ヲ請求セラレタリ、此時ニ當リ佛王ハ漸ク戰場ニ向フコトヲ始メタレモ時既ニ晩シ、彼レ乃チ其兵士ヲ再ヒ召集シ、ルキセムブルグニ進入シ、九月二十七日其首府ヲ回復シ、夫ヨリシテ佛國

水軍大將ダンテポーハクレーブス侯ヲ救フ爲メニ進軍ス可シトノ命ヲ受ケタレト、其發程以前ニクレーブス侯ヨリ使者到着セリ、而シテ其使者ガ侯ヨリ受ケタル命令ハ左ノ二件ヲ佛王ニ申告スルニ在リ、曰ク侯ハ今ヨリ佛王ト同盟ヲ絶タサルヲ得ス、曰之レト同時ニ先キニ佛王ト婚ヲ約シタルナツアルノ相續者タル婦人ヲ侯ノ許ニ送ラレンコ(此婦人入興ノ爲メニ日帝ヨリ受ケタル安全通行券ヲ出セリ)ヲ要求ス然レ佛王ハ此申告ニ答ヘテ曰ク、侯トノ同盟既ニ破レタル以上余ハ最早侯ニ對シテ義務者トハナラズ、其婦人ノ事ニ關シテハウイリヤム(按ククレーブス侯ナリ)宜ク自ラナツアル王及ヒ其后ニ請求シ、此王及ヒ后ガ其女ヲ侯ニ與フルヤ否ヤヲ見ルニ如カスト、然レ此婚姻タル、佛王フランシスノ推察スル如ク、ナツアルノ王及ヒ后ト云ヒ、婦人ゼーシンドルブレツト自身ト云ヒ、此婚姻契約ヲ遂クルニ心アルニアラズ、而シテ此契約タル今ハ既ニ廢棄無効ト公告セラレタル者ナリ、爾後クレーブス侯ハフエルヂナンド王ノ一女ヲ娶リ、而シテ五年ヲ經テ彼ノナツアルノ相續者ハヴエンドム侯ホーポントアントニーニ嫁セリ、千五百四十二年間ハ上ニ記シタル戰爭ノ外別ニ記

日帝カムブレ
レーヲ取ル

バルパロツ
サ及ヒ佛兵
伊太利ヲ劫
略ス

ス可キノ大事件ナシ、フランシス王ハカトー、カムブレレーシス迄陣營ヲ進メシガ、日帝チャーレンスノ陣營ヲ去ルコト遠カラサレバ、陣外ノ小戦ハ止ム時ナカリシ程ナレト、彼此ノ君主ハ互ニ高地ノ陣營ヲ下リテ大戦ヲ爲スノ危険ヲ冒サ、サリシ、其中重モナル事件トナス可キハ帝軍ガラングレヒー及ヒルキセムブルグヲ圍ミ置キシコト是ナリ、此時日帝ハ英國ヨリ六千ノ援兵ヲ得、サア、ジョン、ウオルロツプヲ大將トシ、タレト、別ニ緊要ナル事變モナク、十一月ニ至リ兩軍過冬ノ處ニ赴ケリ、此ノ役ヤ日帝ノ利益トスベキハカムブレレー(ニビスコバル)宗ヲ奉スル國ノ首府ナリヲ取リシ一事ノミ、而シテ此カムブレレーハ當時中立ノ特權アリト主張シタル者ナリ、チャーレンスハ此都府ヲ取り、府民コフランシス王ニ對スル防禦ノ爲メニ堡壘ヲ築クベキコトヲ説諭シ、ランドレシーニ歸陣ノ後、此府ニ屯兵ヲ置キ、此府ヲ以テ克服ノ地位ニ置ケリ、

北部ニ於テハ物情斯ノ如クナルニ、ヘーラツジン、バルパロツサ(佛王フランシスノ同盟者)ガ土爾其ノ艦隊ヲ帥ヒタル進撃ハ、大ニフランシスヲシテ歐洲諸國ノ惡ミ

ヲ受ケシメタリ、抑々此バルパロツサノ進撃ハ土廷ト佛國大使ポリーントノ問ニ結
 ビタル約束ニ從ツテ來リシ者ナルガ、バルパロツサハ許多ノ軍艦ヲ帥ヒ、五月ニカ
 ラブリヤノ海岸ニ顯ハレ、許多ノ兵卒ヲ上陸セシメ、橄欖又ハ葡萄ヲ掠メ取リ、手ニ
 觸ル、住民ハ捕ヘテ之ヲ奴隸トナシ、其勢ヒ當ル可キニアラザレバ、レツジョハ一
 兵ヲ交ヘズシテ敵ノ爲メニ燒夷セテレ、其府民ハ皆乱ヲ避ケテ山谷ニ竄レタリ、六
 月ノ末ニバルパロツサノ軍艦ハタイベル河口ニ顯レ來リタレバ羅馬モ之レガ爲メ
 ニ震動シ、都府ノ人民其居ニ安スルヲ得ズシテ多クハ諸方ニ散乱セリ、勢ヒ斯ノ如
 クナレバ法皇モ其意ヲ安スル能ハズ大僧長デカルピテ敵ノ軍中ニ發遣シ、如何ナル
 企望ヲ以テ進撃此ニ至ルヤヲ問ハシメタルニ茲ニ歐洲諸國ノ未タ曾テ見サル所ノ
 情景コソ出現セリ何ソヤ佛國大使ポリーンハ此使節ニ面會シ、自ラ公言シテ余ハ
 一テツシンノ舉動ヲ指揮スル者ナリト云ヒ、恬トシテ耻ル所ナシ、且ツ此僧長ニ告
 ケテ曰ク、今回ノ舉タル羅馬ハ毫モ畏懼スルコ勿ルベシ、佛國ノ同盟ナル土爾其兵
 ハ法皇ヲ待スルニ中立ヲ以テスベシ、ト斯ノ如クシテバルパロツサハ自餘ノ却畧ヲ

爲サズシテマルセルニ向テ進軍シ、同地ニ到着ノ後、其カラブリヤニ於テ略取シ
 タル不幸ナル囚虜ヲ市場ニ公賣セシガ、此都府ニシテ此囚虜ヲ買フ者ノ乏シカラザ
 リシハ、吁亦異ム可キナリ、

初メヘーラツシン謂ラクマルセルニ到ラバ武器糧食ノ準備充分ニ整ヒ、土帝ト佛
 王トノ聯合兵ヲ以テ一大舉動ヲ試ルヲ得ベキナラント、而ルニ此地ニ到着シテ其準
 備ヲ視ルニ、港灣ニハ僅々二十二隻ノ粗惡ナル船艦ト數隻ノ運漕船ノ外ナケレバ之
 カ爲ニ吃驚懊惱セリ、且ツ此等ノ船舶トテモ兵士糧食武器ノ備ナキ者ナレバ、バル
 パロツサハ之ヲ見テ或ハ罵リ或ハ脅迫シ、若シ一事ヲ爲ス能ハズシテ當夏ヲ過クル
 アラバ必ス土帝ノ怒ヲ招ント云フヲ以テセリ、ポリーンハバルパロツサノ恐嚇ニ遇
 フテ倉皇狼狽シ、早く彼ガ怒ヲ解ンモノヲト思ヒ、急キフランシスノ許ニ來リテ其
 事情ヲ告ゲ、漸ク僅少ノ兵トニイフ、攻撃ノ命トヲ得テ還リシガ、此ニイフハ幾キニオ
 ンゲアン侯ガ攻撃シテ其功ヲ奏スル能ハザリシ場所ナリ、事倉卒ニ起リ、サゾオイ
 侯ハ斯ル攻撃ニ對スル十分ノ豫防アラザレバ、八月ノ末佛土二國ノ聯合兵終ニイ

佛土二國ノ兵ニーステ取ル

ス府ヲ畧取セリ(此戰ヤサヴオイノ紳士モントフオルト奮戰防禦シタレト)然レハマ
 ルタノ武士ニボーロイシメイナル者アリ、是人旗下ノ兵ヲ帥ヒ尙ホニイス城ヲ守
 ツテ敢テ降ラズ、九月八日ニ至リ日將アンドリウ、ドリアハ艦隊ヲ帥ヒテ此ニ來リ、
 又ガストーハ陸地ヨリ兵ヲ帥ヒテ此ニ來リシカバ、土佛ノ聯合兵ハ一事ヲ爲ス能ハ
 ズシテ退軍セザルヲ得ザルニ至レリ、サレバフランスハ其所行ノ醜名ヲ償フニ足
 レル一ノ成功ヲ得テ聊カ慰藉スル所アル能ハザリシナリ、佛王謂ラクバルバロツサ
 ノ怒ヲ解カサレハ、必ス後害アラント、是ニ於テ命シテ佛國船内ニ使用スル土爾其
 人種ノ奴隸ヲ悉ク解放セシメ、土爾其軍艦ノ過冬ノ處トシテツローンヲ交付シ、之
 ガ爲メツローンニ住スル佛蘭西人ハ皆此地ヲ退去スベキヲ命セラレ、土爾其人此地
 ヲ占有スル間ニ箠シタル手束ニ此地ヲ以テ土京コンスタンチノープルニ比シタル
 一アリト云フ、歐羅巴各國多シト雖モ土爾其人ト聯合シテ進攻ノ働ヲ爲セシハ唯佛
 蘭西ノミナリ、初メヴエニース人佛土二國ノ進撃ヲ見テアドリヤチツク海岸ヲ防禦
 セン爲メニ軍艦ヲ裝ヒシガ、フランスス之ヲ聞キ其舊交國ナルヴエニースノ怒ヲ買

日帝チヤールノ聯邦會議ヲ開ク

ハンコチ恐レ、ゼーン、デ、モントルーク(其後ヴァレンスノ僧正トナリシ人)ヲ遣リ
 己レガ土爾其ト同盟シタル非ヲ辨護セシメタリ、モントルークハヴエニース元老院
 ニテ長キ演説ヲ爲シ、此演説中佛王ヲ辨護スル爲メニ經典ヲ引用シ、如何ニ太古デ
 イヴィット王及ヒエーサー王ハ異教徒ヲ使役シ自ラ利セシヤチ示シタリト云フ噫
 千五百四十四年ノ初メ日帝チヤールハスビールニ於テ開キタル日爾曼聯邦會議
 ニ親臨シ自ラ開場式ヲ行ヒタリ、此會議タルチヤールスガ治世中ニ招集シタル會議
 中最モ巍々タル者ノ一ニシテフェルヂナンド王及ヒ日爾曼帝國ノ王侯ハ大概列席
 セザルハナシ、二月二十日開會ノ演説ニ於テ帝ハ重モニ佛土兩國聯合ノ不倫ナルコ
 チ痛撃シ、歐洲各國チシテ土爾其ノ抑壓ヲ免レシメントセバ先ヅ佛國ヲ潰滅スルノ
 必要ナルコチ主張シ、又フェルヂナンド王ハ此演説ヨリ生シタル感憤ヲ激スルニ土
 帝ソリマンガハリ國内ニ在ツテ傍若無人ノ措置アルヲ呈露シ以テ列國ノ一
 致ヲ謀レリ、然レ此列席王侯ノ中ニ新教ヲ信スル者ハ始メヨリ日帝ノ此等ニ於テ痛
 痒ノ感ヲ顯ハサズ、且ツ言ヲ爲シテ曰ク佛王ハ從來常ニ日爾曼ノ自由ヲ愛護シタリ

佛王ニ對シタル各國侯伯ノ憤懣

ト帝是ニ於テ千五百四十年フランシス王ガ日帝ニ贈リタル二三ノ信書ヲ讀場ニ呈出セリ、此信書ハ佛王ト日帝トノ間ニ盟約シタル理由ニ從ヒ熱心日帝ヲ助ケテ新教徒ヲ制壓スルヲ約シ、新教徒ヲ以テ君主ニ對シタル謀叛人羅馬教ニ對シタル謀叛人ナリト明言シタル者ナリ、新教徒ハ此日帝ノ出シタル信書ヲ見テ佛王ニ對シテ忿怒ノ情淺カラザリシニ、ザウオイ侯ノ全權大臣ガニス陥落ノ始末ヲ報道シ、我主君ガ最後ノ潜伏場ト頼ミタルコニスハ回教人種ノ海賊ノ爲メニ陷サレタリト云フ時、列國ノ王侯ヲシテ一層憤激セシメ、デンマルク王ノ全權大臣ノ如キハ此報道ヲ聞キ、土爾其ト同盟シタルガ爲メニ既ニ耶蘇教國ノ爲メニ憎惡ヲ受ケタリシ佛王ト契約シタル同盟ヲ公然廢絶シタリ、又佛王ハ己レガ新教徒ニ對シテ犯シタル不義ノ世ニ公ケナラザランヲ望ミ、大僧長ジョン、ジュ、ベルレー及ヒ大臣オリヰイールノ二人ヲスピールニ派遣シ、新教徒ノ友愛ヲ買ハンヲ企テタレトモ、此佛蘭西全權大臣ノ安全通行券ヲ得ン爲メニ送リタル使節ハ、其目的ヲ達スル能ハズ、新教徒ハ之レニ告ケテ曰クバルバリーノ回教海賊ト同盟シタル國ヨリ發シタル公使ハ、耶蘇教國

佛王フランシスノ遁辭

ノ万国々際法ノ保護ノ外ニ在ル者ナリ、サレバ汝ハ汝ノ生命ヲ全フシテ歸ルヲ僥倖ト思フベシト、此消息ニ驚キ、ベルレーオリヰイールノ二人ハ一旦ナンシーニ迄進ミタレトモ、夜ニ乘シテ此ヨリ逃走セリ、而シテ巴里ニ歸ルノ後、ベルレーハ一ノ辨明書ヲ公布シ、佛王ノ非行ヲ辨護セシガ、此辨明書ハ佛王ニ左祖スル歴史家スラモ前後撞着事理錯誤ノ辨護文ナリト評スル所ノ者ニシテ、時トシテハ土爾其ト同盟セザルヲ主張シ、時トシテハ舊約全書ノ例ヲ引テ其同盟ヲ正視セリ、之ヲ約言スレバ此辨護タル少シモ佛王ノ大臣ニ責ヲ逃ル、ノ地ヲ與ヘザル者ト謂フ可シ、佛王フランシスモ亦自ラ信書ヲサキソニ、撰舉侯ジョン、フレデリックニ贈リ、己レガ身ヲ清メント勉メタルハ世ニ隠レナキ者ナリ、

スピールノ聯邦會議ハ日帝ニ許スニ佛土兩國ニ對スル戰費ヲ以テセシガ、日帝ハ此會議ニ陳述スルニ佛國ニ對スル戰爭ノ終ル後土國ヲ攻伐スベシト云フヲ以テ日帝ガ議長ノ席ヲ占メテ開ク所ノ教門總會ヲ開設セラル、ニアラザレバ、宗教ノ爭論ハ宗教事務ノミノ目的ヲ以テ招集スベキ聯邦會議迄延引スルコトナリ、其間ハ從前

日帝新教徒
ニ讓與ヲ爲
ス

日帝ノ權謀

ノ聯邦會議ニ於テ決シタル新教徒ヲ利スル所ノ命令ハ有効ノ者トナリ、公ニ新教ヲ尊
信スルコトノ自由ヲ許シ、以前ハ新教徒ガ皇帝裁判所ノ判事補トナルコトヲ禁スルノ制
ナリシモ是ヨリ此制廢セラレ、以前ハ此裁判所ノ判事タル者ハ必ス羅馬教ノ式ニ從
ヒ神聖ノ遺物ニ對シ誓詞ヲ執ラザル可カラザルノ慣例ナリシガ、此慣例モ新教徒ノ
爲メニ廢止セラレタリ、此等ノ讓與ハ皆日爾曼帝ノ政治上ノ危急ニ際シテ強取シタ
ル者ナリ、法皇ニ皇帝ガ此等ノ讓與ヲ爲シタルコトヲ聞キ、八月二十四日帝ニ書ヲ
贈リ痛ク詰責セシニ、帝ハ此時私カニ法皇ト新教徒ヲ絶滅スルノ方法ヲ議セシト云
フ、

ビードモン
トノ戰爭

ビードモントニ於テハ冬季中ト雖モ戰爭止ム時ナカリシガ、ガストーハ彼ノニイス
ノ圍ヲ解クノ後、佛將ブーチールト對戰シテ數度ノ有名ナル勝利ヲ得タリ、此ブー
チールハ千五百四十二年一月ニ死亡シタル佛將ジユ、ベルレー、ランジーノ後ヲ繼ギ
將官ノ命ヲ受ケタル人ナリ、モンドヴィカリグナノノニケ所ハサゾオイ侯之ヲ回復
シタルハ日軍ハ益々勢ヲ得タレトモ、春ニ至リガストーノ進撃ヲ制止スル一事ヲ起シ

タリ、即チ佛將オンゲアン侯ノ來着是ナリ、此時ビードモントニ在ル日佛兩國ノ兵
勢ハ幾ント伯仲ノ間ニアリシカドモ、佛王ノ貨財ト信用ハ地ヲ掃フタルガ故ニ、佛
王ハオンゲアンニ充分前後ノ考テ爲ス可シ總軍進撃ノ危險ヲ冒ス勿レト云フノ命
令ヲ以テシタリ、然モ慄慄不屈ノ佛國貴族ハ如何ニシテ斯ル命令ヲ甘受スベキヤ、彼
ノ眞成ノ「ガスコニー」(按佛國內「ガスコニー」ノ人種ニシテ勇武ノ聞ヘアル者ナリ)人種ナル將官ブーリス、デ、モ
ントルークハ、佛王ヲシテ此命令ヲ廢止セシムルノ目的ヲ以テ佛廷ニ來リ、得意ノ
能辨ヲ振ヒ熱心歎願シテ此ノ命令ヲ消除セシメタリト云フ、四月十四日オンゲアン
ハセリソールニ於テ帝軍ヲ攻撃シ一大勝利ヲ得タリ、此勝利ハ彼ノ指揮宜ヲ得ル大
將タルノ材幹ニ依テ得タルヨリハ寧ロ其活潑ナル勇氣ト歩卒ノ力ニ依リテ得タル
者ト謂フ可シ、原注此役ニ日兵始メテ手鎗ヲ使川シタリ蓋シ手鎗ハ「トスカチ」初メ
ニ於ケル「ピストイア」ニ於テ始メテ發明セラレタル者ナリ、
ガストーガセリソールニ進軍スルヤ、アスチ府ノ人民ニ告ケテ曰ク、若シ勝利ヲ得
ル能ハズシテ歸陣スル如キアラバ、汝人民宜ク府門ヲ閉テ我ノ入ルヲ拒ムベシト、然
ルニガストーハ敗衄セシガ故ニ、アスチノ人民ガストーノ約ニ從ヒ府門ヲ閉テタリ

ト云フ然レ佛軍ハ固ヨリ錢糧ニ乏シキ者ナレバオンゲアンハ旗下ノ瑞西軍ヲ解放セザル可カラザルコトナリ、而シテ佛王ハ輕卒ニモ、オンゲアン旗下ノ精兵二万二千人ヲ佛國ニ送付ス可シト命シタルガ故ニ、憐ムベシオンゲアンガ万死ヲ冒シ得タル勝利モ今ハ畫餅トナリシノミナラズ、尙ホ殆ント其軍ノ編成ヲ紊亂スルニ至リ只殘ル所ノ結果ハカリグナノノ回復ノミナリシ、佛國ハ斯ク不運ニ際セシガ、帝軍モ殆ント同一狀トナリタレバ、日佛兩國ノ大將ハ三ヶ月間休戰ノ約ヲ結定スルヲ便利ト思考シタリ、

此休戰ノ間ニ帝ハ新教徒中重ナル侯伯ノ援助ヲ得タリ、即チブランデンブルグノアルベルトサキソニー侯モリス(其父ヘンリーノ後ヲ繼キタル幼侯ナリ)及ヒ其他二三ノ侯伯ノ援兵是ナリ、此援兵ハ總數四万ニ登リシガ、帝ハ之ヲロルレンニ集メ五月ノ末ニ自ラ此兵ト合シタリ、此兵ハ既ニルキセムブルク及ヒ其他二三ノ都府ヲ降シ今ヤ方ニチヤンペーンヲ襲フノ準備ヲ爲セル者ナリ(此時ニ當リ佛王ノ位地ハ實ニ危險ト謂フ可シ、其故ハ彼ノ土爾其人ト同盟シタルガ爲メニ他ノ同盟國ハ總

ツーロンニ
於ケル土將
バルパロツ
サ

テ王トノ同盟ヲ絶チ然ルニ土爾其人ノ佛王ニ對シテハ一ノ同盟國ノ王者トシテ待遇スルヨリハ寧敗軍ノ敵トシテ待遇スレハナリ、土爾其人ガ佛國ツーロンニ滯在中ハ恰モ敵地ニ在ル如キ舉動ヲ爲シ、近地ノ海岸ニ住スル佛國丁男ハ手ニ任セテ略奪セラレ軍艦中ニ使役セラル、ノミナラズ、婦女モ捕ハレテ土爾其人ノ閨房ニ供セラレ、佛王所有ノ軍艦ノ水夫スラ劫奪セラル、ニ至レリ、土爾其人ノ凶暴此ノ如クナレバ佛王モ之レニ堪ユル能ハズ、八十萬、クラウン「テバルパロツサニ拂ヒ、斯ル危險ナル同盟ヲシテツーロンヲ去ラシメントシタリ、バルパロツサハ四月ニコンスタントノーブルヲ指シテ歸帆シタルガ、伊太利海岸ハ再ヒ略劫ト恐怖トヲ受ク、是レ則チバルパロツサガ最後ノ有名ナル出戰ニテ、彼ハ二年ノ後高齡ヲ保チテ終焉ヲ告ゲタリト云フ、

佛王其軍兵ヲ北方ニ集合スルヲ得ル以前ニ、日帝ハ既ニコムメルシーリニ取リ聖ヂジールニ圍ヲ置ケリ、然レ聖ヂジールノ守リ堅クシテ八月十七日迄ハ帝軍之ヲ拔ク能ハザリシガ故ニ、佛王之レニ依テ多少ノ餘裕ヲ得タリ、又英國ニ於テハ英軍

英王ヘンリー
第八世佛國
ヲ襲フ

春季ニ際シテ蘇格蘭ト戦ヲ開キ、エモンボロハ英國ノ攻塞ニ遇ヒタルニ英軍此地ニ據守スル能ハザリキ、夏ニ當リノルフォーク侯ハ一分隊ヲ帥ヒテカローニ上陸シ直チニマウントリイニ圍ヲ置ント進軍シ、英王ヘンリーハ七月ノ半頃大軍ヲ帥ヒテ英佛間ノ海峽ヲ涉リ、未タ久シカラザルニ二万五千ノフランドルス人日爾曼人等之レト相合シ勢頗ル猖獗ナリ、始メ英王ノ經畫タルソム河ヲ横過シ直チニ巴里ヲ衝ントスルニ在リタルガ如シ、然ルニ英王ト日帝トノ聯合タル素トヨリ衷心ヨリ出タル者ニアラザレバ其爲ス所自ラ相符合セズ、佛國ヲ分取スルコトニ就テハ各自ニ猜疑ノ念ヲ懷クコナレバ、此猜疑ヤ終ニ兩國公然タル敵意ヲ生シテ其終リヲ告グルニ至リタリ、此役ヤ英王ヘンリーハ日帝ノ軍ト相合スルコトヲ爲サズシテブローンニ圍ヲ置ケリ、古ノ記者此ヘンリーノ軍狀ヲ記シテ曰ク、英ノ前軍及ヒ後軍ハ各々一万二千ノ歩兵五百ノ輕騎兵一千以上ノ胸板長鎗兵ヲ以テ編成シ、其軍服ハ綠色ナリ其粧飾ハ赤色ナリ、之ニ交フルニ愛蘭ノ兵一千人アリ、膚ニハ密着シタル長衫衣ヲ着ケ、覆フニ外套ヲ以テシ、其頭ハ長髪ヲ垂レタルノミニテ別ニ之ヲ蓋フ者ナシ、此愛蘭兵ハ

日帝シヤト
一テルリ
ニ侵入ス

各々三ケノ標鎗ト一ケノ長刀ヲ提ケ、銃製ノ防禦器左腕ニ懸レリ、中軍ハ英王自ラ帥ユル所ノ兵ニシテ、歩兵二万騎兵二千ヨリ編成シ、軍服ハ紅色ニシテ之ヲ飾ルニ黃色飾ヲ以テセリ、大砲一百門小砲之レニ稱フ、馬一頭仕懸ノ磨車一百ト數箇ノ籠ヲ貨車ニシ運ブハ、兵士食料ノ麵粉ヲ用意シ麵包ヲ燒ンガ爲メナリ、此等ノ貨車及ヒ他ノ武器運載ノ貨車ハ二万五千ノ馬ヲ要シ、加フルニ一万五千ノ牡牛及ヒ他ノ無數ノ動物ノ首尾相接シテ來ルハ、之ヲ以テ兵士ノ食料ニ供スルガ爲メナリト、日帝チヤーレンス及ヒ英王ヘンリーハ共ニ佛王ト和ヲ講ゼンコトヲ望ミタリシガ、日帝ハ其連戰連勝ノ勢アルニモ拘ハラズ、講和ノ先鞭者トナリタリ、抑々此役ヤ日帝ハシヤト一テルリ迄進軍シタル者ナレバ巴里ヲ去ルコト僅カニ二日程ナリ、巴里ノ人民之ヲ聞キ驚愕慌忙、陸路ニ依テ遁ル、者アリ、水路ヲ經テ北グル者アリ、之レガ爲メセーレン河ハ逃避者ヲ乗セタル小船ヲ以テ充滿シ、若シ之ヲ制セザレバ巴里城中ハ日ナラズシテ空虚トナラントス、佛王巴里ノ動搖ヲ聞キ急ニフオンテーンブローヨリ巴里ニ歸リ、ゴイズ侯ヲ伴ヒ騎馬ニテ巴里ノ市街ヲ奔走シ市民ノ動搖ヲ鎮靜シ、